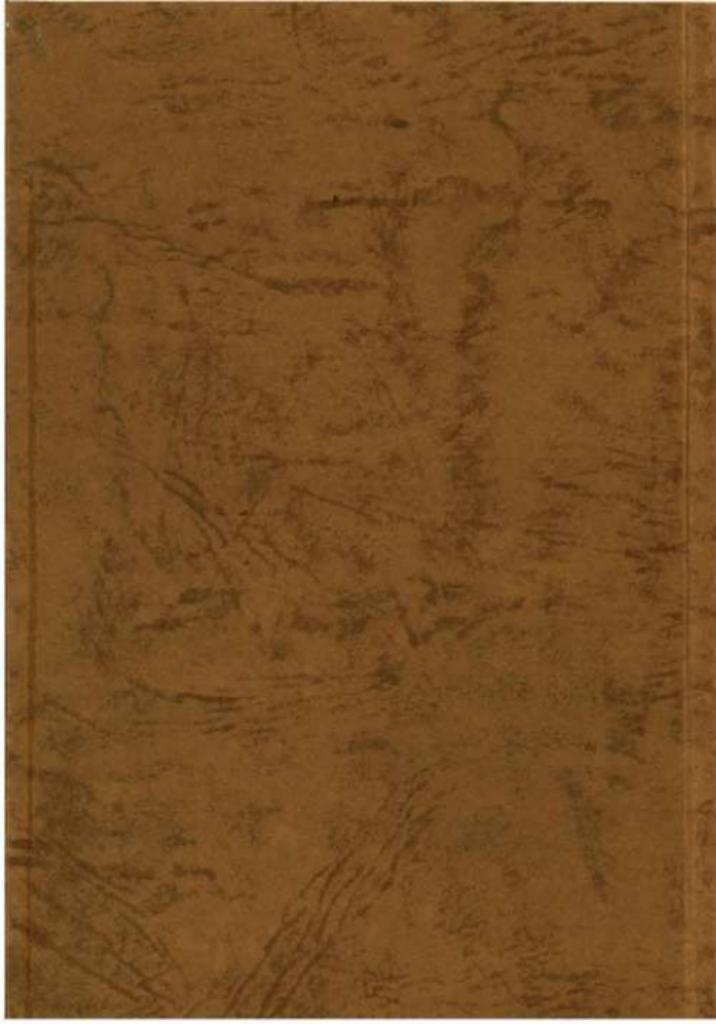


八尾あれこれ

文化財講座記録集 2



# 八尾あれこれ

文化財講座記録集 2

## はじめに

昭和二三年四月、河内平野に位置する八尾町を中心として近隣五ヶ町村が合併し、人口六万五千人の田園都市・八尾市が誕生し、その後二年までに、さらに周辺五ヶ町村を合併、市域四〇・〇五平方キロ、人口二七万七千人の近代都市に成長し、昨六二年、市制施行四十周年の記念すべき年を迎えた。

雲雀がさえずり、蛙の鳴く田園都市から住宅と産業と観光をあわせもつ中堅都市へ、さらに緑豊かな文化の香り高い永住魅力ある快適なまちづくりへと、公共・民間の相次ぐ開発とともに、八尾市のイメージも大きく変わりつつあります。

しかし、河内平野は、古くから先人の活躍の舞台として重要な役割を果たしてきた地域であり、八尾市にも貴重な文化遺産が数多く残されています。

そこで、これらの文化遺産を保護・保存・継承するため、去る昭和五七年七月、財團法人八尾市文化財調査研究会が設立され、市教育委員会文化財室の実施機関として各種文化財の調査、研究を行い、貴重な文化財の保護・保全とともに、市民文化の向上と發展に寄与すべく日々地道な努力を続いているところであります。

最近、特に埋蔵文化財の発掘調査についての国民の関心が高まっていますが、先年來、

市民の方々により広く文化財についての関心と興味を持つていただくため、諸先生方に  
お願ひ申し上げ八尾市に関連する文化財や歴史等についてご講演をたまわりましたので、  
そのうち昭和六一年度以降の講演内容の一部を、六二年三月刊行の統編として、文化財  
講座記録集「八尾あれこれ2」としてまとめてみました。

どうか熱心にご講読たまわり、八尾市の文化財や歴史を考える参考にしていただければ幸いと存じます。

なお、ご講演たまわりました諸先生方にあらためて深甚なる感謝の意を表します。

平成元年三月

八尾市文化財調査研究会

理事長 福島 勝

孝

目次

美園遺跡を調査して

1

苔振遺跡を調査して

27

高安古墳群について

53

久宝寺遺跡発掘調査の成果

93

柏原市域発掘調査の成果

119

美園遺跡を調査して

古墳発掘よもやま話

美園遺跡を調査して

(財)大阪府埋蔵文化財協会

渡辺昌宏

美園遺跡といいますのは、八尾市の美園町周辺、近鉄大阪線久宝寺口駅のすぐ北側に広がっています。現在は、八尾市の遺跡分布図の方で、佐堂遺跡の中に含めてとらえている遺跡です。この遺跡は、東西方向約五〇〇メートル、南北方向約六〇〇メートルの広がりをもつと考えられています。遺跡の真中に近畿自動車道が建設されることになり、昭和五六年の四月から昭和五九年一月まで約二年弱ですが、発掘調査を行いました。遺跡の東西の広がりについては、すぐ東側を八尾市教育委員会の方で、発掘調査を行つてまして、ちょうど弥生時代と古墳時代の接点となるような時代の集落跡が見つかっています。又、弥生時代の遺物も発見されています。そういうのも含めて、大体東西の広がりが五〇〇メートルあるだろうと、推定しておるわけです。

発見の契機は、昭和五〇年一二月に大阪ガスのガス管を埋設する作業を中心環状線に沿つて行つたわけですけど、その際の調査で見つかっています。その後、近畿自動車道の調査ということで、先程申しましたように、第一次調査として試掘を兼ねて、昭和五五年九月に遺跡の深さを確認するという調査を行つています。この時は、現在大阪府の教育委員会におられます玉井さんと大阪文化財センターの小野さんのお二人が調査されています。それを受け、昭和五六四年から私と、先程申しました文化財センターの小野さんと、現在大阪府教育委員会にいる岡本さんの三名で調査に取組かりました。発掘面積は約一万平方メートルでしたが、河内平野特有の遺跡で遺構の重なりが何面にもわたつて出てきました。一番古い時期は縄文時代晩期で、一番新しい

## 美園遺跡を調査して

時期はつい最近の江戸時代から明治・大正時代までです。大体遺構（昔の人が掘り込んだ穴・建物跡）が出てくる面の枚数が、八面から九面ありました。多い所では一〇面以上ということで、総面積に換算しますと約八万平方メートルの発掘調査を約三年かけて行つたわけです。当初の試掘調査では、弥生時代の前期と古墳時代の初め頃、庄内・布留式といわれている遺物が見つかっておりました。これらの時期を中心として出てくるだろうと、ある程度推定しながら本調査に取掛かつたわけです。

今日、スライドでご覧いただきます美園古墳という方墳が発見されました。古墳の名称、遺跡の名称ともそうですけど、多くの場合その地名をとりまして、美園町に所在しておりますのですから、美園古墳という名称を付けたわけです。美園遺跡は主要な時期として、今言いました他に、大きく八つの時代の遺構が見つかっております。特に弥生時代後半から中期初頭にかけての集落跡、これは河内平野に限らず、大阪府下の弥生時代前期と言われております米作りを最初に始めた時代ですけども、その時代の村としては、極めて良好な姿で発見された方です。それから弥生時代後期末から古墳時代前期の初頭ないし、古墳時代前期、いわゆる庄内式・布留式と呼ばれている時代の村跡、水路跡、および先程申しました美園古墳、その他木棺墓等のお墓ですね、そういうものが見つかりました。それらと一緒に当時の人達が使って廃棄した遺物が多量に出でました。ふつう我々がコンテナと呼んでいる、縦六〇センチメートル、横四〇センチメー

トル、深さ一五センチメートルの大きさの箱で約一千箱分の遺物が出土しています。現在それは大阪文化財センターの長田分室の方で保管されて、報告書を作成するための整理作業を行っています。美濃遺跡の概要につきましては、すでに概要報告書という形で、昭和六〇年春に出版しております。正式報告はこれからさらに整理を進めて、今後、随時刊行していく予定と聞いております。

考古学の話はどこでもそうなんですが、どうしても堅くなりがちでわからない言葉がたくさん出てきます。最近新聞の報道で、ほぼ毎日と言つていいぐらい、こういうものが発見されたという記事が出ています。昨日も私が所属しています大阪府埋蔵文化財協会の方で調査した遺跡から、舟の舷ではないかという木製品が出土した記事が載っていたんですけど、現場を担当しているものは、「可能性はあるけれども断定できない」ということで、新聞記者の方に話したことが、「舵である」と新聞に載つたり、そういうことも度々あります。マスコミ受けするものと、私もが考えていることが食連つたりすることがあります。先日、藤井寺市で近鉄バッファローズの梨田選手の家から、旧石器時代の住居跡が見つかったとか、それから随分前になりますけど、修羅が発見された際には、新聞・テレビ等で大きく報道されましたので、見学者の方もたくさんお見えになりました。やっぱりマスコミの力というのは大変なものだと我々も感じておるわけです。ただ、先程言いましたようなトラブルがあつたりしますが、それもひとつには皆さんに知つてい

ただこうという、努力の一端になるんだろうと思ひます。

大阪というところは、遺跡がたくさんあるところなんです。現在大阪府教育委員会が、八尾市教育委員会及び府下の市町村の協力を得まして、大阪府埋蔵文化財分布図という遺跡分布図を改訂する作業を進めており、それで正式に遺跡の数が確定するかと思ひますが、大体六千箇所前後あるということです。特に八尾市域というのは、中河内地域の中心地ということで、昔から遺跡がたくさん知られているところです。特に最近は開発に伴つて見つかる遺跡がたくさんありますて、おそらく市域の半分以上の面積が何等かの遺跡の範囲に含まれるような、そういう状態ではないかと思ひます。

これからお話しする美園遺跡も、八尾市内にあるわけですけども、八尾市域の遺跡をみた場合に、大きく立地の点から三つに分けることが可能かと存じます。一つは、生駒の山麓部分、あるいは生駒山地の上に営まれた遺跡です。一つめは、かつて河内潟があつたいわゆる河内平野部、繩文時代まで潟が残っていたところですけど、そこに残された遺跡です。三つめは、市域の南側に広がっています低位段丘面、これはずっと南側の羽曳野丘陵から延びてくる段丘の上に位置する遺跡です。これには地下鉄谷町線の延長工事で、駅前の調査をしました八尾南遺跡、そのあたりが低位段丘の先端に位置する遺跡になるかと思ひます。これからお話しする美園遺跡は河内平野部の真中位にある遺跡かと思ひます。

又、生駒山地周辺には後で説明しますけども、西の山古墳とか心合寺山古墳という前・中期の古墳や、あるいは後期の群集墳の高安千塚、それに高安城跡といった古代の山城跡等の遺跡があります。山麓の斜面にも集落跡がたくさん見つかっております。

日本の考古学というのは、古くは江戸時代ぐらいから始まるわけですが、本格的には明治一年の大森貝塚の発掘で、第一ページを開くわけです。近畿地方の場合には、同じ頃に大阪造幣局の技師でゴーランドという方がおりまして、その方が古墳の測量をたくさんなさつております。ゴーランドの影響で古墳の測量がより精密になつたという経緯もあります。大正時代に入りまして京都大学の浜田耕作という方が新しく考古学の講座を開設して、それから考古学の研究が盛んになったと言えます。ただ、日本の考古学研究の場合には、どうしても古墳時代を中心とした歴史、そういう見方がとられることが多いんです。特に古墳というのは、集落跡と違いまして、外見から見る理解の速さというんですか、外側から視覚に訴えられる遺跡ですから、研究も昔からいろんな方がたくさんなされておるわけです。ただ、古墳時代中心の研究であるがために、弥生時代、縄文時代とそれより以前の時代については、前史的に扱われがちだということがあります。最近はそういう傾向も薄れて各時代の研究が進んでいるわけです。ただ、古墳時代の研究自体も、実は古事記とか日本書紀という神話の世界をもとにした昔からの文献ですね、その記述にたぶんに影響される傾向があります。それらの文献の記述は、決して無視していいものと

いう訳ではありませんで、確かに多くの事実を語っている場合があります。

大阪の古墳について簡単に触れさせてもらいます。古墳の集まっている場所から見ますと、有名なものでは古市周辺に分布する古市古墳群、これは応神陵を中心にしております。それから堺の大仙公園のところにあります仁徳陵を中心とした百舌鳥古墳群という一つの大古墳群があります。それ以外に生駒の山麓ないし生駒山側に高安千塚、平尾山千塚等の群集墳が集中しています。それと南河内の方にも、須賀古墳群に代表される群集墳があります。それから上町台地の上にいくつかの古墳がのっており、最近、天王寺公園の中にあります茶臼山古墳も、それが果たして古墳であるかどうか論議を醸しております。それ以外では、淀川の北岸部分の段丘面、丘陵上にたくさんの古墳がのっています。いわゆる北摂の古墳群と言われておるもので、大きいくうと、古市・百舌・上町台地・北摂の古墳、あるいは生駒の古墳群というふうなものが、八尾周辺をとりまいています。最近の調査で、特に先程ふれましたけども、地下鉄谷町線を八尾南まで延ばす時の調査で、長原遺跡、あるいは八尾南遺跡で、壙された古墳というのがたくさん見つかったわけです。それが発見されてから特に平地部の古墳のあり方というものが、盛んに注目されるようになりました。実際、美園古墳もその中に含まれるわけです。長原・八尾南遺跡で見つかっているような古墳というのは、方墳といわれている古墳が多いのですが、これらは一辺が一〇メートルぐらいのものが大部分です。その総数は、百以上と言われてますけども、それだけ

古墳が集まっていたところが、現在はほとんど削平を受けておりまして、地上からは古墳の痕跡を見ることができない状態です。大部分が地中に埋もれている古墳群ということです。これからスライドで見ていただきます美園遺跡についても、地表からは古墳があつたということが全くわかりませんで、発掘して初めて古墳があつたということがわかつたようなわけです。

それではスライドをご覧いただいて、それから後でお話しさせていただきます。

この地図は美園古墳を中心とした美園遺跡の全体です。旧大和川（長瀬川）が形成した平野が河内平野であると言えるわけです。そのすぐ北東側に美園遺跡が広がっています。ご覧になつておわかりかと思いますが、遺跡が串団子のように上から順番に連なっておりますが、これはここに遺跡が集中するというのではなく、たまたま道路を建設する際に、試掘調査というのを行いまして、遺跡が見つかったということです。ですから、その周辺に、もっと遺跡が広がっている可能性があるわけです。美園遺跡に限らず、河内の沖積地の中にある遺跡は、地表から深い所で四～五メートル、特に縄文時代の層ですと、六メートル位の所にあります。その深さまで発掘する関係で、まわりに鋼矢板を打ちまして、土留めをしております。土留めが発掘調査費用の五〇パーセントにあたるという、たいへん高価な調査になつたわけです。全長で約六〇〇メートルのトレーナーを入れております。幅が一〇メートルづつで、北から順番にA地区、B地区、…G地区と七つの調査区を設定しています。これは水路とか里道の関係でどうしても調査区が切れるために仮

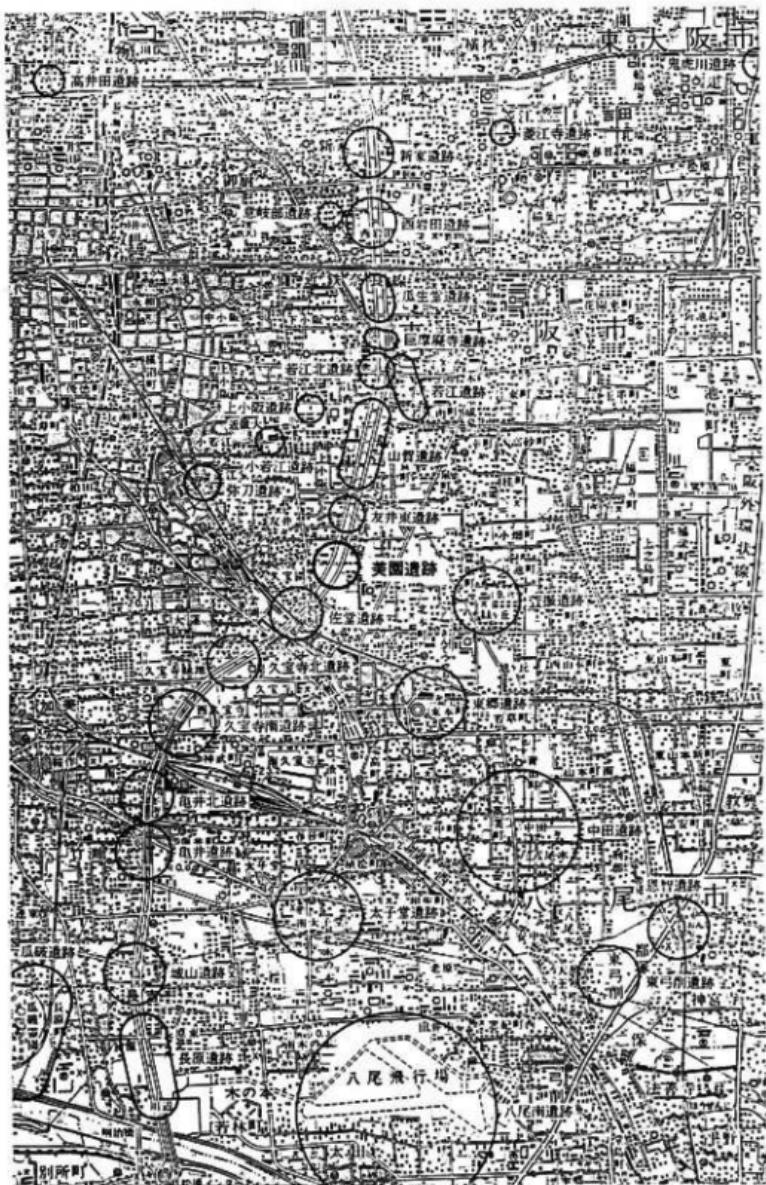


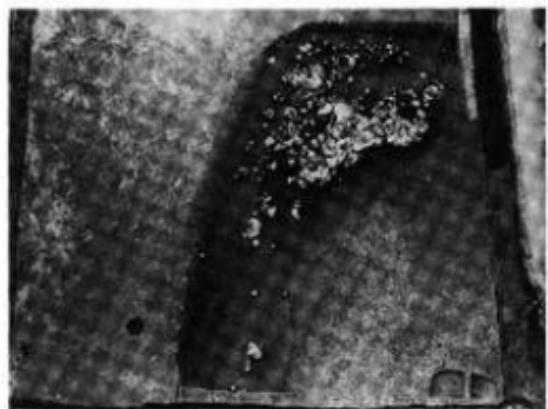
図1 美國遺跡位置図(「美國」(財)大阪文化財センター1985より)

## 美園古墳を調査して

称した地区です。

美園古墳が見つかったC地区の状況は、平安時代ぐらいに、条里に添わした大きな水路を掘削しているんですが、それが古墳の掘をかすめており、一部は水路によって壊されています。地表から約一メートル位の深さのところから古墳の痕跡が見つかったわけです。古墳は、普通は封土と言いまして、盛上げて土まんじゅうを作るんですけども、その部分がすでに壊されていました。

写真1 美園古墳全景（南から）



古墳自体が削られた時代は、たぶん六世紀後半以前の時期だと思います。この古墳の上には、六世紀後半の包含層が堆積しておりますから、それ以前に削られているとということです。これは、<sup>(参考)</sup> 堀の中に埴輪が固まって出てきたところです。ちょっと形が不定形な堀なんですけどもコーナーで曲がって四角になる方墳だと思われます。このコーナー部分が、調査の時にきわめて見つけにくかつたということで、多少掘り過ぎぎみで、そのため形が歪んでおります。

これが埴輪の出ているところを、北側から近づいて撮ったところなんんですけど、ご覧のように壺形の埴輪と



写真2 圓溝内埴輪出土状態(北から)

か家形の埴輪が、周囲の角の所に固まつた状態で出土しているわけです。出土状態も向こう側が高くて、こちら側が低いという斜めの傾斜をもつて、埴輪がころがっているわけです。古墳を削り落とす際に、上にのっていたものを一緒に削り落としたという状態が観察されるかと思います。土層断面に若干古墳の盛土らしいものが見えるんですけども、ほとんどは後世に擾乱を受けていまして残っていませんでした。わずかにこの辺に少しだけあるという状態です。

出土した家形埴輪には赤色がきれいに残つておりました。

ベンガラが、酸化鉄をヘンガラと呼んでますけど、塗つてありました。他の壺形埴輪の表面も風化しているんですけど、残りのいいところを見てみると、みんなベンガラが塗つてあったようです。埴輪には全部赤色が塗つてあるということがわかりました。こういうことは他の古墳でも見られることです。

また、壺形の埴輪も見えますが、これは壺形埴輪の中でも丸みをもつた、本当に壺の形をした埴輪なんです。これは下の方から出でています。これが下の方から出土するということは、早くから転落していたというか、壠の中に落込んでいたんだろうと思います。ある程度の間隔で、割合



写真3 壺形埴輪



写真4 家形埴輪1(高床住居)

い離れて出てくるわけです。この古墳自体は一辺が七・二メートルと極めて小規模な古墳でして  
こういう壺形埴輪は全部で二五点以上出ております。<sup>(写真3)</sup>家形埴輪が二点と若干の土器も出土しています。たぶん古墳の上に副葬されていたんだろうと思います。古墳の上の方では一辺六メートルくらいの幅しかなかつたろうと思うんです。ですから三六平方メートルぐらいの中に、これだけの埴輪を乗せると、ほとんど足の踏み場がないというような状態です。又、多分埴輪と一緒に並んでいたと思われる高杯という拂げものをする土器も出てきました。堀の底から浮いた状態で出てきていることから、堀がある程度埋まって、古墳の墳丘が削り取られた際に、一緒に転がりこ

んできたものだということがわかります。

この遺跡だけでコンテナに二千箱近い土器が見つかったわけです。この埴輪だけでも三〇箱近い量が出土しています。

これが出てきた埴輪です。

(説明)

特に高床住居になるこの埴輪は、極めて精巧に作っております。出土した当時から、重要文化財に指定した方がいいのではないかという話があつたんですけども、現在検討中というところです。建築史を考える上でも、極めていい資料なんですね。屋根のところに鰐飾りという飾りを持っていまして、一見すると大陸風の家なんです。鰐飾りは当時の埴輪には必ず付く飾りとして、実際の家にも飾りが付いていた可能性があります。さつきの出土状況のように、ばらばらになつて出てきたものを接合して、何とかここまでするのに、四人で一週間かかりました。復原作業も、最初出てきたものを洗って乾かし、それから出てきた地点の番号を付けて、接合していくんです。随分時間がかかるんです。この埴輪がもうひとつ面白いのは、作つてからあけた穴があるんです。この穴にどうも何かを差込んでいたんだろうと思うのですが、差込んでいたものは残つてないんです。それに上台の表現があつて、二階の部分にもそういうものがあるんです。これをねずみ返しだろうという人もいるんですが。本来、遺跡で見つかる当時の家は、みんな柱が丸いんですけども、埴輪を作る関係でこういう風にひらべつたく、方形の表現をしているわけだと思います。この時代にはまだ角柱の家はありません。

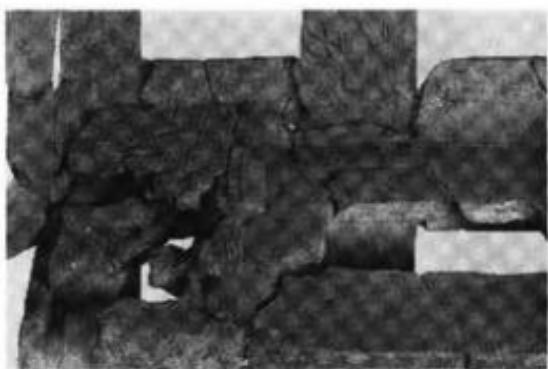


写真5 家形埴輪1内部ベッド状施設

これが、高床の二階部分の住居空間です。ここに付いているベッド、いわゆる寝台か床か、これを、呉の国の床ということで、呉床と呼ぶ場合もあるんだそうです。竹があるのは纖維で編んだような市松模様というんですか、四角に刻んで、縦と横に線が入っています。これは多分網代の表現になると思います。ですから敷物を敷いてあつたということです。ちょうど真中に、四角い穴があいているんですけど、これはどうも埴輪を焼く際に火のとおりを良くするための穴のようです。ですから、このベッドの下にも、そう穴が三つほどあります。この建物の入口はどこかということなんですね。でも、この下からはしごで登る、でなければ入口はこここの部分しか残ってないわけなんです。ですからこちらの部分、ベッドの反対側が入口になる可能性があります。

これは側面から見たところです。こういうふうに二階の中央の柱部分には、線刻が見えます。粘土がまだ完全に乾ききらないうちに、先の尖ったもので刻んだようです。盾を表現しているんですが、この盾は上端が平らな盾で、現在石神神宮に鉄製のものが伝世しています。そういうものと極めて形が似ています。他の三面のものは、上端が丸くて多分毛を植



写真7

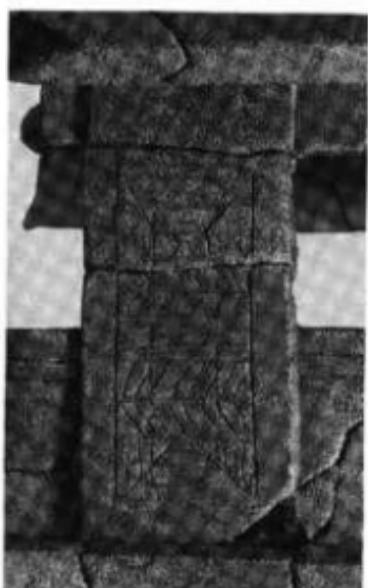


写真6

え込んだんだろうと思ひます。平城宮から隼人の盾というのが出土しているんですが、そこにも馬の毛を植え込んであつたような痕跡があります。（云々） こういうふうに上端が、丸みを持った盾の表現をしております。多分家畜の毛だと思ひます。こういう盾の現物も、古墳の調査で発見される場合もございます。つい最近も豊中市の大塚古墳から見つかっております。このように線刻で盾を表現しているということです。鋸歯文（くわいぶん）と言つて、三角の組合せをしているんですけど、実際発掘で出てくる盾にも、この紋様が見られま

す。

これは屋根の部分で、入母屋なんです。その入母屋部分の棟木を支える柱です。



写真8 桧木ささえの斗と東

ど、樹木の表現、東の表現ですね、それが線刻で  
行われています。当時の家にも、すでにこういう  
棟木を支えるための構造物があつたということが  
わかります。こういうのも、破風板の表現になる  
わけです。これの反対側にも、同じような表現が  
あります。多分、円盤状の飾りが貼り付けてあつ  
たんだろうと思います。それが剥がれて、破片と



写真9 家形埴輪 2(金庫)

しては出てこなかつたんですけども、建築学的にも、極めて貴重な資料です。古墳時代から、かなりしっかりと建物があつたということの証明につながる資料になるかと思います。

（写真10）

これはおそらく倉になると思う家形埴輪なんです。なぜ倉になるかと言いますと、入口以外に窓がないんです。先程の住居と考えているものは、窓が四面にそれぞれついています。この建物は窓のないかわりに、多分壁の板



写真10 内部の扉軸受

材か壁を固定するための表現が三列に亘って縦杉という模様がヘラの先みたいなもので刻んであります。それ以外の構造では、屋根の作り方を見ても類似しています。この埴輪の内側に、扉の、たぶん軸を受けた所に窪みがありまして、上に輪がついているわけです。扉は出土していませんけど、たぶん扉が付いていたようで、内開きの扉です

けれども、そういうことも含めて想像するとかなり精巧に作った模型みたいな感じがするんです。ただ、内面にはベンガラという酸化鉄は塗つていません。先程の高床の住居はベンガラが塗つてありまして、かなり中まで意識した埴輪だということです。こちらはベンガラは塗つていません

ですが、それでも扉が付いています。ちょっと時代は新しくなるんですが、扉の実物も最近長原

遺跡で見つかっています。長原遺跡の場合には、窓の戸になると思われるものが、井戸から見つかっております。両端に軸の構造がついているようです。

見にくいスライドもありまして恐縮だったんですが、美園遺跡と美園古墳の姿は、今スライドでご覧になっていただいたとおりです。残念ながら墳丘が削られていたために、人間の遺骸を埋葬した場所が残っていませんでした。ただ、先程説明しましたように、墳丘の上では一辺が六メートルぐらいの小規模な古墳でありますながら、埴輪はすぐれたものをもっていました。なおかつ、普通は円筒埴輪というものを並べるわけですが、特殊な壺形埴輪というものを並べています。

お手元にお配りしています資料に近畿地方の主要な（大阪府を中心とした）古墳から出てくる壺形埴輪を並べてみた図があります。美園遺跡から出ているのは、3番と6番と7番という壺形埴輪です。量的にいうと、5番といわれている壺形埴輪が九〇パーセントをしめるという状態です。1番目は奈良県の箸墓古墳から出土したもので、この古墳は最古の前方後円墳の一群と考えられている古墳です。これをなぜ、壺形埴輪と呼ぶかと言いますと、図では分りにくいけれど、底の所が抜けているんです。最初から壺として作っているのではなくて、焼く前から底をぬいでいるわけです。ですから器ではないといえます。それから2番目は、桜井の茶臼山古墳から出土した壺形埴輪です。3番目が豊中の小石塚古墳から出土した壺形埴輪です。実際はつながらないために図の間があいてます。ただ、5番目にあります壺形埴輪と比べると、体部の張りな

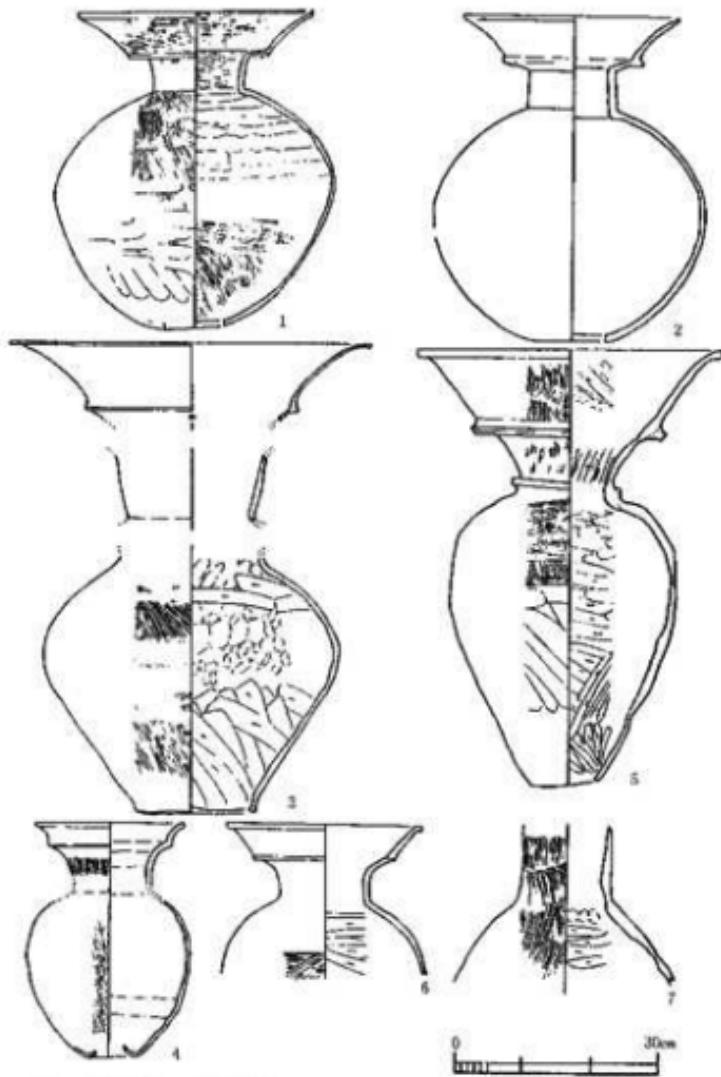


図2 各古墳出土の壺形埴輪

## 美園遺跡を調査して

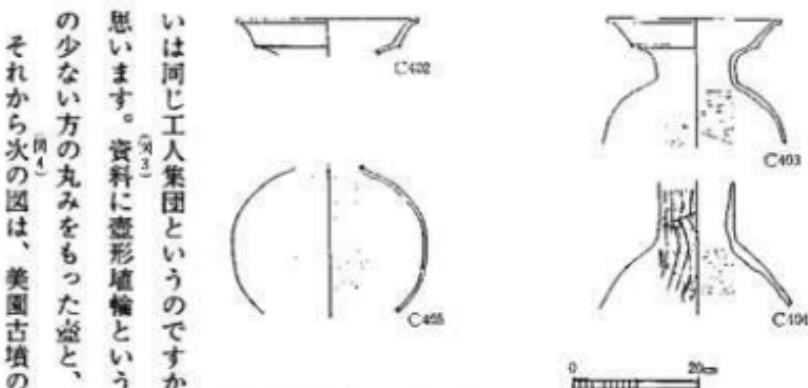


図3 美園古墳出土の壺形埴輪

んかが違うんです。内面調整の方法は、極めて類似している、削っている様子が良くわかるんです。美園古墳のものとほぼ同時代に作られた、壺形埴輪だらうと思います。4番目が、羽曳野の壺井御旅山古墳から出た壺形埴輪です。これは、底部の内側が大きく曲がるというんですか、内側にまくられているような壺形埴輪です。ちょっと底部の形態が変わっています。6番目が、最初に転落したんだろうと思われる美園古墳から出た壺形埴輪です。7番目は、口縁部がついてなくて壺形にしては特殊なものがこれ一点だけ見つかっております。壺形埴輪の5・7をよく較べますと、胎土の感じも似ておりまして、細かい刷毛目の状態なんかも類似しているので、おそらく同じ人が作ったのか、あるいは同じ工人集団というのですか、そういう人達が作ったものだらうということは間違いないと思います。<sup>(8)</sup> 資料に壺形埴輪ということで、四点載せてあります。これらは美園古墳から出た、数の少ない方の丸みをもった壺と、一点だけ出てくる首の細くなつた変わった形態のものです。

それから次の図は、美園古墳の周囲の中から出てきた土師器です。左から二番目の高杯が、先

で、削っている様子が良くわかるんです。美園古墳のものとほぼ同時代に作られた、壺形埴輪だらうと思います。4番目が、羽曳野の壺井御旅山古墳から出た壺形埴輪です。これは、底部の内側が大きく曲がるというんですか、内側にまくられているような壺形埴輪です。ちょっと底部の形態が変わっています。6番目が、最初に転落したんだろうと思われる美園古墳から出た壺形埴輪です。7番目は、口縁部がついてなくて壺形にしては特殊なものがこれ一点だけ見つかっております。壺形埴輪の5・7をよく較べますと、胎土の感じも似ておりまして、細かい刷毛目の状態なんかも類似しているので、おそらく同じ人が作ったのか、あるいは同じ工人集団というのですか、そういう人達が作ったものだらうということは間違いないと思います。<sup>(8)</sup> 資料に壺形埴輪ということで、四点載せてあります。これらは美園古墳から出た、数の少ない方の丸みをもった壺と、一点だけ出てくる首の細くなつた変わった形態のものです。

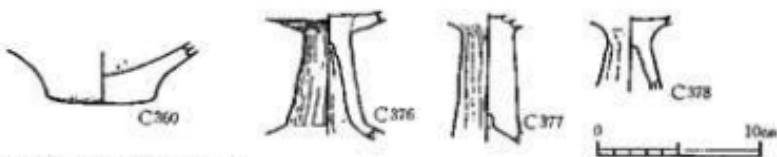


図4 美園古墳出土の土師器

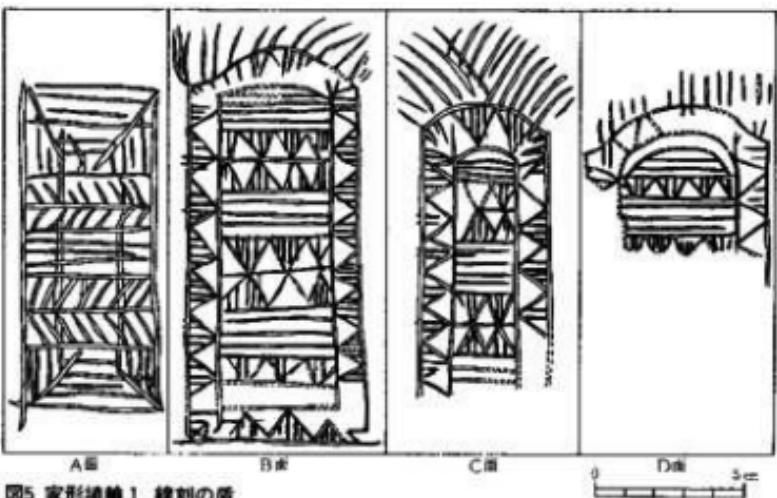


図5 家形埴輪1 線刻の盾

程スライドの中で説明しました。高杯です。これが美園古墳の造られた時期を示す土師器になるのではないかと思うんです。残念ながら、高杯だけで時期を決定するということには、この時期の場合難点があります。それからその下を見ていただきますと、線刻した盾の実測図があります。家形埴輪の各面の中央に盾A、B、C、Dの線刻が見られます。当時の盾というのは、皮に漆を塗りまして、黒漆あるいは赤漆で色分けして文様を描いております。皮は、木芯の上に張っており、極めて精巧な

造りの盾を使っていたようです。この様な盾は、古墳に葬られますような「首長」、いわゆる豪族といったらしいんですか、そういう人達の階級を表していたのではないかと思われます。このような豪族が使っていた盾、同時にそれは美園古墳から出てくるような家形埴輪というのも、古墳に葬られるような人が住んでいたということが、ある程度推測されるのではないかでしょうか。ただ、古墳の上にそういうものを置くということが、考え方によつては、魂の依代みたいな発想をする方もあります。しかし、今の段階では必ずしもそういうことだけではなくて、古墳に葬られた人物が、生前住んでいたものを忠実に模倣し、あるいはそれを埴輪として、強調して表現していることがあります。

出土遺物が埴輪を中心としていますので、美園古墳の場合には、埴輪の話が殆どになります。こういう小規模な古墳で多量の埴輪を伴つてゐるとなりますと、まるで埴輪が主役の古墳のようにも思われます。遺骸を入れる内部主体にたくさんの宝物、当時の貴重な鏡であるとか、玉であるとか、甲冑等を副葬していますけど、そういうものに比べたら、価値の低い遺物として埴輪は見られがちなんです。美園古墳の場合には、埴輪が古墳の大きさに比べて、たくさん出土していることが特徴的かと思います。

図6を見ていただきますと、美園古墳のすぐ右側に萱振古墳、これも大阪府の教育委員会が高校の校舎を建築する際に、調査して見つかった古墳です。一辺が二六メートルほどの方墳です。

「ここでも縦」という矢を入れる大形の埴輪がみつかっております。ここも方墳の規模が一・六メートル前後と小規模でありながら、埴輪をたくさんもつています。美園古墳と異なるのは、埴形埴輪ではなくて、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪、これは口が朝顔のように開いてるので、朝顔形円筒埴輪と呼んでいます。美園古墳の埴輪は朝顔形埴輪と埴形埴輪が合体したような形態です。ですから地面上に穴を掘って入れないと転んでしまいます。古墳の上に穴を掘って立てたということが考えられます。巨摩古墳は五世紀後半の古墳の痕跡が見つかっています。そればかりではなく、埴輪としては四世紀の終わりぐらいのものが出土しています。おそらく、それぐらいの時期の古墳があるんだろうと思います。それから美園古墳・黄振古墳・西の山古墳・花岡山古墳、それらが四世紀後半から末にかけての古墳です。

大阪では、古市古墳群・百舌鳥古墳群といった大古墳群があるために、かなり古くから古墳が造られたと思われがちですけども、古墳がたくさん造られだすのは、四世紀の後半ぐらいからです。大和の場合には、それより早くからたくさんの方後円墳が造られますけども、河内の場合には若干新しくなるようです。古事記・日本書紀等の文献から導きだされた、いわゆる河内王朝説というのがあるんですけども、文献の方からいくとそういうことがいえるようです。しかし四世紀の古墳は、どうも大和に集中するようです。ですから、大和にそういう中心的な古墳を作る権力ですか、いわゆる大王權といったものが四世紀代から存在したのではないかと思われます。

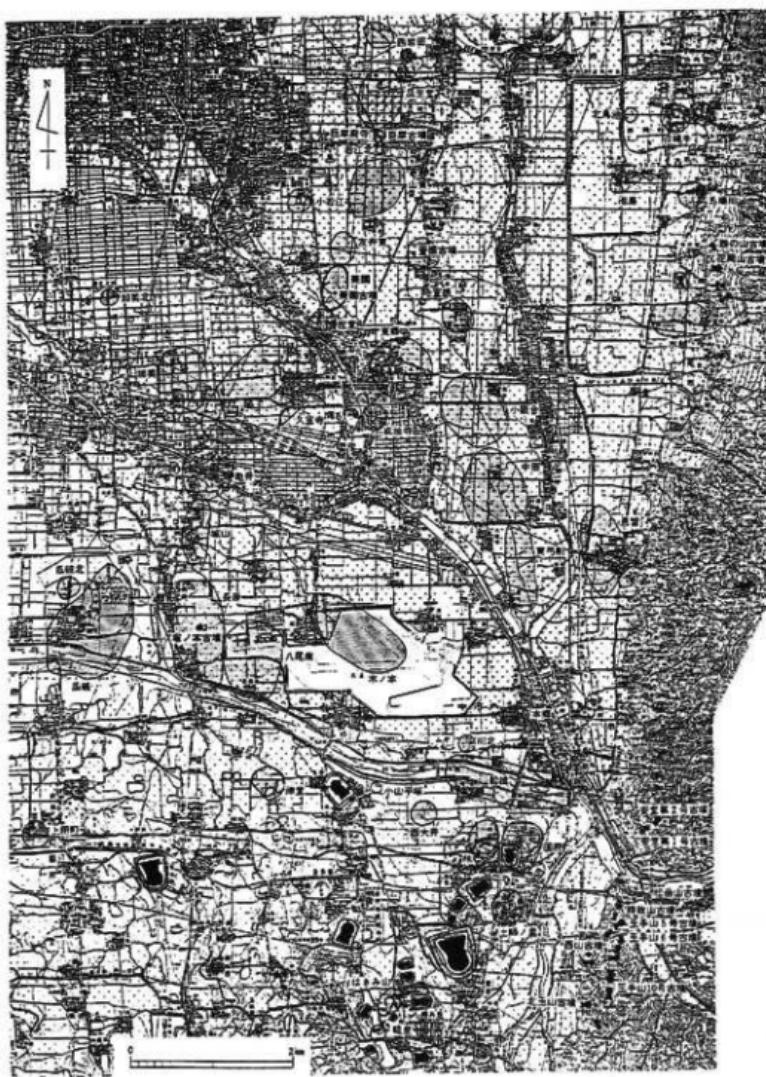


図6 周辺の弥生時代後期～古墳時代前期遺跡分布図

大阪でそういうものが本格的に出現してくるのは、美園古墳の次の時期にあたる、五世紀になつてからと言えるようです。それと下にあります塚ノ本古墳、これは先程言いました地下鉄谷町線の延長工事で見つかった古墳ですけど、これも長く前方後円墳と違うかというふうに言われてたんですけど、今までの調査ではまだ円墳なのか、前方後円墳のかはつきりしません。どうも円墳らしいということです。ただ、円墳の場合でも、一边が六〇メートル級の円墳ということになりますと、これも東大阪市に同じような規模の、えのき塚古墳というのがあるんですけども、大規模な円墳になるだらうと思います。八尾空港のすぐ南側に、この岡で見ますと下側に津堂城山古墳があるんですけども、この古墳も美園古墳とほぼ同時期で、四世紀の終わりから五世紀の初めという時期に造られた古墳であると考えられています。いわゆる中期古墳といわれているものに位置付けています。

美園古墳がこういう古墳と極めて時期が近いと思われます。津堂とか塚ノ本とかいった大型の古墳に比べれば、非常に小規模でありながら、埴輪だけは優秀なものをもつてゐるということと、当時の政治的な関係が背後にあると思われます。当時の社会というのは、本質的には氏族とか部族の構成する社会なんだろうと思いますが、それが崩壊していく中で、政治的な関係が培われていくと考えられます。これは仮説の話ですけども、河内グループの王を選出した際の、王を支えるバッカとなるいくつかの集団の首長が存在したと想定されます。その首長の墓が美園古墳に

なつてくるんではないかと考えられます。

五世紀の後半になると、今度は長原古墳群に代表されるような小規模な方墳が、美園古墳の周辺にもたくさん造られるようになります。その時代になりますと、極端に言いますと、ひとつの集落ごとに古墳が造られるような、そういう状況が生れでてきます。美園古墳が造られた四世紀末ぐらいまでは、いくつか集落がまとまって、ひとつの古墳を造るような、いわゆるその首長権の範囲というのが、まだ広いという感じがするんです。

それと、さつき津堂城山古墳の話を出しましたが、このような水鳥の埴輪が出てきています。津堂城山古墳の場合には、実は二重に巡った周堀の中に、前方後円墳が造られています。この一角に、方形の一辺が一七メートルですか、美園古墳よりひと回り大きいんですけども、その方形の島状のものがあります。その一角に、上端は墳んでいるんですけど、土まんじゅうが作られているわけです。そこに水鳥の埴輪を二個体、雄と雌なのかもしれませんけど、それからひとつ小さい子供の水鳥ですか、そういうものが置いてありました。そのまわりから、建築部材が出ているんです。それがどうも埴輪を覆っていた小屋の跡になる可能性があるんです。これは担当者の藤井寺市教育委員会の天野さんからお聞きしたんです。そういう話を聞くと、こういう津堂城山古墳のような大形古墳の中にも、埴輪が主役であるような施設が取込まれているのではないか、そういうものも存在するという可能性も考えられます。美園古墳の場合には、遺体を埋めた主体

部というのが見つかっておりませんで、古墳だと断定するのが極めて難しいんですけども、諸条件が古墳の状況を満たしておりますから、おそらく古墳だらうと思います。周辺からは、津堂城山古墳のような大形の前方後円墳が見つかっておりませんから、すぐに津堂城山古墳と比較するのは危険かと思います。ただ、古墳の中には、小規模でありながら埴輪だけが卓越するような古墳があるんだという一例を知つていただければと思います。

全体に取りとめのない話になってしまいまして、「古墳発掘よもやま話」というには、専門的な内容が多かったかもしれませんのが、発掘調査というのはまったく予測しないことがたくさんあります。私も調査を随分と実施してきましたけども、「これは必ず出る」というふうに思つて掘つた遺跡は、たいがいは 없습니다。あまりそういうものを意識せずに調査した遺跡で、たくさんの遺物が出土する例があります。本当は、調査に入る前に基礎的な作業として、分布調査という作業、あるいは地元で研究されている方、地元の教育委員会の方の協力を得て、事前の調査を充分に積重ねてから、発掘調査するのが好ましいことです。現在は、開発のスピードがそれに間に合いませんので、どうしても発掘が先行するということで、予想もつかないものが発見されるケースが多いのです。極端な話ですけども、八尾市内の地表を一メートル、二メートルめくれば日本の歴史の一ページが変わるような、これは極端にすけども、それぐらいたくさんの文化財が地下に埋蔵されています。それらを発掘してしまうことによつて、ある意味では今の人達に知つて

もらうことができますが、壊してしまうことにもなるわけです。それらの兼合いが、非常に難しいところです。ですから宝と云つても、金銭的な値打ちじゃなくて、不可価値のものですけど、そういう宝が我々の足もとにたくさん眠っています。

現に、今日の会場であります近鉄八尾駅周辺というのは、文化財調査研究会の方だとか、教育委員会の方が、随分調査されてますけども、東郷遺跡という弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけての大集落跡です。これはいくつかの地点に分れてますが、その上にこの建物も建っているわけです。ですから、我々の身近の至る所に遺跡が存在していると言えます。ただ、それをどういうふうに現代に生かすかということが、我々に問われているところだと思います。説明の不足しているところはご質問で補わせてもらいますので、取りあえず発表はここで終わらせていただきます。

昭和六一年六月二一八日

於 市立教育センター

古墳発掘よもやま話

萱振遺跡を調査して

大阪府教育委員会

広瀬雅信

萱振遺跡を調査して

ただ今、ご紹介いただきました広瀬でございます。今日は古墳発掘よもやま話・萱振遺跡を調査してという標題で講演させていただきます。

萱振遺跡と申しますのは、ご存じの方も多いと思いますけども、この教育センターからちょっと北の方へ行きました大阪府立八尾北高校という新設高校の敷地内で発見された遺跡でございます。一九八二年に高校新設の計画が出まして、用地の選定をするにあたって、文化財の有無を調べる試掘調査を実施しております。その時に古墳時代の初め頃の井戸や、かなりたくさんの土器が出ております。その翌年から本格的な発掘調査を開始いたしましたが、学校の開校に間に合わずため、非常に忙しい調査で、いくつかの校舎を作つて生徒さんを入れるという形で断続的に実施しまして、実際には今年（一九八六年）の五月までかかっております。全体の面積は大体一六〇〇〇平方メートルぐらいですが、河内平野の低い部分であるということで、堆積が非常に深くて、四面ないし六面というたくさんの中構面ができましたので、実際の調査面積は六万七万平方メートルに近い、非常に大規模な発掘調査になりました。今日は、この遺跡で有名になりました萱振一号墳という古墳のことを中心にお話したいと思いますけども、その前にある程度、遺跡の概要をご説明したいと思います。

たくさんの遺構面があつたと申しましたが、古いところは弥生時代の前期から、新しいところでは鎌倉・室町時代に至るまでのたくさんの遺構と遺物が発見されております。一番古い弥生時

代の前期と申しますと、これは人間の生活した跡ということではなくて、現在の楠根川の前身になると思われる川の跡が出てまいりまして、その中から縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器がいっしょになつて出でています。ただ、その土器は非常に磨滅しておりまして、川の中を流れてきた状態ですので、もう少し離れた遺跡から流れてきたものだと考えられます。弥生時代の中は、この時点で初めて萱振の周辺に人が住み始めたという時期でして、八尾北高校の敷地の中からは当時の水田の跡、それから水田域を区画すると考えられる大きい溝の跡などが出てきました。水田には畦の遺構が残つておりましたし、又、人間の足跡などもたくさん残つておりました。弥生時代の後期になりますと、立派な集落が営まれるようになります。たくさんのお墓と、ゴミ捨て穴と考えられる穴、井戸、溝といったものが出てまいりまして、非常にたくさんの弥生時代後期の上器が出でています。その後は古墳時代の初頭の、庄内式土器とか布留式土器とか呼ばれていて、弥生時代からそのままつながつてくるような、古い様式の古墳時代の土器が出でています。こういう時期にも集落が近くに営まれていたと考えられるんですが、高校の敷地の中からは方形周溝墓と呼ばれているお墓が四基、後の調査では五基になりそうな感じで出でているのです。一辺が一二ないしは一三メートル、一七メートルぐらいあるような非常に大きい方形の区画をもつたお墓が出てきています。集落や人が住んだような跡は発見されていないんですけども、墓を区画するような大きな溝が出てきまして、その溝の中からたくさんのお墓が出てくるのです。

が、その溝の外側、未調査の部分に、多分集落の部分があるのじゃないかと考えます。それから、古墳時代前期になりますと、今日の話題の中心である豊振一号墳という古墳があります。この古墳については後で詳しく述べさせていただきます。その後、古墳時代の中期、後期になりますと、遺物が少なくなりまして、小さな土壇の中に土器がちょこちょこ入っていたり、壺棺がいくつか見つかった程度で、遺構も少なくなります。その後飛鳥時代の遺構はなく、奈良時代に入るわけです。奈良時代の前半には何もなくて、後半になつて非常に大規模な集落が營まれることになります。掘立柱建物という、地面に直接穴を掘つて柱をたてた建物が、ちょうど軸線を東西南北の方向にきっちり合わせて、整然と配列された形で出てきております。集落からは丸木船といいますか、刳船を輪切りにしたようなかつこうで、井戸枠に転用した井戸でありますとか、倉庫などを区画するようななかつこうで出てきている溝でありますとか、たくさんのが奈良時代後半の土器とかが出ています。その土器の中に文字を書いたもの、あるいは人の顔を描いたものがかなりありました。それ以外に、土器を硯に転用したものでありますとか、昔の役人のシンボルである帶金具がありました。帯といいましても、中国風の服装ですので、皮のベルトなんですけども、その皮のベルトの金具が出てきたりしております。集落の性格としましては、普通の一般集落というよりも、公の官衙的な意味合いがあるのではないかというふうに考えてます。ただ、ここは河内の国の若江郡にあたるんですけども、若江郡衙という郡の役所は、別の所にあつたと推定

されておりますので、郡の中にいくつかに別れた郷というのがあるんですけども、その郷（錦織郷にあたる）の役所的な性格をもつた集落でないかと考えております。平安時代の前半まではそういう形で、その集落が存続するのですけども、その後、一時人間の居住がとぎれる時がありまして、鎌倉時代の後半から室町時代、南北朝時代にかけて、又、集落が営まれるようになります。この時には萱振は南朝側と北朝側の戦場になつたという記録がありまして、非常に興味深いところなんですけども、出てきましたものは、普通一般の集落の建物・井戸といったもので、大規模な集落が営まれていたことがわかります。その後は、今の萱振の中に恵光寺という真宗のお寺さんがありますけど、その恵光寺を中心とした環濠集落、まわりに堀を巡らせた村なんですけども、それが作られるようになりましてから、八尾北高校の敷地内というのは、人は住まずに畠、田んぼに変わつていつたというふうに考えられます。大体、こういったところで遺跡の変遷というのには跡付けられると思います。

萱振一号墳についてのお話に移らせていただきます。一号墳は一边が約二七メートルの正方形の方墳です。周辺に幅五メートル位、深さ〇・五メートル位しかない非常に浅い溝をめぐらせてあります。この古墳が発見されました時の状況というのは、周辺の田んぼより一段高い畠になつておりました。従来この地方では、河内木綿の生産が盛んでありまして、綿の畠というのは島畠とかかきあげ田といわれ、周辺の田んぼより一段高くして作つていたらしく、私達も当初はそういう

う烟の名残だらうと考へておつたんです。どうもそれが、掘つてみたら埴輪列が出てきて、古墳であることがわかつたということです。この周辺はたくさん鳥烟の痕跡というのが残つておりますので、その中にもひょっとしたら、そういう古墳のなごりがまだいくつかあるんじやないかと考えております。古墳自体は烟という形で再利用されておりましたので、埴丘上盛り遺構というの早い時期に削られてしまつております。これは、削つて回りに押し広げた土の中に混じつていた上器の年代から考えまして大体、中世、室町時代のことと考えられます。それまでは古墳としての形をとどめていたと考えられます。それに奈良時代の建物群のところで小川の跡が出ておりまして、その小川の跡というのが、ちょうど古墳の裾をよけるような形で流れております。もうひとつ、このすぐ側に高塚地蔵という室町時代のお地蔵さんが残つておりますけれども、この高塚という地名が残つているという点ですね。あちらこちらに高塚とか大塚とかいう地名が残つていますけれど、塚のつく地名の所というのは、古墳が付近にあるということがほほ言えるわけでして、そういう地名として残るような時期までちゃんと古墳と意識されて、古墳の姿で残つていただらうと思われます。盛土が削平されおりました関係上、埋葬主体部というのは完全にとばされて残つておりませんでした。埴輪の種類は、まず回りに並べられておりました円筒埴輪ですね。それといくつかの形象埴輪、物の形を型どった埴輪がいくつか出てきておりますけれども、形象埴輪の中には複形埴輪という矢を入れる武具を形どったものに非常に立派な

ものが出ております。それから、小さな破片になってしまっているんですけども、もし復元する  
とすれば非常に大きな埴輪になると考えられる家形埴輪、これが四つか五つの個体数があります。  
それから盾形埴輪ですね。矢を受けるための盾、それから草摺形埴輪というよろいの襷のスカート  
になつた部分を形取つた埴輪、それからきぬがさ形埴輪と申しまして、昔、偉い人の後ろから  
大きな傘をさしかけるという絵が、古い絵でよくありますけれど、そういうきぬがさというもの  
を形取つた埴輪などがでています。円筒埴輪は直径が三〇センチメートルくらいありますし、復  
元しますと高さが一・〇一・一・一メートル位になる非常に大きなものとして、しかも全部、ひれ  
付円筒埴輪という横にひれが付いたような形をした埴輪だったわけです。古墳の回りに並べられ  
る埴輪全部がひれ付という例は非常に珍しくて、奈良県に数例、大阪府に数例ありますけども全  
国的に見ても一〇例以上あるというものではなく、非常に珍しいものだと思います。埴輪の時期  
なんですが、古い形態をとどめておりまして、窯を使わずに野焼きした埴輪として、四世紀  
末から五世紀初め頃と考えられる埴輪です。古墳の時期については、いろいろと研究者の間で意  
見が分れておりまして、四世紀末から五世紀初頭を古墳時代前期であるという人と、古墳時代中  
期であるという人とがあるんですけども、どちらにしても前期末から中期初頭、あるいは前期と  
いう言い方ができると思いますが、非常に古い古墳です。前回の講座でもそういう古い古墳のお  
話をされたと聞いておりますけれども、この河内平野周辺で最近、古い古墳がいくつか発見され

ておりまして、しかも、古い古墳というのは、大体、山手の方で丘陵を切取ったような形で作る、大きい前方後円墳がたくさん知られているわけなんですけれども、河内平野で発見された古墳というのは低地部で、従来古墳が無いと考へられていたような部分で出てきているというのが一つの特徴ですし、もう一つ、今まで見つかっているのが全部方墳なんですね。しかも小規模な方墳であるという、そういう点で従来の古墳の立地感をくつがえすようなおもしろい発見が相次いでいるわけです。もう一つ、蓋振一号墳の特徴といたしまして、さっき申上げました埴輪のセットですけれども、非常に大きい、大型の埴輪であるという点と、従来ですと、一〇〇メートルを超えるような大きな前方後円墳に並べられているのと同じようなセツト関係、家・盾・轄という形にしても、埴輪の個体数にしましても、大きな前方後円墳に劣らないような数を持っている。それと、主体部が見つかっていないので副葬品に何が納められていたかわからないんですけども、言つてみれば、大土陵クラスの古墳に匹敵するような、そういう埴輪をもつた小さな古墳であるということで、その辺が非常に面白いところだろうと思ひます。前方後円墳というのは大和の政権に直接つながるような連中が作ったと言われているんですけども、それ以外の、方墳を作つたというか、方墳しか作れなかつたという豪族の中でも、この河内のような、弥生時代から生産力の高い土地をバックにもつっていた豪族というのは、たいへん力が強かつたということが言えるんじやないかと思うんです。江戸時代でいえば大和に対して、外様大名みたいな感じで、非常に

## 豈振遺跡を調査して

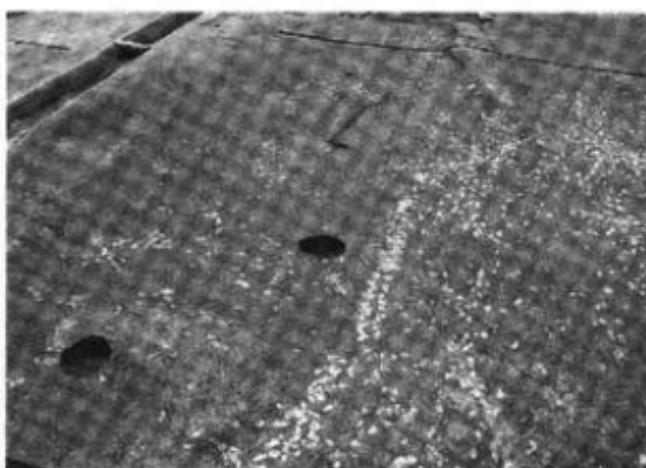


写真11

力が強いけれど、ちょっと煙たい存在みたいな、そういう豪族の姿が想像できるわけです。

それでは、スライドを見ていただいて、お話を続けさせていただきたいと思います。

写真11 弥生時代中期の水田の跡です。写真右の方に盛上がっていますのは、水田の大きい区画をします畦畔の跡ですね。これをさらに細かく分けて、水田を作っていたんでしょうけども小さい畦畔の跡というのはここでは残っていないです。南北に非常に幅の広い大きい溝が通っておりまして、おそらく集落域と水田域を画するような溝じやないかと考えております。点々と見えているのは人間の足跡です。特にこの辺なんかは歩いた跡がはつきりわかりますので、通路のようになつてていた部分じやないかなと考えてています。

写真12 弥生時代後期の集落跡です。先程の水田面から八〇センチメートル位上になるんですが、中央にあるのは井戸なんですね。その井戸の回りはちょっとした広場みたいなものがありまして、その

外側に小さい穴がいっぱいあります。

36

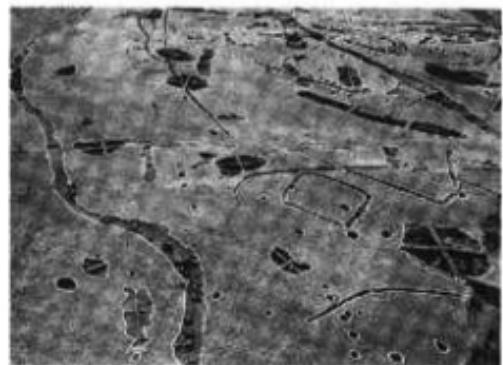


写真12



写真13

這是住居跡の柱穴なんです。その住居の外側をまためぐるようなかつこうで、いくつもの土城と呼んでいるゴミ捨て穴と考えられる穴がぐるっと開むように並んでます。この中に非常にたくさん土器が入っています。さらにはその外側をめぐるようなかつこうで、細い溝がずっと囲んでまして、これから外へいくとほとんど何もしない沼地のような感じのベタベタした粘土ばかり出てくるところがありまして、遺物もほとんどなくなるという部分です。ちょうどこの辺が集落の一番外側をくぐる部分で、この中に非常にたくさん土器が入っています。この土器の中には記号文と申しまして、幾何学的な模様を描いたものでありますとか、動物をかたどったんじやないかと思われる文様を描いたもの、それから方形周溝墓などに副葬されることが多かった、胴部に穴を開けた土器などがかなりたくさん出てきています。それから

## 萱振遺跡を調査して



写真14

この溝の中から銅剣と考えられるんですけども、青銅器の先端の部分、一三センチメートルほどの折れたものですけども、その破片が一点出ております。青銅器というのはこの時期には実用品ではなくお祭りの道具として、ここから出てきておりましたのは、折れた後にかなり研いだ跡がありまして、何らかの実用的な利器として使われていたと考えられるわけです。そういう武器形のお祭りの道具というのは、弥生時代中期頃からほとんどすたれていまして、弥生時代後期になると、銅鐸というのがお祭りの中心の神様の寄りしろとなりますので、銅鐸中心のお祭りに変わつていく過程の中で、青銅の素材として溶かして再利用されなかつたような銅剣のかけらが、ナイフとして再利用されたということが考えられるわけです。

写真13 先程の井戸ですが、この外側には広場があつたんですね。ですから、井戸を囲むような形で建物が配置されるという集落の特徴がこの遺跡ではよくわかつたわけです。

写真14 銅剣の出土状態です。大体一三センチメートル位なんですが細型銅剣としましても、非常に細いわけです。しかも刀の部分が波打つたようになつていて、研いた痕跡が部分的に見えるんですけども、何回も研いで利用されたものじゃないかと考えられます。

写真15 自然河川が埋没した後に營まれた古墳時代初頭の庄内式土器

の時期にあたる方形周溝墓です。こういう溝で四角く囲んだ上に、盛土がいくらかあったはずなんですが、残っていません。普通はこの上に木棺ですか、土塚墓ですか、そういう形で何体かの人を葬るわけですが、ここではそういうものは出てないんです。その代わりに、非常におもしろいものとして、ここに出っ張ったところがあるんですけども、ここに木棺が一つありました。それから周溝の開口部、ブリッジといつてますけども、その両脇の部分に長方形の落込

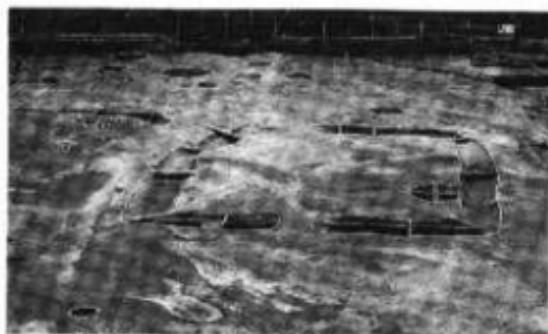


写真15



写真16

## 萱振遺跡を調査して

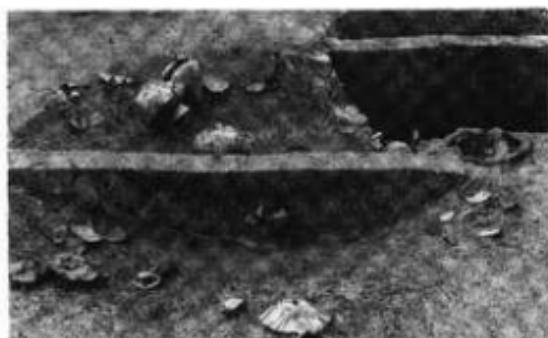


写真17

みがありまして、中にベンガラだろうと思うんですけども、赤い顔料が残つておきました。人骨は残つてなかつたんですけども、おそらくこれも埋葬施設の一つだらうと考えられます。方形周溝墓のマウンドの上だけでなく、周溝内とかあるいは周溝の外に埋葬するという例が見られた非常に珍しい例です。ここでは四基の方形周溝墓が出ております。

写真16 方形周溝墓群を区画するような感じで幅の広い溝がありました。ぎっしりといつていいぐらい土器が入つていました。

写真17 溝の脇に出てきました円形の、大きい井戸の上層なんですが、井戸が廃絶して埋まりきる直前の状態です。浅い窪みのような状態になつたところに、非常にたくさんの中器が入つています。ほとんど庄内式の土器です。

写真18 萱振一号墳のほぼ全景の写真です。ちょっと見にくいいんですけども、埴輪列が出てきます。奈良時代の小川のような自然の流路がずっと古墳の裾を回るようなかつこうで流れていった跡があります。この中に埴輪がくずれ落ちた状態で出てきました。

その奈良時代の造構としては、大体東西南北に軸線がそ

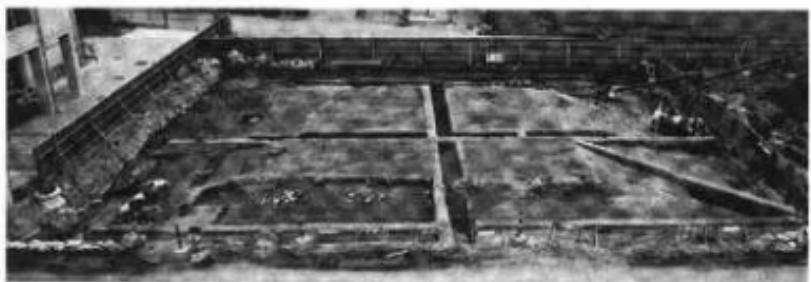


写真18

ろつた掘立柱の跡が出ています。建物を直角に曲がる溝で区画し、整然と配置しています。この溝の中からは奈良時代の、提瓶という水などを入れたものとか、こういう瓶のようなもの、あと須恵器の壺とか杯とか土師器の椀、皿の類、そういうつたものがどっさり出ています。それといっしょに和歌山県とか香川県とか若狭の方とか、北九州のものとか、かなりあちこちの製塩土器が混じって出てきますので、これも非常に興味深いことだと思います。

写真19 井戸の跡なんですが、丸木船を輪切りにして井戸枠に転用しているものです。非常に大きい、幅が一・三メートルほどある杉材を使った丸木船です。縁をちょっと丸く加工してあり、ブリッジのところはとんでもすけども、両側が通々になつていて穴がいくつかあけられています。これはおそらく、船板とか舷側板というものの上に取付けまして、かなり深さのある喫水線の深い船にしたものです。いわゆる準構造船というものです。これ自体は平底で、舷側の立上がりが大体四〇~五〇センチメートルしかないんですけども、その上に舷側板を取付ければかなり深い船になるだろ

## 萱振遺跡を調査して

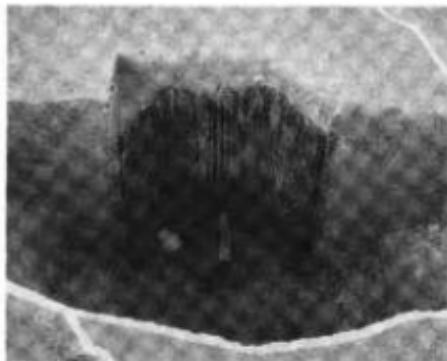


写真19

うと思います。幅が一・三メートルですから長さはおそらく一〇メートル前後はあるだろうと思  
います。平底であるという点で川船だらうと考えられ、当時の大和川水系、淀川からずつと南の  
方へのぼって山を越えて、奈良の都まで行つてたという水運に使われたんだろうと思われます。  
おそらく先程出てきました各地の製塙土器なんかを、難波の津についたあちこちの船から川船に  
積替えて、奈良まで運んでいったというふうに考へておるわけです。

又、同じ時代の遺物として帶金具が出てきました。丸柄という部分なんんですけど、革のベルト  
にいくつも半円形のものと四角いものとをつけて、飾り金具になつてゐるものです。これは当時  
の役人の制服でありまして、大きさから大体、その官位まで  
わかるようになつております。ここで出てきたのは大きさから見  
て七位相当の官人のものであることがわかつております。七位といふと大体、地方役人の位ですので、奈良時代の  
萱振の集落というのが何等かの官衙的な意味合ひをもつたも  
のだらうという想定の一つの材料となつてゐるわけです。

時代が下だりまして、鎌倉・室町時代のものとしては、南  
北方向に通る幅五六メートルの道の跡や、黒っぽい瓦器と  
いう、瓦と同じ様にいぶし焼きをして、古くからある土師器

の表面に炭素を吸込ませて釉薬のような役目をもたせた、十三世紀後半から十四世紀初め頃の土器ですが、そういうのがたくさん出ています。



写真20

写真20 室町時代ぐらいの井戸で、下は桧の薄い板をたわめて、桜の皮でとじたせいろを何段か重ね、上は瓦を積み上げたものです。この瓦を見ますと、奈良時代あるいは平安時代、もっと古いところでは一部飛鳥時代の瓦も混じっているのです。非常に古い瓦を積んでいるということで、瓦の由来について調べていたんですけども、たまたまこの調査をやっている同じ時期に八尾市で西都磨寺の発掘をやってまして、その時に出土した瓦とびつたり一致することがわかりまして、おそらくお寺の跡ですから昔はそこら中に瓦が散乱していたんでしょうが、それを中世の人は拾ってきて、こういう井戸枠にしたということがわかったわけです。

写真21 貢振一号墳を西の方から見たところで、古墳の裾に埴輪が立っている状態です。墳丘はこれだけしか残っていませんでした。周濠が半分埋まつた時点で、かなりの埴輪が外側へ転落しています。立っている埴輪についても全部外へ倒れた状態で出てきているわけです。だいたい

## 貢振遺跡を調査して



写真21



写真22

○・八一メートル位の間隔で並べられているんですけども、上からの土の流れで全部ひっくり返った格好で出でてきます。

写真22 塗輪をアップにしたところです。野焼きで焼いた塗輪というのは窯で焼いたものと違いまして、こういう黒い斑点、黒斑がつくわけです。どれも黒斑がついているんですけども、これは非常に古い塗輪の特徴です。

もう一つは、透の形なんですが、これも、こういう半円形とか逆三角形とかの透穴をもつてている塗輪というのは非常に古いわけです。それともう一つ、写真ではわかりませんけど、表面の調整が非常に古い手法である縦ハケ一次調整とよばれる手法なわけです。

写真23 縦形塗輪の出土状態です。破片すくども、直強<sup>ちきょう</sup>

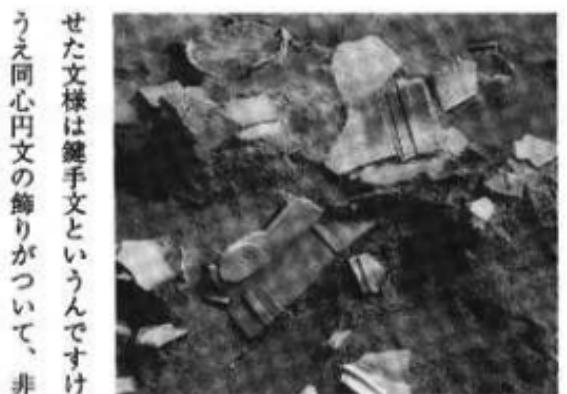


写真23



写真24

文が入っています。直弧文といふのは日本の古代特有の直線と曲線を組合せた文様でして、権力の象徴とされているような文様です。これは全体に黒斑がありますけども、赤色の顔料、朱か、べんがらかそういうものが塗られていたようです。側面の直線を組合わせた文様は鍵手文といふんですけども、これも直弧文とよく組合わせて使われるものです。そのうえ同心円文の飾りがついて、非常に精巧な造りになっています。

写真24 古墳の副葬品とは断定できないんですけども、古墳の側のくずれ落ちた土の中から出てきた勾玉です。材質は滑石ですので、それほど上質のものではないんですけども、形が非常にすんぐりした、ちょっと古い形態をもつてますので、この古墳の副葬品と考へてもおかしくないものです。

写真25 朝顔形円筒埴輪の中にお椀が入った状態で、これも珍しいものです。朝顔形円筒埴輪と

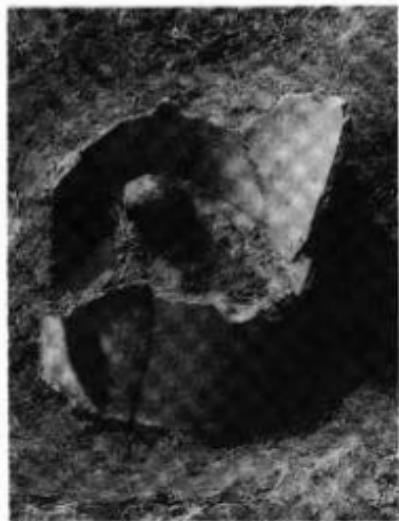


写真25

いうのは上に何か乗せていたんじゃないかと、よく言われるんですけども、ひょっとしたら、お供えみたいなものが中に入れられていたのかもわかりません。

今、スライドを見ていただきました様に、萱振一号墳というのは、これまで河内の低湿地で見つかっている古墳の中では、持っている埴輪がすば抜けでりっぱだということが言えると思います。それから、副葬品についてはよくわかつていませんけども、古墳の規模については、前回お話をあつた、美園古墳は一辺が八メートル程の小さい古墳ですし、それ以外に巨摩廃寺遺跡でありますとか、亀井遺跡でありますとか、あちこちから小型の方墳がいくつも出ているんですけど、その中でも萱振の古墳というのは一辺が二七メートルということで、最大級であるということが言えるわけです。それと、今まで河内平野で見つかっている古墳の中では、前回お話をあつた美園遺跡の古墳が年代的にも、この萱振一号墳と一番近く、両者にいくつかの共通点が見られます。非常に規模が小さい古墳であるにもかかわらず美園古墳の場合は非常に立派な家形埴輪をもっている。円筒埴輪が美園の場合には一つもなくて、臺形埴輪という非常に特殊な埴輪を並

べていたということ、そういう点が珍しいところなんです。萱振の場合にも形象埴輪、立派な家形埴輪とか軽形埴輪とかの武具、あるいは器材をかたどった埴輪が多数並べられている。円筒埴輪につきましても、普通の円筒埴輪ではなくて、ひれ付の円筒埴輪で全部占められていた。そういう点で、普通一般にみられる古墳とはちょっと変わった特徴をもっているということが、河内平野の平野部で出てくる古いタイプの古墳の共通した特徴だとと思うのです。先程も触れましたけれど、大和の政権とちょっと性格を異にするような豪族の姿というものが浮び上ってくるわけです。

萱振一号墳の話は、これで終わらせていただきたいと思うんですが、この会のテーマである葬るということで、日頃考えていることを少しお話ししておこうと思います。

埋葬というのは、人間以外の動物はやらないこととして、ひとつ文化現象と言つていいかと思うんですが、旧石器時代の古い時期というのは、埋葬ということはやってないと考えられるわけです。おそらく死者をそのまま放置するというところから埋葬へといく場合には、一種の原始宗教みたいなものの芽生えがないといかんと思うのですが、それは身近な者の死を悼むという心と、死をもたらすものを畏れるという心と両方あると思うんです。日本の場合、縄文時代の早期にはすでに、埋葬人骨というのは出てきているんですが、早期でも古い時期には確実に埋葬されたという例はなく、神奈川県平坂貝塚の人骨というのは一種の、のたれ死したかつこうという出土状態だったらしいのですが、それ以降には確実に埋葬したというのが出てくるわけです。縄

文時代の埋葬のパターンというのはいくつかあるんですけども、ほとんどが屈葬とか抱石葬とかいつて、体を小さく折曲げて埋めたり、あるいは胸に石を抱かしたり、あるいは土器の破片を頭にかぶせて埋めたりして、悪靈が死者から遊離してそこらをただようのを防ぐとか、死人が復活するのをおそれるとか、そういう心が裏にあるわけです。これは一種の埋葬の画期として、死後の世界の観念というのがそこにはもうすでにでてきているんだろうと思います。ただ副葬品に、それほどちゃんとしたものが出でてきていませんが、貝塚の貝層の中に穴を掘つて埋葬しています。そして、今のように墓地と人の住む所というものは、はつきり分れておりません。人骨がよく残るという点でそういう例が多いのかかもしれません、貝塚の貝層の中に穴を掘つて埋葬しています。ご存知のように貝塚というのは貝殻とか動物の骨とか、要するに食べかすとこわれた土器、ゴミ、そういう物を捨てるゴミ捨て場ですね。ゴミ捨て場に死者を葬るというのは今の感覚では考えにくいんですけど、非常に死というものの汚れとか、死者の復活をおそれるとか、そういう気持ちが強く働いていたということも考えられますし、現在も残るアイヌの民俗例に見られますように、物送りという、物には全て神、魂が宿っているからそれを捨てるというのは神の國へ送り返す儀礼を伴うという、物送りの考え方がゴミ捨て場に死者を葬るという形になつたんじゃないと言われています。貝塚の中とか、集落のど真中の広場に埋葬したり、あるいは廃絶された堅穴住居の中に埋葬したり、そういう生活域と非常に密着した場所に埋葬する場所が設けられた。これが

縄文時代の埋葬の特徴かと考えられます。弥生時代になりますと、今度は生活域と墓域がはつきり分離するという現象が出てきます。しかも地域によって様々な埋葬の形態というのが生れています。九州とか西日本の方では朝鮮の影響を受けました支石墓、あるいは喪棺墓でありますとか、箱式石棺といったものが出でくるんですけど、畿内地方では最も流行するのは方形周溝墓なんですね。ところが方形周溝墓だけに限定されるかというと、そうではなくて、周溝を伴わない所にただ穴を掘つて埋葬する土塙墓という、縄文時代も同じ様な墓があつたんですけども、そういう土塙墓も残つているということで、埋葬に階層差みたいなものが出でてくる時期が弥生時代だらうと考えられます。弥生時代はまだ階級の発生していない社会だと言われていますけども、弥生時代の終末に近い時期になりますと、おそらく後の古墳時代にむけての階級社会の発生というのが見られるようになると思うんですが、その時期に岡山を中心とした吉備地方とか、あるいは山陰の地方では墳丘墓とか、台状墓とかいう、非常に傑出した形を持つた墓というのが出てきますんで、それがおそらく後の古墳につながつていくんだろうと思われます。その点、畿内では階層差というのは出でますけども、一つの方形周溝墓の中に一人の遺体というのではなくて、何人の人が葬られます。多いところでは、十数体の人が葬られていた例もありますし、おそらく家族墓という性格が強いんですけど、そういった中から階層差がいつから階級制に変わるのかという点で、まだこれから畿内の墓制、弥生時代の墓制というのは研究していくかねばならない部分がある

のです。最近、八尾のお隣の大坂市平野区の加美遺跡から突出部を持つ方形周溝墓とか、鏡の破片や青銅器などの副葬品を持った墓が出てきています。鏡内に限って、弥生時代の墓というのはほとんど副葬品を持っておりませんので、階級差のある墓じやないと考えられていましたけど、そういう階層差を持った墓が最近いくつか見つかっています。河内のように古くから非常に生産力の高い地域においては、富の集中みたいなものが早くから起りやすいだろうと、一種の王権のようなものが生れやすい土壤があつたんじゃないかというふうに考えられるわけです。それとはまた正反対に、北九州の方なんかを見ますと、槨棺にしましても、箱式石棺にしましても、非常にりっぱな副葬品をもつてている人が多いわけであります。鏡でありますとか、銅剣、銅矛といつたようなものを持っている人が多いんですね。これは、北九州のその人達が非常に傑出した人物であったということを示すのかというと、そうとも言えない状況でして、それはその個人に対する追憶の意味での副葬であつて、その血筋なり、血統なりがすぐに王権につながるような埋葬形態ではないということころなんですね。それが、古墳時代に入りますと、とたんに前方後円墳という非常に大きい古墳がどんどん出てくるのです。これは明らかに政治権力を意識した墓でありまして、人の目につきやすい山の上の尾根上に大きな前方後円墳を作るというような行為は、支配者の権威を示すものですし、おそらく、その人が生きているうちから作り始めるんでしよう。作りたての古墳というのは見られないんですが、兵庫県の五色塚というのは作りたての古墳を復

元した形で、現在公開しています。葺き石といいまして、赤ん坊の頭ぐらいの石をずらつと墳丘に敷きつめて、石というのは遠くから見ると白く見えるんですけども、その白く見える墳丘の上に赤に塗った埴輪がずらつと並んでいるという、昔の縁がいっぱいある山の中では目をむくような景色なわけです。見た人が度胆を抜かれるようなそういう古墳というのがてくるわけです。これは政治的な意味合いをもつた埋葬形態と考えられます。古墳というのは政治権力を示すものとして作られ続けて、何世紀かかるわけですが、大和の政権が中央集権的な支配を完成させる律令体制にはいつていく時期になりますと、大きな古墳は消滅していくわけですね。大化の薄葬令というのは日本書紀の記事だけですので、実際にあったかどうかは、はつきりしないんですけども、大きな古墳を作つてはいかんという天皇の命令が、大化時代に出るんです。その時期まで大きな古墳が作られ続けるというのは、大和政権の全國支配を広げていくための一つの手段、權威の象徴として作られ続けたんじゃないかと考えられるわけです。埋葬ということ一つとっても、いろんな意味合いがあつて、いろんな歴史があつて、変わっているんだということです。

萱振の一号墳というのは中世に削られてしまつたということをさつき報告しましたが、人を葬つた場所である古墳というものに対する認識を、周辺の人はもつていたと思うんですね。奈良時代ぐらいにはまだ、古墳のかつこうで残っていたのに、なぜ中世になつていきなりつぶされてしまったのかと考えてみると、ちょうど中世の末法の時代、神も仏もないような時代、そういう

う時期に生産力をあげるため、あちこち烟にするためにどんどん古墳がつぶされていると思うんです。祖先を敬うという気持ちがなくなつて、人の心が荒んできたような時代に、古墳をつぶして烟にするということが行われた、そういうのも非常に興味深いところだろうと思います。

現在を振返つてみると、開発、開発で、あちこちで僕らの仕事は大繁盛しているんですけども、重要な遺跡も、それほどでもないと思うような遺跡も十束ひとからげにとにかくどんどんつぶされている時代なんです。今は、高度経済成長というような時代ではないんで、ひとつ、自分達の住む環境としても、普通の自然環境を残すのと同じ様な気持ちで、文化遺産としての遺跡を何とか残さないといけないのじゃないかと考えているわけです。こういうことに興味のある皆さんには、私達の仕事にもご理解をいただきまして、これからも応援をお願いしたいと思います。

昭和六一年九月二〇日

於 市立教育センター



古墳発掘よもやま話

高 安 古 墳 群 に つ い て

大阪府立清友高等学校教諭

吉 岡

哲

吉岡でございます。

前回、前々回の講座では菅振で見つかった古墳、あるいは美園で見つかった古墳等についてお話をありました。今日は特に八尾市域の山麓部の古墳群、高安古墳群というように呼ばれている古墳群についてまとめてみようということで、皆様にお話することにしたいと思います。日頃心がけて、できるだけ難しいことを易しく、易しいことをできるだけ深く話していきたいと考えているわけなんですが、果たしてうまくいきますかどうか、今日の話しをふまえながら次のステップにしたいというふうに考えております。

話しの中に出でてきます資料は、私の使いました資料もござりますし、それ以外に大阪府教育委員会の概報、あるいは「大阪文化誌」に報告されたもの、あるいはその他多くの方々の成果を網羅しています。そういう資料をご覧いただきながら、八尾市の古墳群を見ていただきたいと考えております。尚、あとでスライドを使いまして、現在、古墳がどういうふうな状況なのか、あるいはどのような出土遺物が出てきたのか、といった点についても見ていただきたいと考えております。

さて、高安古墳群というのはどういう古墳かということなんですが、まず、高安古墳群という名称について見ておきたいと思います。以下、高安古墳群についての研究史、あるいは分布とか概要、どういう遺物が出ているのか、あるいはそこに葬られた人々というのはどういうふうな人々なのか（具体的な固有名詞はなかなかあげられないのですが）、それから、古墳群の保存について、

## 高安古墳群について

といったことについてまとめてみたいと考えております。

まず最初に高安古墳群というのはどういうふうなものをさすかといいますと、私はこういう具合に理解しています。いろいろとらえ方はあると思うのですが、生駒山地のだいたい八尾市域にかかる古墳群を総称して高安古墳群と呼んでいいのではないかと考えているわけです。生駒山地といいますと、信貴・生駒の山並でございますが、その八尾市域にかかるところ、ほぼ南北域非常に広範囲にわたるんですけども、南北約五キロメートル、東西約二・五キロメートルにわたります。これが広い意味での高安古墳群といったとらえ方でいいのではないか、総称しているのではないかと思います。これが広い意味での高安古墳群といつたとらえ方でいいのではないか、総称しているのではないかと思います。ただその中で、細かい地域、例えば郡川周辺、あるいは服部川周辺では集中的に古墳が見られます（尚、服部川と郡川、この地名も意味深いものがあるんですが、それは今ははぶきます）。近鉄信貴線の服部川駅、あるいは信貴山口駅で降りると、すぐ古墳がまのあたりにひらけてきます。だから、狭い意味でこのあたりを高安古墳群と呼ぶ人もおられますし、又は高安千塚、そういうふうに呼ぶ方もおられます。あるいは高安千塚古墳群と呼ぶ人もおられます。私は全域を総称して高安古墳群と呼んでいいのではないかと思うんです。古墳時代の終わり頃、古墳時代の後期と呼んでいるのですが、その古墳時代後期の古墳を総称して高安古墳群と呼んでいいのではないかと思います。そして狭い範囲、例えば郡川、服部川、それ以外に東音寺とうおんじとか大竹とか水越、千塚とかいろいろありますね。恩智とか神宮寺とか、そ

いつた地名をとつて、その地域の古墳群を○○支群というような呼び方をしてよい。高安古墳群の服部川支群とか郡川支群という呼び方をしてよいのではないかと考えています。ですから、大きく全域を包括して言う場合（後期の古墳を全体としてさす場合）は高安古墳群と言つてよいと考えているわけです。そういう意味で言いますと、例えば東大阪市に山畠古墳群というのがあります。近鉄奈良線の瓢箪山駅から東方約十五分位かかりましようか、東大阪市の郷土博物館が建設されていますが、そこに山畠古墳群があります。同様に柏原市には、大阪府教育委員会などは平尾山古墳群と呼んでいる古墳群があります。これは非常に大規模な古墳群で、近年、一部破壊されてしまっています。これは柏原市域の全域をさして平尾山古墳群といった言い方をされておられる方があるのですが、私は平尾山古墳群という言い方は全域をさす、総称する言葉ではない、もっと厳密な意味で使うべきだと考えています。例えはどういうことかと言いますと、平尾山と呼んでいるのは、これは非常に限定された、部分的な山をさすわけです。ですから、柏原地域の古墳を包括して呼ぶ場合には、私は堅上・堅下古墳群というふうに呼ぶべきであると考えています。理由は、堅上もしくは堅下と言いますのは、古代律令制度当時の郡名なんですね。堅上郡、堅下郡というふうに呼んでいたわけなんです。それが後に大県郡というふうに呼ばれるわけです。今、柏原市に大県という地名、ご承知の方があると思いますが、私も実は大県の隣の平野という所で生れ育ったわけなんですが、その地元では、これをオガタ（オオガタ）というふうに

読んでいます。元々はオオアガタでしょうね。昔の中心地なんですね。その地域を支配するための役人がいたところだと思うんです。ですからオオアガタ、そして後にオオガタ、地元では、これは正しい言い方じやないんですが、オガタというような言い方をしております。それはいいとしまして、その以前の言い方に堅上郡、堅下郡という言い方があるんですね。現在も、堅上・堅下という地域名は使われています。ですから柏原市域の、特に山麓部については、これではほぼ包括されるわけです。ですから堅上・堅下古墳群という言い方でいいんじやないか。一方、八尾市域の場合はどうかと言いますと、牛駒山地西麓部一帯をさして高安郡という言い方が古代律令制の中になります。ですから仮に高安古墳群ということで総称していいんじゃないかというふうに考へておるわけです。そういう意味で平尾山古墳群という言い方は、やめた方がいいのではないかというように思つております。堅上・堅下地域の古墳の数は約一五〇〇基くらいです。まだ眠つておるものもありましょし、すでに破壊されたものもありましょから、相当膨大な数になるというふうに考へております。では高安の場合は、後期の古墳はどれぐらいあるかと言いますと、高安古墳群については、まだまだこれから分布調査や発掘調査がなされていくつて数は増加すると思いますが、およそ二五〇一三〇〇まあ三〇〇は下らないだらうと考えております。その二〇〇基の古墳がまだほとんど発掘されていない。非常に良好な形で眠つておる。残念ながら一部破壊されたところもあるのですが、まだまだ良好な形で残つておると思いますので、今後さらに詳細



図7 楽音寺・大竹古墳群とその周辺

1. 西ノ山古墳
2. 中ノ谷古墳
3. 花岡山古墳(礎跡)
4. 向山古墳
5. 心合寺山古墳
6. 鏡塚古墳
7. 愛宕塚古墳
8. 玉祖神社裏山古墳
9. 水越・千塚遺跡

な発掘調査も大事ですが、それ以上に精密な分布調査（どこにどういう古墳があるかを調べる）を、早急にやる必要があると考えているわけです。

高安古墳群の周辺では、後期

古墳に属さないものがあります。

例えば、国の史跡になつています心合寺山古墳は濠をめぐらしあた中期にかかる古墳であります。

それから西ノ山古墳など、いわゆる前期から中期にかかる、前

方後円墳と呼んでいる非常に大きな古墳が造られるのです。

そういうふうな古墳が集中的につくられているところを図7にあげておきました。中に後期古墳も一部入っていますが、それを除いて前期から中期にかかる古墳、これは今から約一五〇〇年以前の古墳であります。そういった古墳が集中的に見られるところがあります。山麓部でそういう

た地域は限定されますので、その地域の名前をとりまして八尾市域の前期・中期の古墳を私は「楽音寺・大竹古墳群」(図7)という名称をつけて呼んでいます。これは主に前期から中期にかかる古墳群を限定して、そういうふうに呼んだほうがいいのではないか、後期古墳とはやや性格を異にするというふうに理解するわけであります。

「大阪府史(第一巻)」という、最近の考古学資料の中で、同志社大学の森浩一先生なども、この「楽音寺・大竹古墳群」という言い方をそのまま採用されています。そして、後期古墳を総称して言う場合は高安古墳群、さらに細かく限定していく場合は○○支群、××支群という言い方でよいのではないかと考えております。

次に高安古墳群がどういうふうに紹介されてきたのかということを簡潔に述べていきたいと思います。まず、この高安古墳群が注目されましたのは、昭和に入つてからではなくて、さらに古い時代から、これは豊臣秀吉の時代まで遡ります。どういうことかと言いますと、豊臣秀吉が出てきます天正年間、一五八〇年代になると 思いますが、古文書に「千塚の石をもつて大坂城の石垣にしよう」というような文章がでてくるのですね。この千塚というのはよくわからないのですが、おそらく高安千塚の、いわゆる現在でも地名に残っています千塚、実は私が勤務しております府立清友高等学校、これの所在地が千塚でございまして、おそらく古墳の石だろうと思うんですが、あの辺あたりの石をもつて大坂城の石垣にしようとしたのだと言われています。



図8 高安古墳群内での乱掘（「河内名所圖会」より）

現在、近鉄八尾駅の近くに常光寺があります。

盆踊りで有名でございますが、その門をくぐりますと、すぐ左のところに大坂城の残念石と呼ばれている大きな石がござります。石垣に使おうと思って、持つて行けなかつたと言われているのですが、そのような石が各地に点々とあります。古墳の石を運ぼうとしたのではないかとう資料が残つてゐるのです。

それ以外に、江戸時代に入りまして、「河内名所圖会」という、名所案内記・図のようなものが作られます。その中に、「高安郡の郡川の千塚」での乱掘の図（図8）というのがあります。実はこれは今で言いますと、盗掘しているわけです。横穴式石室のところを、おそらく郡川周辺だろうと思うのですがお坊さんみたいな人とか庄屋さんに近いような身分の人で

しょう、その人達が一生懸命掘らせているわけです。右側に立っている人物が一人おりますが、杖みたいなものでトを指していますね。そこにお盆のようなものを置いてまして、掘り出した玉類（勾玉でありますとか、管玉といった玉類）を見ているわけですね。それから真中に立つてある人物が左手と右手に盃（須恵器ではないかなと私は思つてゐるのですが）を持ちながら、「んなの出ましたで」というような感じで持つていて、そういう圖であります。その中に千塚という文字が書いてあるわけです。ただし、この当時はまだ、古墳としての認識を持っておりません。ですから、古代人の墓であるとか横穴式石室であるという意識はほとんどなかつたということです。ですから、その当時から破壊が進んでいたといえば進んでいたのかもしれません。盜掘されていたのかもしれません。ただ、現代のように大規模な破壊というのは決してなかつただろうと思ひます。

明治年間、有名な人物で言いますと、ウイリアム・ゴーランドというイギリス人が日本に来まして、東大阪などでも調査しているのですね。実際に古墳の中に入りまして、寸法を計つたりしているわけです。東大阪で非常に重要な芝山古墳（後に破壊された）なども実際に調査しています。また、服部川周辺の古墳も調査しているわけです。実際に来たのは明治の初めであります。明治五年でしたか、いわゆる文明開化の中で外人を招きまして、日本でいろんな國家事業を指導していくわけです。今の大坂桜の宮の造幣局、最近金貨が鋳造されて話題になりましたが、その

大阪の造幣局を、当時は造幣寮というふうに呼んでいたのですが、そこで働く指導者・技術者として彼を招くわけです。彼は、暇を見つけては調査に出かけるんですね。

それからそのすぐ後、明治一二年でしたか、有名なエドワード・モースという人物でございますが、この人は大森貝塚、日本の縄文時代の貝塚の調査をしているわけですね。これは、おそらく日本で最初にやられた学術的な発掘調査として、注目されるものであります。明治一二年といいますと、一八七九年ですから、今から一一〇年近く前ですね。それほど前に日本で貝塚の調査をしているわけです。その人物が実は、服部川・郡川周辺の古墳を実際に寸法を計っているのです。そんな事もちゃんと撮影・記録しているのです。そういう資料も報告されています。翌年の明治一二年に「日本のドルメン」ということで服部川・郡川周辺のことを紹介しています。ドルメンというのは、イギリスなどヨーロッパにありますお墓をさしていう言葉でございます。それから彼が書きました本の中に「日本その日その日」という本があるんですね。その中で大阪にいる時、暇をつけて服部川まで言ったというふうな事をちゃんとモースが書き残しておるわけですね。だから日本の考古学の初期の段階を飾ったこの二人が、実際に服部川まで来て、服部川周辺が紹介されているということです。

さらに続きまして、坪井正五郎さんという人、これは明治に出ました有名な考古学者であります、坪井正五郎さんも日本の古墳の紹介者であり、ドルメンという言葉も使っています。大体

のドルメンというのをご存知でしょうか。史跡巡りなどでよく行くところなんですかれども、石を築きまして、天井石がかろうじて残っているのです。奥行きが本来はあるはずなんですが、奥の方があなたがもう無くなってしまっているのですね。入口と奥とがいけいけになってしまい、くぐり門みたいな感じになってしまっているのです。つまりこれは古墳時代後期の横穴式石室の玄室奥壁部分が無くなっている状態のものなんです。今もこれを大津のドルメンと呼んでいます。明治以前の言葉がそのまま残つたのでしょうか。その後、大正時代になりまして、地元で岩本文一さんという方が、実際に調査されまして、「中河内郡誌」という本の中に五四〇基もの古墳があると紹介されています。これは大正一年であります。今からかれこれ六五年ほど前になるんでしょう。そのころに調査をされている。果たして五四〇基あつたのかどうか疑問な点もあるのですが、実際に今のところ、大体三〇〇基位ということですのでそれほどなかつたのかもしません。しかし、今後調査を続けることによつて、そういう数値に近づいていく可能性は多分にあるかもしれません。それまでは……。それから後になりますと、お亡くなりになりましたが、清原得嚴さん、非常に有名な郷土史家でございました。それから、澤井浩三先生ですね。澤井浩三先生につきましては、八尾市にお住まいの歴史を好きな方はほとんどの人がお世話をなつたわけでございます。例えば「八尾市史」でございますとか、「八尾の史跡」などは現在もまだ読み継がれているわけですね。非常に教えていただくるところの多い文献でございます。それから西岡三四郎先生、井ノ内豊男先

生などたくさんの方がこの間に調査をされております。分布調査、あるいは破壊されそうな古墳を写真にとどめるといった記録調査も含めて、精力的にやつておられます。その成果が『八尾市史』や『八尾の史跡』の中に包括されているということです。

『八尾市史』につきましては、今、増補版みたいな形で取組んでおるわけなんですが、近いうちに刊行でき、見ていただく機会もあろうかと思います。それから『八尾の史跡』についても改訂版が近々出るというふうに聞いておりますので、その成果も、公にされるだろうと思います。その後、昭和四一年に、現在は国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）におられます白石太一郎さんらが実際に調査されました。一四九基の古墳を確認されておることでございます。ただ、まだ十分調査がゆきとどいていない時期でございましたので、白石さんは高安の古墳群には比較的新しい古墳、七世紀代といいますから今から約一二〇〇年くらい前の古墳ですが、そういう比較的新しい古墳はないんだというふうに考えられたわけです。実際、その当時は止むを得ないことだったんですが、新しい古墳も見つかりつつある、というのが最近の状況です。

また、昭和四一年以降、大阪府教育委員会による分布調査がなされ、測量の調査も行われております。ちょうどその時に有名な愛宕塚<sup>あたごづか</sup>古墳を一部調査されたようあります。考古資料として出土遺物が多數あつたといわれています。それから昭和四八年から四九年にかけまして、一時、私も八尾市教育委員会にお世話をなつておりましたその時でございますが、ちょうど中田遺跡（近

鉄高安駅から西約一キロメートルの所)で発掘調査をしておりました。その時に分布調査をやろうということで、学生諸君とメンバーを組みまして、高安古墳群をずっと調査したことがあります。山の中を必死で巡ったことを今も記憶しております。その時に約二五〇~三〇〇基もの古墳を確認しました。昭和五五年になりました。これは大阪府教育委員会が、いわゆる高安城<sup>ながや</sup>の範囲確認調査を行い、高安山の気象レーダー観測所がございますね、あのレーダー観測所の後ろの山、これを発掘調査した時に古墳が検出されました。山頂の高さが約四八〇メートルですか、そこで古墳(高安山古墳群)が発掘調査されました。大体七世紀の中頃から終わり頃といわれていますので、聖德太子が活躍した時代よりまだ後の話、大化の革新かそれ以後ということになりますね。それぐらい後の古墳が見つかりました。天皇で申しますと天武天皇、あるいは持統天皇が出てくる頃にあたるわけなんですが、その頃の古墳が高安の山頂でみつかったということになったわけです。七世紀代の非常に新しい古墳、青葉をかえて言いますと、いわゆる「終末期古墳」ということです(後期古墳と終末期古墳という言い方があるんですが、古墳の終わり頃の古墳を終末期古墳というふうに呼んでおります)。奈良県で代表的なものが、皆さんよくご存じの高松塚古墳やマルコ山古墳、壁面が一部見つかった亀虎古墳もそうですし、いくつかの終末期古墳が見つかっているわけですね。そのようなものが高安でも見つかりつつあるという事がわかつてきましたのが昭和五五年のことあります。

紀から七世紀代のものだと言われています。そして翌六〇年には梅岩寺というお寺、小字でいいますと教興寺もしくは壇内<sup>かんない</sup>ということになると思いますが、この梅岩寺の西のあたりのところで古墳が検出されまして、現代の墓地造成のために、やむを得ず調査するということになり、古墳が見つかりました。大体六一七世紀代の古墳だということもわかつてきました。六世紀の調査を踏まえながらいろいろな成果が得られつつあります。おそらくこれからもますます分布・測量・発掘調査が実施されると思いますから、さらに大きな成果が得られる可能性があると思います。そういうような積み重ねの上に立って、よりいつそういろいろな研究成果、学問の進展があるといふことでござります。



図9 八尾市域の山麓部の古墳群

以後、昭和五八年から五九年にかけて、八尾市教育委員会が調査された成果がござります。ひとつは郡川の法藏寺というお寺がございますが、その境内で古墳が調査されました。その時にはりっぱな横穴式石室が発掘され、いろんな出土遺物も見つかりました。六世紀の調査を踏まえながらいろいろな成果が得られつつあります。おそらくこれからもますます分布・測量・発掘調査が実施されると思いますから、さらに大きな成果が得られる可能性があると思います。そういうような積み重ねの上に立って、よりいつそういろいろな研究成果、学問の進展があるといふことでござります。

## 高安古墳群について

さて、そこで具体的にその分布の概要を見ていただきたいと思いますので、図9をご覧いただきたいと思います。図の北の方に、先程申し上げました西ノ山古墳、花岡山古墳、向山古墳、心合寺山古墳といった前期・中期の古墳群がござります。すでに述べましたように、これらの前期・中期の古墳群を、私は「楽音寺・大竹古墳群」というふうに呼び、それともうひとつ、山麓部の中の後期の古墳群を「高安古墳群」と総称しておるわけです。その高安古墳群、北の方から地名で申しますと、北端の楽音寺、すぐ南は大竹、それから南へ下って神立、大陸でありますとか、山畠<sup>やまばたけ</sup>それから水越、千塚、あと服部川、郡川。服部川・郡川のあたりには集中して古墳があり、密集状態といつていいでしょうね。それから南の方へ行きますと、黒谷でありますとか教興寺、それから丘内あるいは恩智、神宮寺あたりですね。その辺まで断続的に分布しています。若干の濃密はあると思います。密集しているところとそうでないところがあるわけなんですが、最も集中しているのは服部川と郡川であるというふうに思います。古墳は標高どれぐらいにあるかと言いますと、一番高い所では、先程言いました高安古墳群の中では高安山気象レーダー観測所（高安山古墳群）の古墳、それを含まない方がいいという人もいるのですが、一応包括するという意味でそれを含めますと、標高約四八〇メートル付近です。低いところでは標高五〇メートルぐらいいにみられます。集中してみられるのは、やはり一〇〇メートル前後でしょうね。五〇～一〇〇メートルぐらいじゃないでしょうか。そのあたりに集中的にみられるということでござります。

では、どういうふうな形のものが多いかといいますと、ひとつは後期古墳の特色なんですが全体として丸い形（●）ですね。丸い形が一般的だと言われています。これをふつう円墳といいます。真上からみると丸い形で、真横から見ると（▲）のようなおまんじゅう形をしているのですね。高松塚もこうです。この直径が、大体一〇から二〇メートルぐらいが平均的です。もちろん二〇メートルを越える場合もあるし、一〇メートル以下の場合もあります。非常に小さいものもございます。例えば五六メートルぐらいですね。大きいものでは二〇メートルに近い、あるいはそれ以上のものもございます。この後期（一終末期）の古墳の築造時期につきましては、五世紀代の終わり頃から七世紀代のおそらく後半頃が設定できると思います。その中心はやはり六世紀代です。六世紀代の前半から後半にかけて、古墳が集中的にみられる時期でございます。これは八尾市だけの現象かというとそうではないんですね。柏原市でもほぼ同じようなことがいえますし、他の地域、大阪府外でもほぼ同じ様なことがいえます。ところが、それが同時にバッとおこるのではなくて、やはり地域、地域によつて非常に微妙な違いがある。画一的に全部を論じきれない。例えば五世紀の末葉から七世紀の後半までみんながみんなそうかと言いますと、そうでないんですね。若干、古墳築造の開始・終了時期の早いところとそうでないところと、いろいろあるんですね。その地域、地域で細かい分析をしていかなければいけない。時期を考えなければいけない。あるいは出土遺物を考えなければいけない。石室の細かい特色、そういうものも

## 高安古墳群について

みていかなければならぬ。というようなことが今、重要になつてきているのではないかと思います。

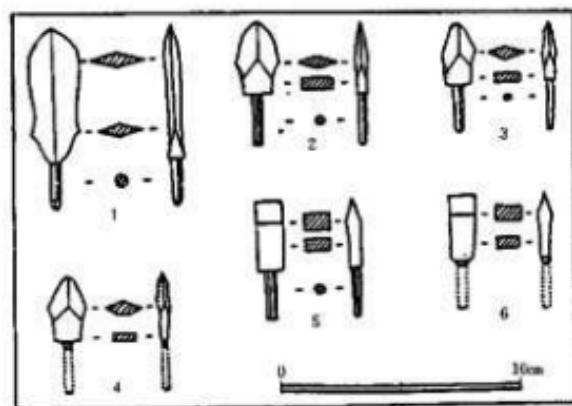


図10 西ノ山古墳出土の銅鐘

次に、出土遺物、それから古墳の墳形、そういうものについては、スライドと図を使いながら説明したいと思います。それでは簡単に図の方だけを先に説明していきます。まず、ご覧いただきますのは、図9の地図のところですね、西ノ山古墳だというふうに書いています。これは非常に古い古墳だというふうに考えております。どれくらい古いのかと言いますと、楽音寺・大竹古墳群の中ではおそらく一番古いのではないだろうかと、今は考へてゐるのですが。どれだけ古いか、なぜわかるのかと言ひますと、図10を見てください。これは銅で作りました矢じりであります。本来はいろんな形をしているのですが、三種類（六点）が図にのつています。その細くなつたところに柄をつけます。石で作っている場合は石鐘といいます。骨で作っている場合は骨鐘といいます。鉄で作った場合はもちろん鐵鐘といいます。これは銅で作つてあるので銅鐘です。①の図は柳葉

式というような言い方をする場合がございます。

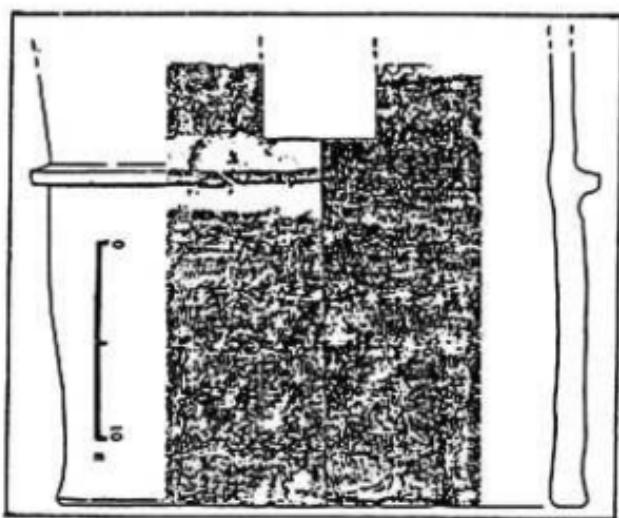


図11 花岡山古墳出土の埴輪

②～④は定角式、それから⑤⑥は大工さんが使った鑿の頭のような形をしていますので、鑿頭式と言います。これは古い言い方ですので、また別の言い方をした方がよいのではないかと、最近思っているんですが、昔の言い方だけを紹介しておきます。こういった特殊なものを作るのはですね。特に⑤、⑥（鑿頭式）などは他の古墳でも見られますが、比較的めずらしいものです。こういった古墳から出てきます銅鏡の時期は、四世紀代のものだろうと考えています。四世紀の後半から末葉ぐらいになるんではないかと思います。四世紀代の後半といいますと、今から約一六〇〇年前ということになります。これは、明治十四年にたまたま見つかったもので、前方後円墳なんです。前方後円墳ということはご承知のことだと思いますが、真上から見ると（●）こういう形をしているのですね。真横から見ますと（●）こういう形になるのですね。この大きさが五五メートルくらい、きちっとした実

測図を作つておりませんので、できたら近いうちにやる必要があると思っていのですが、全長五五メートルぐらいはあるだらうと思われるものです。それから西ノ山古墳の南方に花岡山古墳というのがございました。この花岡山古墳では円筒埴輪などが出土しました。その埴輪は図11に掲げていますが、縦にハケ目がずっと入っています。筋目がおわかりいただけますか。ちょっと印刷が不鮮明でみにくいかもわかりませんが。それから透し孔があいているんですね。円筒埴輪というのは、円筒形で周囲に帯がぐるっと回るんです。そして胴体のところに透し孔（四角・丸・半月など形はいろいろあるんです）があります。この場合は四角の孔があけられています。どちらかといえば、これは比較的古い方の埴輪になるだらうというふうに思います。尚、これらもいくつか図面が出てきますが、埴輪の場合も上器の場合もそうなんですけれども、実測図といふのは慣例として、物の形・文様の外面を左半分に書くんですね。右半分には内面の文様と厚みを描くのです。図11で黒っぽくなっているのは、拓本なんですね。拓本といふのはご存知だと思いますけれど、凹凸のある文様や文字を写しとる技法ですね。花岡山古墳の築造時期については、はつきりわからないんですが、おそらく五世紀の初頭ぐらいだらうと考えているわけです。時期的には、西ノ山古墳に統くような古墳ではないかと考えています。花岡山古墳は、大阪経済法科大学のある場所で以前に破壊されてしまっています。だから残念ながらこれは見ることができません。おそらく五〇メートル前後の、西向きの前方後円墳ではなかつたかと考えられ



写真26 中ノ谷古墳出土の人骨

ます。それから、その花岡山古墳のすぐ南の方に向山古墳というのがあります。これについては、おそらく全長四〇一五〇メートルの前方後円墳ではないかと思つてゐるのですが、やはりきちんと測量図を作つた方がいいと思います。といひますのは向山古墳が果たして前方後円墳であるのか、あるいは円墳であるのか、はたまた古墳であるのかどうかということの疑問点も含めて、発掘とまではいかないまでも、きちつとした測量図を作る必要があるだろうというふうに考えております。ですから、これについては、まだ疑問符をうちながら、一応、前方後円墳というふうに考えておきたい。古墳でないということになると、どんどん壊されてしましますので。今も一部が削られてしまつてゐるのですが。そういう意味で早急に調査する必要があると思ひます。

それからこれらの古墳の東方の山中なんですけれども、中ノ谷（中谷山）古墳とよんでいる古墳がございます。その中ノ谷（中谷山）古墳については、写真26を見ていただきたいと思ひます。手前に頭蓋骨があります。向こう側にも頭蓋骨があつて、足・腕あるいは肩の骨がすつとのびて

## 高安古墳群について

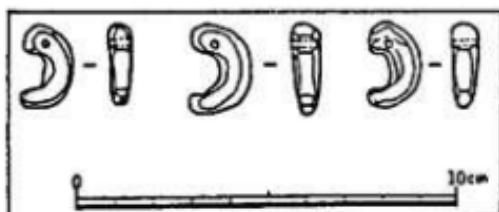


図12 中ノ谷古墳出土の勾玉

きています。気持ちが悪いといえば気持ちが悪いのですが、これは蓋を開けた時の状態なのです。これが見つかりましたのが昭和八年です。この時の開墳によりまして、これが出てきたんです。当時たいへんことだったらしいです。おそらく残りの良いのが男性骨だろうと言われております。手前にある頭蓋骨がどうも女性らしいです。おそらく残りの良いのが男性骨だろうと言われております。手前にある頭蓋骨がどうも女性らしいです。埋葬の状態から考えて、女性が先に葬られて、後で男性が同じ古墳、同じ棺に葬られたというのですね。側石が三つぐらいあるようです。それで、奥の方と手前の方に石が一つずつ置いてあって、その狭い空間の中に、おそらく遺体が一體入ればぎりぎりぐらいというスペースの中に二体入れてあるんですね。その内部から當時使われていました、特殊な櫛、今みたいに横に長いのではないんです。古墳時代頃の櫛というのはたてに長いのです。たてに長いから堅櫛と呼んでいます。そういう櫛ですとか、図12の勾玉などが出土しています。その勾玉は滑石製です。滑石というのは、ご年配の方はセメントなどの所に線を引いて遊ばれたことのある石ですね。勾玉というのは、その図のような形をしています。それから長細い円筒形をしたもの、これを管玉と呼んでいます。管の様な形をしていますので、そう言うのです。管玉以外にもっと偏平な小さい、横から見たら長方形、上から見ると丸い形のものを白玉と呼んでいます。こういったものもいくつか見つかっています。

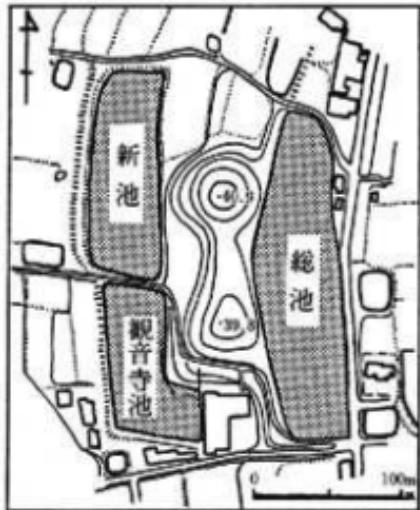


図13 心合寺山古墳 墳丘測量図

す。これらの遺物から、ほぼ五世紀代のものではないかと考へております。ただし、墳形などははつきりわかりません。前方後円墳であったのか、円墳であったのか、そのあたりも現在のところよくわからないのです。

それから図13は心合寺山古墳でござります。この古墳は、非常に雄大な古墳として有名であります。前方後円墳で、全長が約一三〇メートルを超えます。しかも、濠がありまして、今は

総池とか新池とか観音池と呼ばれているのですが、これは古墳の濠だらうと思われます。今は養護老人ホームが南に建てられてるので濠がつぶされたということになるんですが、それも含めて非常に広大な面積を持つ古墳であると言われています。現在、国の史跡に指定されています。この古墳からはいろんな遺物が出てきました。家の形をした埴輪の破片とか、円筒埴輪も出土していますし、先程の花岡山古墳によく似た埴輪なども出てまいります。それから武具の類とか、いろいろな種類の埴輪が多数出てまいります。また長持形石棺と呼ばれるものの破片（縄掛突起部）が出ており、五世紀代の古墳であることはまちがいありません。

## 高安古墳群について

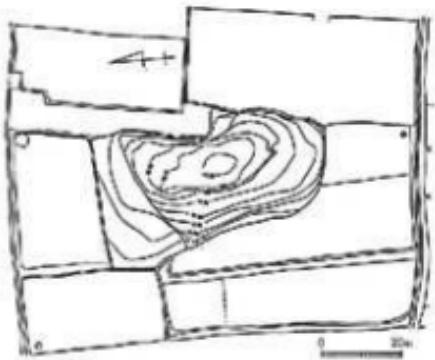


図14 郡川西塚古墳 墳丘測量図

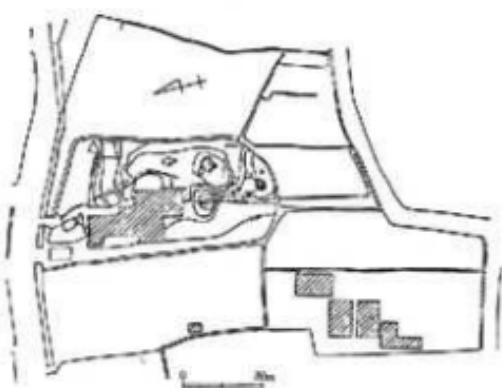


図15 郡川東塚古墳 墳丘測量図

それから、後期古墳は図14と図15です。ちょっと見にくいと思うのですが、真中あたりのこんな形（）ですね。付近はみんな水田になっていますけれど、こんな形をしているのは先にもふれました前方後円墳と呼ばれるものでござります。図14が郡川西塚古墳、図15が郡川東塚古墳と呼んでいるものでございます。近鉄信貴山口駅の真西ぐらいになるんでしょうか。東高野街道を挟んで西側にあるのが郡川西塚古墳、東側にあるのが郡川東塚古墳です。これらの古墳の間

隔は大体一七〇—一八〇メートルの距離を保っています。この二つの古墳には何等かのつながりがあるのではないかと考えられます。時代はおよそ五世紀の末葉ないしは六世紀の初頭ぐらいに相次いで造られたものであろうと思われます。おそらく、西坂の方が若干古いのではないかと思っています。この古墳についても、まだ性格はよくわかりませんが、おそらく河内の地域を支配した物部氏ですね。その物部氏の墓ではないかと憶測されます。それから前後しましたが、先程述べてきました心合寺山古墳については、おそらく三野県主あわのあがたぬしと呼ばれる、地域を支配する家族でござ



図16 黒田八幡宮所蔵画像鏡(上)  
郡川西坂古墳出土画像鏡(下)

ざいますが、その三野県主の墓ではないかというふうに考えられております。ただし、「八尾市史」などでは玉造氏の墓であろうというような事も書かれているわけです。いろいろ説はたてられているんですけど、今のところ一番妥当性が高いのは三野県主の墓であろうという考え方だと思います。その内容については若干、後でふれたいと思います。

図16の下の方の鏡は郡川西塚古墳から出てきました鏡でございます。上の方の鏡は和歌山県橋本市の隅田八幡宮という所の鏡であります。実は、この鏡が問題にされるのは鏡の銘文に重要な文字（癸未年……）が入っております。当時使われた干支ですね。十干十二支、ご承知だとうんですが、十干といいますのは、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸のことです。十一支といいますのは、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥ですが、これらをそれぞれ組合せていくんですね。これを干支といいますね。十干十二支を組合せて年代などを表わすんです。では、癸未年という銘文をもつた隅田八幡宮の鏡、これは何年かと換算していくますと、ひとつは三八二年説、もうひとつは四四年説、それから五〇三年説、それ以外にもあるんですが、このうち四四年と五〇三年、これが有力視されているものです。しかし、五〇三年説が最有力でしょう。隅田八幡宮の鏡と郡川西塚古墳出土の鏡を比較すると、後者の方が古いだろうと考えられます。ですから、おそらく郡川西塚古墳の場合は五世紀代の末葉ぐらいというふうに考えられているわけです。そういう古墳が高安古墳群（後期の古墳群）の中では一番早く出てくる古墳であります。この時点でき大きな古

墳はあまり造られなくなつてしまふわけですね。後は、比較的小さい古墳が次々とつくられます。小さい古墳の代表（小さい古墳の中でも大規模なもの）には、愛宕塚古墳があります。直徑が約二五メートルくらいの大きさでござります。これよりもやや小さめの古墳はどれくらいあるかと言いますと、約二五〇—三〇〇基くらいある。どういう状態であるかというと、図17に仮にAB CDとうつてあります。このうつてあるのは、いずれも別の古墳なんですね。まるで裾を接するように次々と造られているわけです。これをきちっと調査していくと、その切合い関係だと

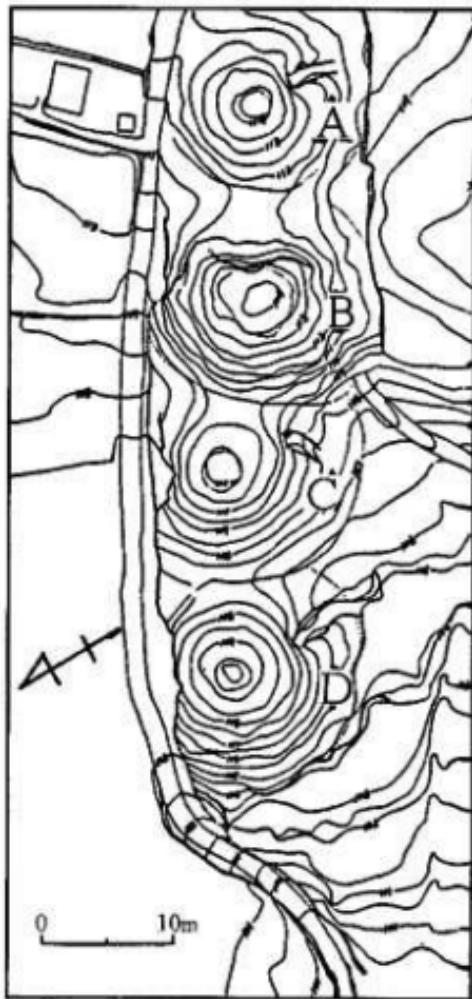


図17 墓丘測量図(脇部川付近)

## 高安古墳群について



写真27 愛宕塚古墳出土の須恵器壺・器台  
(大阪府教育委員会所蔵)

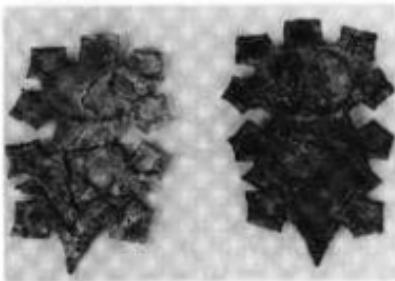


写真28 愛宕塚古墳出土の劍菱形杏葉  
(大阪府教育委員会所蔵)

か、土の堆積状況からどれが古いか、新しいかということもわかるんですが、地形測量しますと大体そういう感じになるんです。

写真27と写真28は後期古墳（愛宕塚古墳）出土の代表的な遺物であります。写真27は須恵器といいます。須恵器という焼物はもともと朝鮮で造られた土器なんすけれども、それを日本でもつくりました。その写真は壺とそれをのせる器台と呼んでいるものです。写真28は剣菱形の杏葉といいます。杏葉というのは、馬の飾りに使うんですね。これ以外にもたくさん馬具類が出土しています。そ

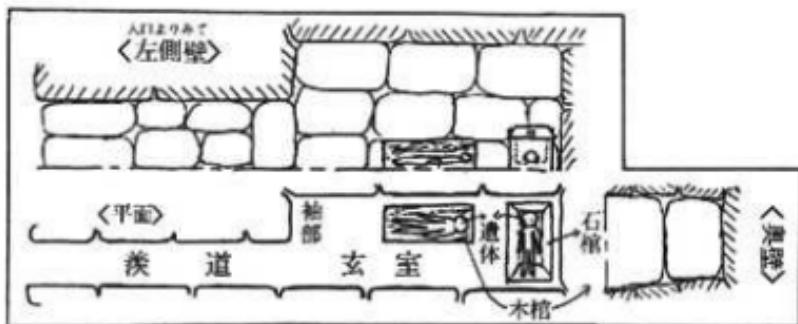


図18 横穴式石室(模式図)

れらは鉄で作って、その上に金メッキをしてあつたり、あるいは銅の上に金メッキをするとかいろいろいろいろあるんですね。

図18は横穴式石室の模式図です。中に入りまして、狭い部分があります。通路になっています。その通路の部分を狭道といいます。奥の方へ入りますと、ちょうど着物の袖の部分のように広がりますので、そこのところを袖部と呼びます。中へ入つたら人間が、いくら手をあげてジャンプしても背が届きません。大きな部屋です。この部分を玄室と呼びます。幅も広いし、高さもある。そこに遺体を入れます。遺体は何に入れていたか。石で作った場合は石棺と言います。現在は、木で作っていますね。木で作った場合は木棺です。木は当然釘を打ちつけますね（そうでない場合もあったかもわかりませんが）。木は腐ります。遺体は残りません。かろうじて歯や骨の一部が残る時があります。しかし、遺体や、木で作った棺はほとんど残らない。でも鉄釘がかろうじて残ることがあるんですね。その鉄釘を点々と確認していくと、木棺の輪郭がわかる場合もあります。頭骨や足の部分が出てきますと、

## 高安古墳群について

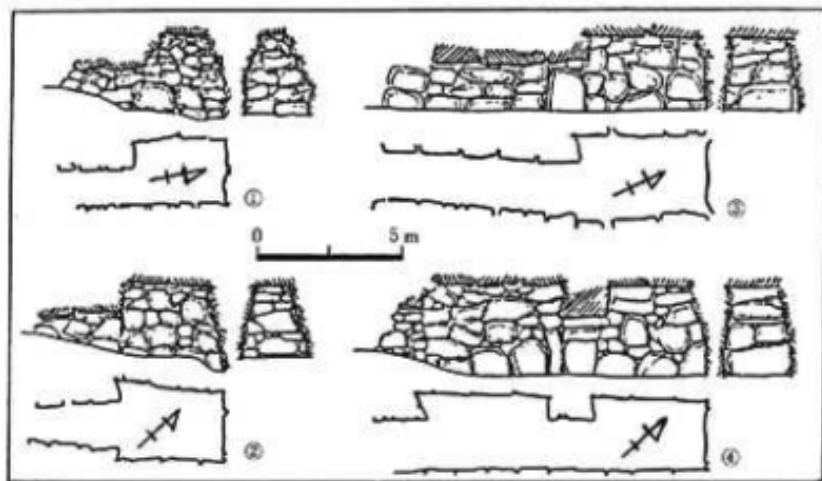


図19 高安古墳群の石室タイプ

どちらが頭であったか、およそわかりますね。昔から北枕はいかんとか、寝る時は北枕にするなどいろいろ言い方をしますが、そういうようなこともいろいろわかるときがあります。木棺・石棺の設置方法も様々です。玄室の奥壁に接するように置く場合や、側壁に接するように置く場合などいろいろあるんですね。二体、三体、多い時には一〇体を超える遺体を一つの横穴式石室の中へ入れることもあるんです。おそらく、おじいさんか、ひいおじいさんはわかりませんが、その遺体をかたづけて、新しく入れるというような事もやってるわけです。時代が非常に多岐にわたり、比較的古いものと新しいものと、順次処理しているわけですね。

図19は、高安古墳群の中の横穴式石室の図であります。①は左側に袖があり（片袖式）、全体に



写真29

小さい石を積みあげ、持ち送りと言いまして、できるだけ天井石を小さくするようにグッと狭めてきてているのです。つまり、天井付近ではできるだけ狭めて、天井石は一個か二個ぐらいですませてしまふんです。こういうやり方は、比較的古い古墳に多いと言われています。だいたい五世紀代の終わり頃から六世紀代の初めぐらいのものが高安古墳群の中にもあると考えられています。②は両袖式、③は片袖式ですね。④は特殊な石室であります。前の方にひとつ部屋があつて、びよこんと石が飛び出していくまた、後ろにある。これを複室と呼んでいます（一室塚古墳）。この二つの部屋がたがい違いにあるというのもあります（二室交互塚古墳）。また、奥の壁にわざわざ、石がびよこんと飛び出している石棚と呼んでいるものも中にはあります（ただし、高安古墳群中の例は、奥壁の一石が玄室内に突出したもので、和歌山県の岩橋子塚などの例のように、本格的な石棚とは性格を異にすると思われます）。そういうった特異なものもあるということです。

それでは、スライドを使いまして、申し上げてきた事の概略を見ていただきたいと思います。

写真29 これは西ノ山古墳であります。ちょうど大阪経済法科大学の北側にあたります。古墳

## 高安古墳群について

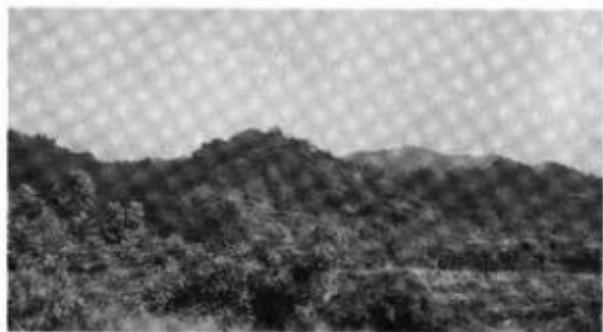


写真30



写真31

の東方に大学のテニスコートがあります。写真の左が前方後円墳の南へ延びた前方部です。右が後円部というように考えられております。

写真30 西ノ山古墳の近く、中ノ谷古墳と呼んでいる古墳であります。男女一対の人骨が出てきたという古墳ですが、玉類（勾玉・管玉・白玉）や刀などが出土しました。

写真31 これは向山古墳です。

手前に池があります。写真中央の盛上がりの部分が古墳だといわれています。その古墳の南（手前の池の北斜面）で、平安時代の終わり頃の瓦窯が発掘されたことがございます。その瓦窯は現在はほとんどつぶされていると思うんですが、部分的に残っている可能性もあるので、この点も含めて、古墳の調査が必要であります。瓦窯とは、瓦を焼

いた場所のことですが、ここは向山瓦窯跡ということで有名です。崖でどんどんくずしていく可能性もあるので、向山古墳とともに、緊急調査を要する所ではないかと思つています。



写真32



写真33

写真32 これは心合山古墳の古い写真です。現在は写真右上側の位置に養護老人ホームが建てられています。古墳の回りは一部畠になっていますが、おそらく濠があつたろうと思ひます。今の雰囲気とは違う貴重なフィルムでござります。

写真33 心合寺山古墳の後円部（右）と前方部（左）はこういう具合につくられています。だいたい五世紀代の古墳と考えていいと思います。きちんとした発掘調査をしていませんので、はつきりわかりませんが、おそらく二段に作つてあるのではないか（二段築成）と考えられるものです。わずかな高低差が後円部と前方部にござります。非常に重要なことで、現在、国の史

## 高安古墳群について



写真34

跡に指定されています。  
写真34 これが愛宕塚古墳でございます。今まで見てきました古墳と比較しますと、時代的には少し新しく、六世紀代に入る古墳でございます。写真中央が横穴式石室の入口です。入口の上の石は、羨道の前方の天井石です。

写真35 その石室内に入りますと、写真では狭く思われるかもわかりませんが、非常に広いスペー

ス（玄室）があります。

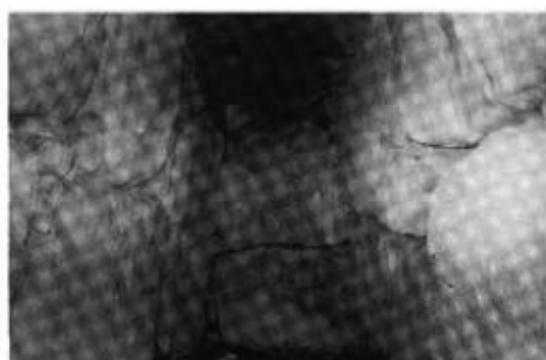


写真35

正面が奥壁で、左右両側に壁があり、上が天井になります。床には石が敷きつめています。この玄室内から石棺の一部が出てまいりました。現物を私も見ましたが非常にきれいな加工がしてあります。それ以外にもたくさんのお土物が出土してい

ます。先程ご紹介しました須恵器とか、金銅製、あるいは鉄の上に金メッキをしたような馬具が出てまいりました。非常にすばらしいものであります。

写真36

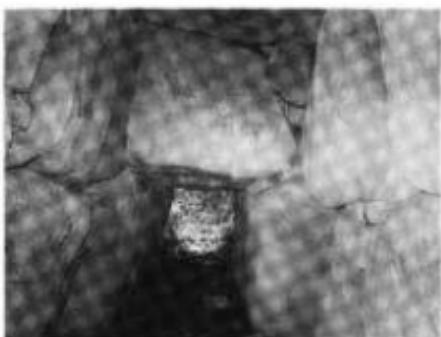


写真36



写真37

写真36 これは石室内から入口を見たところです。入口に続いているところが漢道、手前は玄室になるわけですね。ちょうど見上げれば、見上げ石という大きな石があります。

こういったものが、いわゆる横穴式石室とよんでいるものです。愛宕塚古墳は、八尾市域内だけではなく、大阪府下でも超一級の横穴式石室でございます。石室の全長は一六・七メートルぐらいで、非常にすばらしい規模をもつものです。

写真37 これは最近、八尾市教育委員会で調査されました、郡川の法藏寺の境内にある横穴式石室の入口でございます。この古墳では、石室とその石室内から須恵器・土師器や、木棺に打ちつけた釘の破片がみつかりました。

## 高安古墳群について



写真38



写真39

写真38 遺物の出土状況です。ちょうど袖部になったところに、須恵器の杯と呼んでいる土器とその上に壺が置かれた状態で出てきました。発掘調査で出土した遺物は、すぐに取上げないで、必ずそのままの状態で写真を撮るのです。さらに、こういう位置にあったということをきちっと図面にもとるわけです。そして、本にまとめてこういう資料が出土しましたということを報告するわけです。これをすぐに取り上げてしまつたら、出土状況がわからなくなってしまいます。発掘調査というのは、写真や図面にとつてから遺物を取り上げ、詳細に研究していくのです。

写真39 これは塙内（梅岩寺西方）の古墳です。残念ながら、天井石はみんなすでに破壊、あるいは持ち出されてしまっています。逆にいえば、天井石を積む前の状態がわかるんですね。こういうふうに積んでおいて、後で天井石をかぶせたんでしょうね。この調査で

は墳丘の裾あたりのラインがわかりました。

このラインが古墳と、そうでないところを区画していると理解できます。このような調査も非常に重要であります。遺物だけが重要なではなくて、古墳の構造、あるいは墳形、そういうものを見つける作業も非常に大切になってくるわけです。



写真40



写真41

写真40 遺物の出土状況です。上方の遺物は須恵器（高杯と壺）と呼んでいます。実物は青みがかった灰色をしています。下方の遺物は土師器（壺）です。この他にも点々と、土器が見つかりました。下方の石材は石棺材の一部です。

写真41 これは銅の上に金メッキした耳の飾りですね。これを金環と呼んでいます。環の間のあいているところを、耳にはめたんではないかと言われています。

今までの話で、遺物だとか古墳の概略などがおわかりいただけたと思うのですが、まだまだ話足りないこともあります。最後に簡単にまとめまして、お話を終わりたいと思います。

見ていただきました古墳の中で、比較的早い時期、古墳時代の前期あるいは中期の古墳を作ったのは誰か。それははつきりわかりませんが、必ず、その地域を支配した人がいたはずなんですね。それは三野県主ではないか。その被葬者が樂音寺・大竹古墳群を築き得たんではないかと思つてゐるわけです。三野県主は高安地域の氏族を統括する一方で、ヤマト政権の祭祀権の強力な支配体制の一翼を担つてゐたと推察されるのであります。しかしその後、没落を余儀なくされ物部氏などの台頭を促すことになります。そして中央の規制化で、高安地域に渡来系氏族の高安氏などの編貢があり、旧来の氏族にかわつて勢力を伸ばしていくことになります。こうして、旧来の固有の生産や秩序体制を分解し、氏族を構成する有力家族を、ヤマト政権が直接掌握すべく政治的な意図に基づいてなされた氏族の解体を契機として、群集墳（高安古墳群）が出現してきましたのではないかでしょうか。ところが、國家の規制があつて、それがだんだんつくられなくなつてきました。墓域も限定されてきた。古墳をつくる人が限られてくる。高安ではそういう比較的新しい終末期古墳といふものはつくられなかつたと言つていいんですけども、最近だんだんと見つかっています。東大阪市と接する所にある桜山古墳は、七世紀前半ぐらいの時期の古墳だと思いますが、実際にこういう新しい古墳もつくられていくことは事実ですね。では、規制されにくにもかかわらず、新しく古墳をつくつていく人達はどういう人達かというと、おそらくはうまく国家体制の中に組み入れられていく人達、すなわちもつと極端な言い方をしますとエリートで

すね。そのような人達が古墳を築き得たのではないかと考えてゐるわけです。その体制というの  
はのちに律令体制と呼ばれてゐるものであります。大きなきっかけになったのは、おそらく壬申  
の乱といわれる大友皇子と大海人皇子（のちの天武天皇）の戦いであります。これらの事件以  
降、新たに政治機構の中に組込まれていく、そういう人達がこの終末期古墳を作り得たんではな  
いか。この時期以降の墓が、八尾に隣接する奈良県下の地域や柏原市の北東部で最近見つかって  
います。そして、彼等は古墳造営と相前後して、仏教文化を受け入れ、寺院の建立を行います。  
その寺院はどこかといえば、八尾市域の山麓部では、心合寺山古墳近くの「心合寺（秦興寺）」、  
あるいは郡川周辺の「高麗寺」、南の「教興寺」などです。

最後になりましたが、高安古墳群の保存について、今のところ、開発が進んでいる柏原市に比  
べますとまだ残されていると思います。至急に八尾市も古墳を守るために方策を講ずる必要があ  
ります。自然環境の保全と埋蔵文化財の保護を今怠れば、近い将来、ひどい状況になるのではな  
いかと危惧しております。高安古墳群の中の特定の古墳だけが残るのではなくて、小さい古墳も  
含めた群全体として残るような、そういう保存の方法を考えていいただきたい。行政の立場にある  
人達にとっては、非常に苦痛なことかもわかりませんが、やはり、文化財の保存については大きな  
声で言わなければ誰も言わないので。文化財を代弁してやらないと誰も言いません。ですから、文化財に關係のある人達は、どんなことがあっても文化財の保護を前提にして物事を考えて

## 高安古墳群について

いかないと、文化財はなお一層、後回しになると思うのです。そういう意味で切実に文化財の保存について、皆様の尽力を得たいというふうに考えておるわけです。

以上で話を終わらせていただきたいと思います。「理解いただけなかつたところがあるかもわかりませんが、又別な機会にお話ししたいと考えておりますので、よろしくご了解いただきたいと思います。どうも長らくご静聴ありがとうございました。」

### △参考引用文献▽

- (1) 秋里藤吉編 堀口康生校訂「河内名所圖会」
- (2) 中河内郡役所編「中河内郡誌」
- (3) 枚岡市役所「枚岡市史」第三卷
- (4) 大阪府教育委員会「八尾市高安古墳群の調査」「八尾市高安古墳群の調査(第二回)」
- (5) 「高安城跡範囲確認調査概要」
- (6) 「勧大阪文化財センター」「大阪文化誌」第六号
- (7) 佛教大学考古学研究会「陵」三・四合併号
- (8) 沢井浩二「八尾の古文化財その1古墳」
- 柳橋利光「八尾・柏原の歴史」

昭和六一年一一月一日

於 市立労働会館

白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」(『古代学研究』第四、一・四、否伊弓)

八尾市史編纂委員会「八尾市史」

八尾市史編纂委員会「八尾市史(前近代)本文編」

八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和五八年度発掘調査報告書」、「八尾市内遺跡昭和六〇年度発掘

調査報告書」

八尾市役所「八尾の史跡」

吉岡哲「八尾市西ノ山古墳・中ノ谷古墳出土遺物について」(『古代学研究』第八二号)、「八尾市都川

東塚・西塚古墳の測量調査」(『探訪 古代の道』第二卷)、「高安古墳群」(『探訪 日本の古墳  
—西日本編—』)、「八尾の古墳」(『大阪春秋』第四四号) 他

#### △写真提供△

- 写真27・28  
写真37・41  
八尾市教育委員会

古代からのメッセージ

久宝寺遺跡発掘調査の成果

大阪文化財センター

赤木克視

ただ今、ご紹介に預かりました財大阪文化財センターの赤木です。こうした場でお話しすることになればいませんので、うまく喋れないと思いますが、悪しからずご容赦下さい。

本日は、久宝寺遺跡の調査ということでお話しさせていただきます。久宝寺遺跡と言いますのは、久宝寺緑地付近の八尾市西久宝寺を中心として、北は東大阪市人蓮東、南は八尾市神武町から北龜井町、東は久宝寺から南久宝寺、西は大阪市との市境までという広大な面積を占める大遺跡です。私が久宝寺遺跡の調査をしましたのは、日本道路公団が進めています近畿自動車道天理—吹田線の建設に伴うものです。この高速道路は、府道大阪中央環状線の中央分離帯の中に建設されています。

近畿自動車道と言いますのは、名神高速道路や中国自動車道から分岐し、近畿圏をネットする高速道路網です。その内の天理—吹田線は、名神高速の吹田ジャンクションから奈良県の天理までを一つの路線とするのですが、松原—天理間は西名阪自動車道として供用されています。吹田—松原間は、通称大阪線と呼ばれていますが、その南半分の東大阪市から松原間は、遺跡の密集している地域です。大阪線の建設は、吹田側から順次南へ進んできましたが、東大阪—松原間については、遺跡の調査を事前にしなければいけないということで、昭和四六年度ぐらいから大阪府教育委員会と日本道路公団との間で取扱いが協議されてきました。

河内平野の低湿地にある遺跡というのは、その当時から非常に遺構面が深く埋没していることがわかつていました。そのため、通常の遺跡を捜す方法である地表観察では遺跡を発見することは困難です。また、調査方法も素振りで上から順番に下へ掘り下げることは、安全上問題がありました。

そこで、とりあえず、どれくらいの深さに、どのような遺構・遺物が埋没しているのかを探るために、試掘の意味で第一次調査を実施することになりました。この調査は、(財)大阪文化財センターによって昭和四八・四九年度に行われましたが、その結果、やはり遺構面が深い所では地表ド四一五メートルにもなることが明らかになりました。

大阪府教育委員会と日本道路公団は、第一次調査の報告を受けて、本調査の実施方法等の協議を進めました。そして、本調査も第一次調査に引き続き(財)大阪文化財センターに担当させることとし、昭和五一年度より、長原遺跡から調査を開始しました。

## 二、大阪線の遺跡

大阪線の遺跡は、一番北端が中央環状線と阪神高速の東大阪線が交差する荒本交差点南の新家遺跡です。そこから南に西岩田、瓜生堂、巨摩、若江北、山賀、友井東、美岡、佐堂、久宝寺、龟井北、龟井、城山、長原、そして大和川を越えて大堀と一五の遺跡がほぼ連続して並んでいます。これは、調査開始当初よりこのように連続して遺跡が存在していると分っていたわけではあ

りません。先程も述べましたように、河内平野の遺跡といいますのは非常に深く埋没しています。

そのため、遺跡が発見されるのは、河川改修とかの工事で地中深く掘下げた時に、排水中に遺物が入っているのが見つかるという場合がほとんどです。これは、調査の段階でも同じようなもので、当初各遺跡の端と考えられていたところまで調査が進んでも、まだ遺構面が先に続いていることがわかります。そこで、調査範囲を広げるということの繰返しの結果、このように遺跡が連続してしまったのです。

図20は、久宝寺遺跡周辺の遺跡分布図です。遺跡の範囲が広くなるのは、大阪線のみならず、各自治体の調査でも同じような傾向を示しておりまして、久宝寺遺跡周辺はほぼベタ一面遺跡となつております。八尾市域23、東大阪市域14と書かれてあるのが久宝寺遺跡ですが、大阪市域は88の加美遺跡となつております。遺跡名称は、市域により異なつておりますが、実際の調査では同じような遺構が検出されています。昔の人には今の行政区画は関係ありませんから、久宝寺遺跡と加美遺跡は同じ遺跡と考えたほうがよいようです。そのため、私達は久宝寺・加美遺跡と並べて呼ぶ場合もあります。

このことは、他の遺跡でも同じことがいえまして、行政区画や道路等で分けられた遺跡の境が必ずしも地中の遺構面の広がりの限界を示しているのではない場合が多く見られます。

### 三、調査の方法

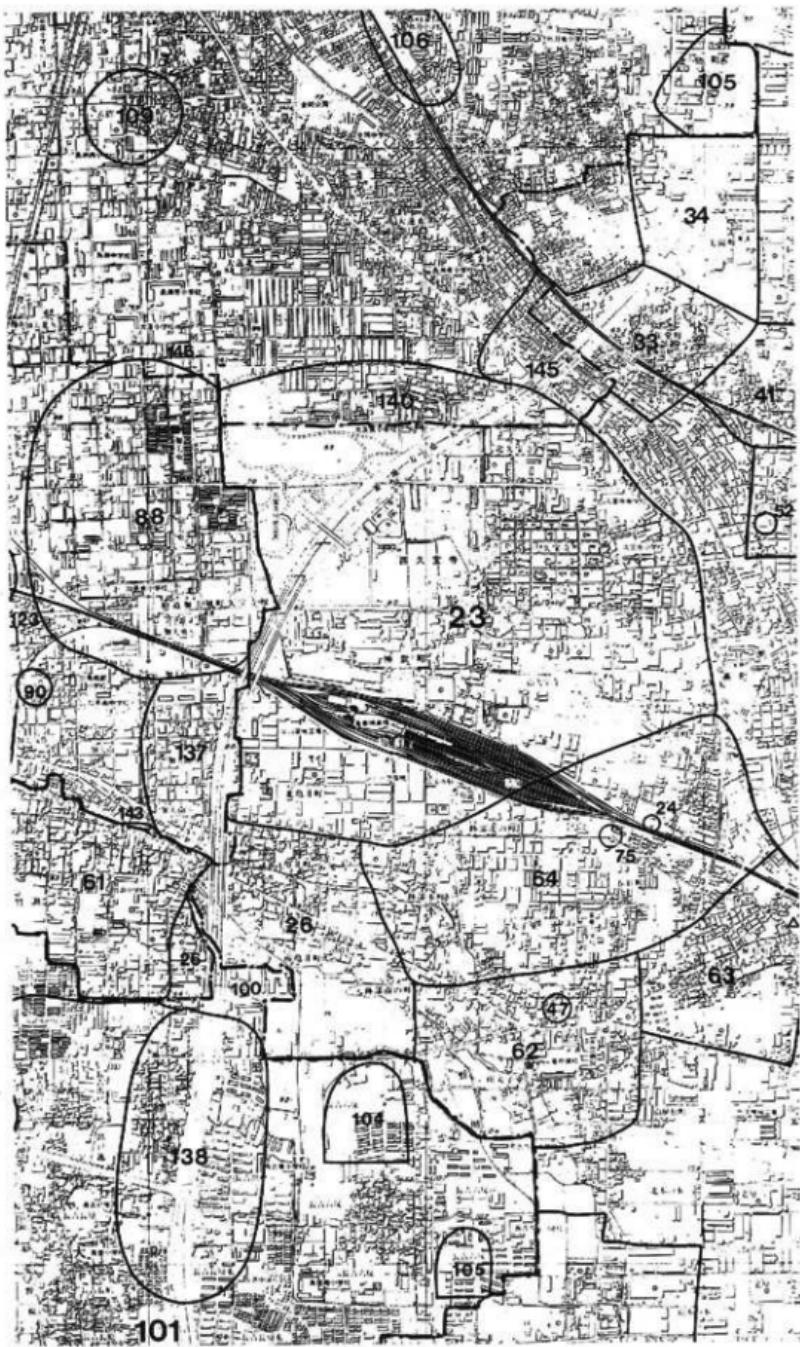


図20 久宝寺道跡周辺の道路分布図

## 久宝寺遺跡発掘調査の成果

久宝寺遺跡は、高速道路の路線延長で約一・五キロメートルという非常に長大なものです。そのため、一度に調査することが困難で、南北二地区に分割することになりました。北地区が昭和五五年度より、南地区が昭和五七年度より調査に入っています。各地区とも実際の調査では更に細分し、北地区を三調査区、南地区を二調査区に分割しています。調査区の呼び方は、北側から北地区の第一調査区、第二調査区、第三調査区、南地区の第一調査区、第二調査区となりますが略して北の一、南の二とか呼んでいます。

大阪線の調査は、一種独特の調査方法を取っています。<sup>(注2)</sup> 調査区が長方形の短冊を中央に刺したような形をしています。これは、一度にこの様な形で調査するのではなく、真中の中の部分と両側の短冊の部分の二段階に別けて調査しています。この調査方式を「トレンチ調査方式」と呼んでいますが、なぜこのようなややこしい調査をするかといいますと、文化財保護側と開発者側との網引きの中から生みだされたものです。

大阪線の本調査を始める前の協議の段階で、調査範囲をどのようにするかが話合われたのです

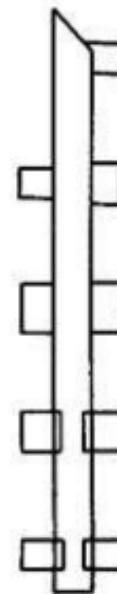


図21 トレンチ 模式図

が、文化財の側は高速道路用地全域を調査しなければならないと主張しました。ところが、開発者側の日本道路公団は、高速道路は高架道路として建設するため、遺跡を破壊する橋脚基礎部分だけの調査でよいのではないかといいます。両者の話し合いはなかなか決着がつかなかつたのですが、とりあえず調査をしようということで、長原遺跡の調査は橋脚基礎部分に限定して行うことになりました。ところが、実際に橋脚部分の調査を行うと、古墳が次々と検出されたのです。古墳は、保存が必要とのことで、古墳を避けるように橋脚の位置が変更されました。しかし、変更した橋脚部分の調査でも古墳が検出され、また橋脚位置の変更を余儀無くされるという事態になつたのです。

橋脚位置の変更というのは、実際にはなかなか難しいものです。簡単に一基だけを動かせばよいというものではなく、何基かがセットで強度を保つようになっています。そのため、一つの古墳を避けるために数基の橋脚位置を変更せざるを得ず、その都度設計費用がかかります。開発者も橋脚の位置だけの調査とはいえ、費用と時間の無駄の多いこの方法は、改善しなければならないとの認識に達しました。

そこで、長原遺跡の調査終了後、調査方法の再検討が行われ、その結果採用されたのが「トルチ調査方式」です。この方式は、まず高速道路の幅約三〇メートルの用地中央に幅一〇メートルのトレーンチを設け、その中を調査します。この調査の目的は最終構面までの間にどのような

## 久宝寺遺跡発掘調査の成果



写真42

遺構、遺物が分布しているかを探るためのものです。そして、その結果をもとに、保存すべき遺構、遺物を避けて橋脚の位置を決定します。次の段階として、決定した橋脚基礎部分のうち、真中のトレンチで既に調査済みの部分を除いた両端を調査します。これが「トレンチ調査方式」です。この方式では、保存を必要とする遺構等はすべてトレンチ調査の時点で措置するかわり、橋脚部の調査で何が検出されても橋脚位置の変更はしないということになっています。このため調査範囲が長方形の半刺スタイルになるわけです。それと

調査は、遺構面が深く埋没しているために、鋼矢板で調査区を囲って、壁面が崩壊するのを防止しています。鋼矢板の打設は、調査の場所が大阪でも有数の交通量を持つ中央環状線のすぐ脇であり、壁面の崩壊が直ちに大事故につながるため、欠かせないものです。

写真42　調査前の写真です。中央環状線の中央分離帯の中の高速道路用地が今回の調査区です。道路の両側に木が茂っている所が久宝寺緑地になります。分離帯の中央に線が引いてありますが、この線内が「トレンチ調査方式」のトレンチ部あたります。

#### 四、河内平野

一言で河内平野といつても、南河内の台地上も含めた広い範囲を指す場合もありますが、逆に中河内の太和川の形成した沖積地のみを指す場合もあります。狭義の河内平野は、河内低地とも呼ばれます。今回のお話で河内平野という言葉を使いましたら、狭い意味での河内平野を指していと理解して下さい。

氷河時代の最終氷期でもあるビュルム氷期の最盛期、約三万年から二万年ぐらい前には、海平面が現在よりも百数十メートルも低下していたと言われています。そのため、この時代の河内平野は、完全に陸地でした。それが、氷河期が終わり、間氷期になると、水が大量に溶け始めまして、海面がどんどん上昇してきます。縄文時代の前期ぐらいには、その上昇がピークに達しました。だいたい今から五～六千年前と言われていますが、そのころには、久宝寺も含めた河内平野一帯は、海水の入りこんだ海となってしまいました。

ところが、縄文時代の前期以降、今度は海面が徐々に低下してきます。海面が低下すれば、海岸線も後退していきますが、河内平野では、太和川が上流から大量の土砂を運んできたために、海岸線が北へ急速に後退していきます。久宝寺遺跡付近では、縄文時代の後期から晩期にかけては完全に陸地化しています。私は、久宝寺遺跡の近くで地表下一二メートルまで調査したことがありますが、約七～八メートル程下に海と湖の境があります。そこから下の層にはハマグリやア

サリとかの海の貝が入っていますが、それより上層にはシジミとかの淡水や汽水で育つ貝が入っていました。このことは、河内平野が海水の入りこんだ湾から徐々に淡水の湖に変わってきたことを示しています。

ともかく、大和川がもたらした土砂は膨大な量です。縄文時代後期以降、大和川は流路を縦横に変えながら土砂を堆積させていき、河内平野を今の高さにまで埋め尽くしたのです。

### 五、縄文時代

久宝寺遺跡では、縄文時代の川が何本も検出されています。陸地化したばかりの平坦な大地を川が流れ、上流から土砂を運び、自然堤防を発達させていった様子がよく観察できました。川の中には砂が堆積していますが、その砂の中に縄文時代の後期から晩期にかけての土器が大量に入っています。ただ、それらの土器は、大半が表面がズルズルに摩滅しているもので、かなり上流から流されてきたものです。ところが、中にはほとんど摩滅していない土器も出てきます。このような土器は、あまり遠くから流れてきたものではないと考えられますので、近くにその土器を使っていた集落があるのではないかとかなり注意深く調査するのですが、残念ながら大阪線の調査では、縄文時代の遺構は見つかりませんでした。

ところが、当時の人達が活動していた痕跡は、至る所に残されていました。それは、人と鹿の足跡です。足跡の多くは、川の底とかで検出されていますが、人と鹿の足跡がすぐ横で見つか

る場合もありました。当時の河内平野は、葦など  
が生え茂った湿地でしたが、そこに集まる鹿を狩りにき  
たものと思われます。また、魚や貝を捕りにきた場合も  
あったでしょう。ともかく、新たに出現した広大な湿地  
は、縄文人の格好の狩猟、採集の場所となつたのでしょ  
う。

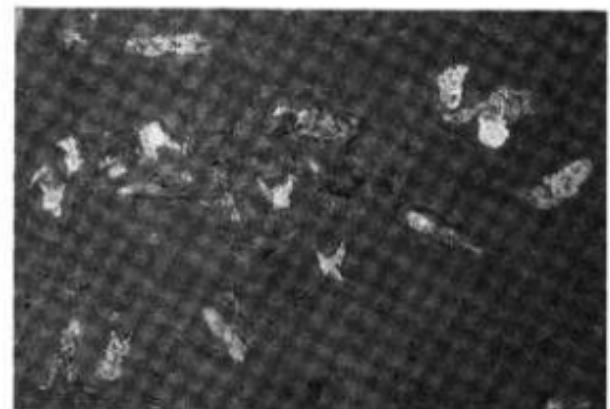


写真43

写真43 先程申し上げました人と鹿の足跡です。人の足  
跡は、五本の指の跡がはっきりと残っているものもあります。  
二股に分れているのが鹿の足跡です。このように、  
人と鹿の足跡が同じ面に残されており、しかも足跡の中  
に同じ砂が埋まっていることから、人と鹿はあまり時間  
差なくこの場所を歩いたことがわかります。

久宝寺遺跡の縄文時代で特に注目すべきものは、北の1で出土した晩期の長原式の土器片に標  
跡が残されていたことです。長原式土器は、一応、縄文時代の一番最期に位置づけられる土器で  
すが、地表下約三メートルの粘土層の中から出土しました。粘土層の中から出土しましたから、  
この土器片は、元の場所からほとんど動いていないと考えられます。

縄跡がついているということは、稻作が行われていたことを証明するものですが、実際に河内平野で稻作が開始されたのが何時かというのは、微妙な問題を含んでいます。長原式土器が縄文時代の土器とすれば、縄文時代の終わりには、河内平野において稻作が行われていたといえます。ところが、世の中がいっぺんに変わるという説にもいきません。稻作の技術を持った人間が西の方からやってきて、河内平野で稻作りを始めたとしても、周囲は縄文文化を保持している人々が生活していたはずです。そういう人達との交流の中で、たまたま長原式土器に縄跡がついたとすれば、必ずしも縄文時代から稻作が始まつたとは言えません。この土器の出土した同一粘土層の上部からは、弥生時代前期の土器片も出土しており、あまり時間差がないとすれば、こうした可能性も強いと考えられます。しかし、北九州では弥生時代とは平行しない、より古い時期の水田が検出されていますから、将来的には、河内平野においても確實に縄文時代に属する稻作の証拠が発見されるかもしれません。

#### 六、弥生時代

弥生時代に入りますと、河内平野では本格的に稻作りが始まります。大阪線の調査でも、若江北とか山賀遺跡で水田の跡が検出されています。しかも、その水田は、技術的に椎指とは言えない立派な畦畔とか用水施設を持つたものです。このことから、河内平野で稻作を始めた人達はある程度確立した稻作技術を保持していたと考えられます。

久宝寺遺跡では、前期の明確な遺構は少ないですが、溝・ピット・土壌とかが検出されており人が住んでいたことは間違ありません。それと、川の中に杭を打込んだしがらみが検出されていますので、水田も作っていたものと思われます。

弥生時代前期の集落は、それほど規模は大きくありませんが、中期になりますと集落の規模が大きく拡大します。

北側では瓜生堂遺跡、南側では亀井遺跡という大集落が形成されます。これらの遺跡は、居住域と考えられる無数のピット群とその周囲に築かれた非常に多くの方形周溝墓が検出されています。このことから、河内平野では中期の段階において非常に安定した環境と生産基盤が確立されていたと考えられます。

写真44 南の1の弥生時代中期の土壌の中から見つかった大量の稻穂です。土壌の中にぎっしりと詰まっていたため、穴の中に貯蔵されていたものでしょう。稻穂の形を見ると、非常に先端に近い部分で刈取られていますので、当時の稲刈りが石庖丁で穗摘みされていたことがわかります。久宝寺遺跡では、当初、中期の遺構はあまり出でこないと考えられていました。しかし、実際

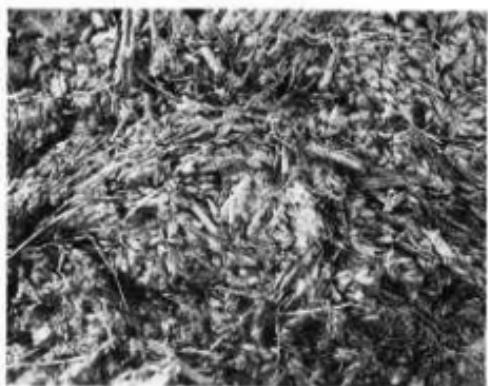


写真44

## 久宝寺遺跡発掘調査の成果

に調査を進めますと、瓜生堂や龟井ほどの密集度はありませんが、掘立柱建物とか方形周溝墓とかが多く検出されました。この時期に問題になりますのは、久宝寺遺跡に隣接している加美遺跡で巨大な方形周溝墓が検出されたことです。加美遺跡は大阪市によって調査されていますが、距離的なものとか検出される遺構からして久宝寺遺跡とは同一の遺跡と考えられることは、既に述べたとおりです。加美遺跡の方形周溝墓は、新聞等でも大々的に報道されたため、御存知の方も多いと思いますが、墳丘の上端で長軸約二二メートル、短軸約一メートル、墳丘の裾とか周溝を含めれば三〇メートルを超えるような全国的にも屈指の規模を持つものです。

方形周溝墓が発見された当初は、この埋葬形態が古墳の祖先になるものではないかと注目を集めました。従来は、古墳時代に入ると突然巨大な前方後円墳が作られますか、それ以前の弥生時代の墓は土壙墓、甕棺墓などの小規模な埋葬形態しか知られていました。そのため、墓の形態が、なぜ小規模な墓から全長何百メートルもの古墳に移行するかが謎でした。弥生時代のようない農耕社会になると、集落内で首長層とそうでない層に分解していきますが、そうした首長層はさらに王に成長していきます。小規模な方墳と同じ形を持つ方形周溝墓は、まさにそのような成長過程の首長層の墓ではないかと考えられた訳です。

ところが、近年、弥生時代の集落を広い範囲で調査する機会が増えたのですが、そうした遺跡では、中期を中心に非常に多くの方形周溝墓が検出されます。集落のほとんどの人が方形周溝墓

に埋葬されたのではないかと思えるほどです。しかも、それらの方形周溝墓を比較しても、あまり金持ちとか貧乏人とかの区別が目につきません。北九州では青銅器などの副葬品の種類と数とかで集落内の身分差が判断できますが、畿内では方形周溝墓に埋葬する場合でも副葬品を入れません。そのため、余計に差が目立たないと言えます。

しかし、加美遺跡で検出された他を圧する巨大な方形周溝墓は、主体部、考古学用語で死者を埋葬した施設をこう呼ぶのですが、その数が二〇数基にも及びます。このことは、集落内で、非常に有力な家族が形成されてきたことを窺しているのでしょうか。

当然、この頃には、魏志倭人伝の記述にもあるように、小さな国がたくさんできていたと考えられます。まだ、集落内の大半の人々は平等でも、その中から卓越した力を持つ首長層が成長していったのでしょうか。

弥生時代中期の河内の遺構は、非常に広大な範囲を占めますが、弥生時代後期になると、遺跡範囲が大幅に縮小していきます。当時の河内湖の岸辺に近い瓜牛堂遺跡の調査でも、弥生時代中期の終わり頃から泥炭層が発達しやすい環境になっています。その頃から、河内平野があまり居住に適さなくなるのではないかと考えられます。後期の時期は、洪水も頻繁に起こったようで、厚い所では一メートルにも及ぶような膨大な砂の堆積が、大阪線の大半の遺跡で見られます。自然環境が非常に苛酷であったようです。しかし、そのような環境でも、人々が河内平野を見捨て

## 久宝寺遺跡発掘調査の成果

た訳ではなく、家や墓、水田なども検出されています。ただ、その規模は、中期とは比較にならないくらい縮小しています。久宝寺遺跡においても、同様な傾向を示し、遺構分布が散漫になります。それでも、住居址一棟、柱根の残るピット、溝、土壙、木棺墓、水田等が検出されています。

### 七、古墳時代

弥生時代末から古墳時代に入りますと、久宝寺遺跡は集落の規模が非常に広大なものになり、大発展をとげます。検出される遺構・遺物も膨大であり、河内平野でも屈指の大集落を形成します。検出された遺構は、堅穴式住居、掘立柱建物、方形周溝墓、溝、土壙、水田、畑など多種にわたっています。

新しい時代の到来を感じさせるかのように、方形周溝墓でも、従来は方形をしたものだけでしたが、前方後方墳に近い形をした方形の突出部をもつものが出現します。遺物にしても、瀬戸内や山陰とかの遠くの地方で作られた土器が多量に出土します。このように、地方で作られた土器が出上するということは、その地方の人々が土器を持参して久宝寺に来たと考えられます。もちろん、何が土器につめられていたのかは分りませんが、当時、非常に広域な地域間で人とか物の活発な交流があったことを物語っています。

古墳時代前期は、小国家群を統合して、徐々に強力な統一政権が形成されはじめた時期にあた

りますが、その中心的な役割

を果たしたのが、大和、河内  
を中心とした地域です。その

ため、この地域に各地の土器  
が多量に出土するのも、そう  
した政治的求心力が働いてい  
る反映であると考えられます。

写真45 南の1の古墳時代前  
期遺構面で検出された方形の  
突出部を持つ方形周溝墓です。

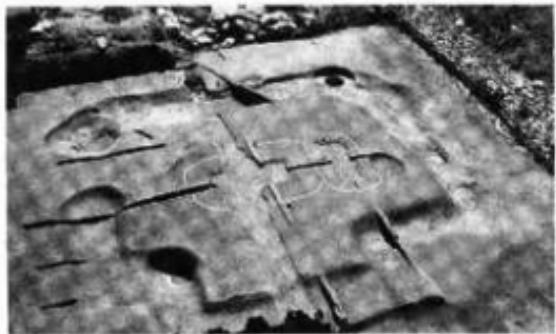


写真45



写真46

ていますが、弥生時代には無かつた墓の形です。真中の線で書かれた部分が主体部と呼ばれる死  
者を埋葬した墓壙として、二体埋葬されています。

写真46 先程の突出部を持つ方形周溝墓の中で検出された供献土器です。死者を埋葬する  
際に、お供え物をしますが、それを入れていた土器が溝の底にころげ落ち、埋まってしまったも  
のです。そのため完形に近い土器も沢山出土します。

## 久宝寺遺跡発掘調査の成果



写真47



写真48

写真47 突出部を持つ方形周溝墓の北西外側で、細かく割れた土器がばらまかれたような状態で多量に出土しました。人為的に割って捨てた可能性もあり、それならば、前の埋葬時に使用した供獻土器を墓の脇に捨て、新たにお祭りをしたとも考えられます。ともかく、同じ方形周溝墓でも、土器を非常に多く使っている墓や、ほとんど土器を持たない墓がありまして、千差万別です。

久宝寺遺跡では、活発な地域間での交流を証明するかのように、南の2で船が出土しています。しかも、単なる丸木船ではなく、刳船の上に色々な構造物を付けまして、積載量の増加や耐波性の向上を図った準構造船と言われるものです。古墳時代前期以前の時期で、このような準構造船が出土したのは、おそらく日本で最初だと思われます。久宝寺遺跡は、当時、既に河内湖の湖岸

からは相当内陸に入っていますので、この船は、川づたいに久宝寺まで運ってきたのでしょうか。

写真48 南の2で古墳時代前期の船の出土した遺構面です。堅穴住居址や柱穴群が検出されおり、集落内の居住域にあたります。このような居住域のすぐ脇の溝で船が出土しています。

写真49 南の2の古墳時代前期の溝の中で多量に出土した土器群です。完形品がごろごろ転がっているような状態で見つかっております。古墳時代前期の溝には、このような土器を大量に含むものが多いのが特徴です。船が埋まっていたすぐ上には、古墳時代前期でもやや新しい時期の溝があり、その中にも多くの完形品が入っていました。完形品が出土するということは、後の時代

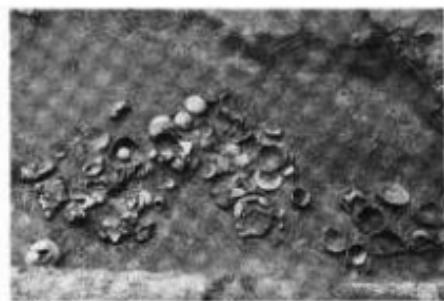


写真49



写真50

## 久宝寺遺跡発掘調査の成果



写真51

の攪乱を受けていないことで、船の時期を限定するのに非常に役に立っています。

写真50 船が最初に見つかった状態です。軸の部分だけでは船とは分らなかつたのですが、土層観察用の壁を取り外しますと、本体の割り込み部が現れましたので、船と分つたわけです。残念ながら、鋼矢板によって切断されていました。

写真51 船の残りが非常に良かったことと、軸の形状から只の丸木船ではないことが明らかでしたので、大阪府教育委員会と日本道路公団にお願いして鋼矢板の反対側を調査させてもらいました。その残りの良さからして、船が完全な形で残っていると考えられたのですが、調査の結果、残念ながら全長三メートルほどで人為的に切断されていました。しかし、その代わりに船の軸に組合わされる船首材の部材が残されていました。

船は、刳船、いわゆる丸木船から構造船に発展していくますが、その過渡的な形として準構造船が作られます。準構造船とは、刳船の上に船首材や船尾材、舷側板などを装着して耐波性や積載量を増した船のことですが、全国的に見ても、そうした準構造船の出土は極めて珍しいものです。珍しい中

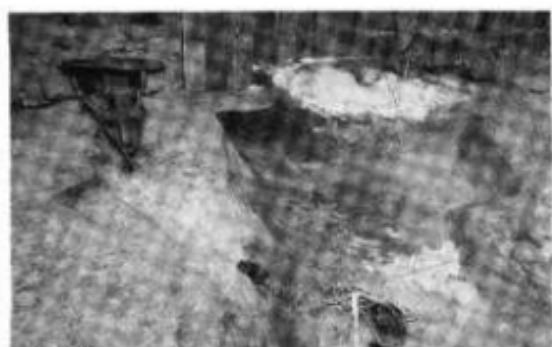


写真52

でも、大阪での出土例が何例かありますが、それらは鉄釘が使われていたりしますので、時期は明瞭ではありませんが、古墳時代後期以降のものです。久宝寺の船の場合には、船の上部に古墳時代前期の完形品を含む布留式と呼ばれる土器の入った溝があり、船を埋めている土層からは、同じ古墳時代前期でも布留式よりは一時期古い庄内式の土器が出土しています。そのため、船が庄内式土器の使われていた時期のものであることは明確です。船は、出土する場所が川とか湖、沼とかが大半で、船の使用されていた時期の分るものは少ないものです。久宝寺の船が古墳時代前期と限定できたために、従来、弥生時代から古墳時代には縁とか埴輪とかで準構造船が存在するであろうことが推定されていましたが、実物の出土によって、その存在が証明されたことになります。

写真52 船の出土状態です。大溝に合流する細い溝の中につぼりと納まっています。船は、人為的に切断されていますが、この場所で切断したのであれば、周辺から木屑とかがたくさんでてくるはずです。ところが、そうした木屑が見当たりませんでしたので、おそらくどこか近くの別

## 久宝寺遺跡発掘調査の成果



写真53

の場所で切断したものを、この場所まで引入れたものでしょう。どちらにしても、船は水に浮べていたものですから、こうした大溝から大きな川の本流に出て、さらに河内湖から大阪湾にまで出ていったものと考えられます。

古墳時代中期から後期にかけて、久宝寺遺跡は、再び集落の規模を縮小していきます。中期の遺構として顕著なものは、北の3で検出された掘立柱建物と大規模な河川護岸があります。中でも、河川護岸は注目されるものです。河川護岸は、丸太や角材を使って格子状に組合わせたもので、その前面に草などを貼つて川岸を保護したものです。また、洪水堆積層である砂層中には壊された護岸の残骸もいくつか見つかっています。

北の3を中心とした付近では、いわゆる韓式土器と呼ばれる朝鮮半島で使用されていた軟質の土器が多量に出土しています。そこで、大胆な推測を加えれば、半島の進んだ技術を持った渡米人が久宝寺に定着し、集落を守るとともに、稲作の用、排水も可能な大規模な河川護岸を構築した。しかし、それにもかかわらず、洪水が頻繁に起こって護岸

を押流し、その度に護岸の修復が行われた。この地域の開発は、そうした洪水との戦いに明暮れ、短期的には成功しても、長期的には成功しなかったのではないかと考えられます。

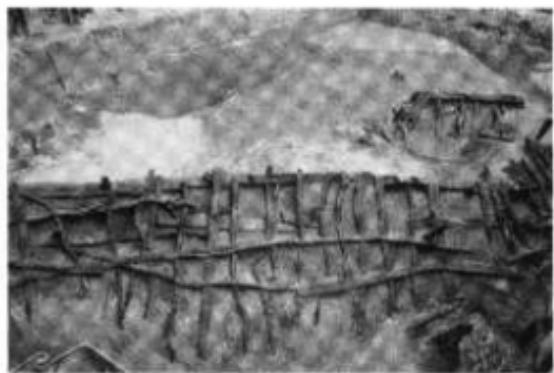


写真53

写真53 北の3で検出された古墳時代中期の護岸を拡大したものです。非常に大規模に木組がされています。ほぞ穴をうがつて籠木と横木を組合わせ、さらにその上に草とかを敷きつめて洪水から岸辺を守るように工夫しています。

写真54 北の3の別の場所で検出された護岸です。草敷きなどは流されて、骨組だけが残されています。そのため、

木組の構造がよくわかります。後側には先に流失した護岸の残骸が残っています。このように、洪水により、護岸が壊されても作りかえるということが何回か繰返されていることからしても、河内平野で、水を制することがいかに難しかったかが実感できます。

このように、河内平野の低湿地の開発は、非常な困難を伴っています。そこで、大阪線の調査結果からすると、古墳時代後期から以降、台地の上やその縁辺部での大規模な開発が行われるよ

うになります。長原遺跡や城山遺跡で、広範囲に水田が検出されています。台地の上での稻作は水さえ引ければ比較的安定した耕作が可能です。しかも、乾田化できますから、有機分の分解が速く、生産力の高い水田となります。

#### 八、奈良・平安時代

その後、河内平野において、遺構が顕著に検出されるのは奈良・平安時代に入つてからです。久宝寺遺跡でも、多数の掘立柱建物とか水田が検出されています。河内平野は、条理制にのつとつた地割が広範囲に施されています。この一辺一〇八メートルの正方形に区画された地割は、律令制による班田收受の制度による規格化によるものとされていますが、大阪線でも佐堂遺跡や友井東遺跡で奈良時代に比定される条里水田が見つかっております。

久宝寺遺跡の水田も、奈良時代から平安時代にかけてのもので、方位も条里の方向と一致しています。しかし、今でもそうですが、水田には十器を始めとした生活用品を散らかさないものであります。そのため、水田が検出されても、その時期を推測する判断材料が乏しく、いつも悩みの種です。だから、久宝寺遺跡の水田も、奈良時代から平安時代のある時期に耕作されたものとしか言えません。ともかく、奈良時代から平安時代にかけて、河内平野では条里制による大々的な開発が行われ、平野は活気に満ちたものとなるようです。

## 九、中世以降

中世以降、近世まで大阪線の調査では遺構があまり検出されません。これは、遺構が無かつたと言ふことではなく、壊されてしまつたためのようです。一七〇四年に大和川が堺方面に水を流すよう付け替えますが、それ以降、河内平野では縄作りを始めとした商品作物を盛んに栽培するようになります。そのために、水田を畑に変える必要から、山間に土を盛って嵩上げをする掘き掲げ田が大規模に作られます。久宝寺遺跡でも、この田園の作り変えがほぼ全面に行なわれているため、浅い遺構面はほとんど削半を受けて残つております。ひどいところでは、弥生時代後期の遺構面にまで、その影響が及んでいるくらいです。そのため、壊されにくい条里の坪境の畦畔の下とか、井戸のような地中深く掘られた遺構だけが検出されます。

## 十、終わりに

久宝寺遺跡は、河内平野の中心部に位置し、低湿地遺跡の特色を余す所なく持っています。繩文時代から現在まで、ほとんど途切れることなく遺構面が重複しており、各時代それぞれに興味深い遺構や遺物が検出されています。久宝寺遺跡も含めた大阪線の各遺跡の調査成果は、概要報告書として順次刊行されています。そして現在、大阪文化財センターの手で、それらを総括する本報告の作成作業が進められております。

ともかく、大阪線の調査は、日本発掘調査史上空前の規模で実施されたものです。地中深く埋

没した低湿地遺跡を、これほどまで大規模に調査した例はこれまでありませんでした。調査には一〇年の期間と膨大な費用が投じられましたが、それに負けない多人な成果を獲得しています。まだ解明しなければならない色々な問題も多いのですが、本報告を作成する過程で、十分に整理、検討を重ね、皆様に分り易い形でお知らせしなければと考えております。

本日は、拙いお話を理解しにくかったと思いますが、悪しからずご容赦下さい。これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

昭和六二年九月一六日

於 市立労働会館



柏原市域発掘調査の成果

古代からのメッセージ

柏原市域発掘調査の成果

柏原市歴史資料館長

竹下

賢

ただ今ご紹介いただきました柏原市歴史資料館の竹下と申します。柏原市は八尾市の隣、大阪府柏原市です。奈良県の橿原市に今井町という伝統的な環濠集落がありまして、そこへ見学に行くにはどう行つたらよいかという問合せの電話がよくかかってきます。「いや、うちは大阪でんねん」と答えますと、「そうでっか」と言って切られたりしますけど、お間違いのないようお願いします。

私は現在柏原市に住んでおりますが、元々は八尾でとれて八尾で育った人間です。久宝寺の三津で産まれ、長瀬の川で産湯をつかいまして、昔の西郷、今は山城町といいますが、そこへ二十二歳までおりました。柏原の方へ奉職すると同時に移り住んで、柏原市を中心として活動いたしております。小さい時から考古学が好きでして、もうお亡くなりになりましたが、清原得哉先生と山畠の古墳群や心合寺山古墳とか、あの辺全部を一緒に歩いた記憶があります。八尾市の牛駒山西麓を、ある時期フィールドにしておつたのですけども、柏原市にまいりまして、柏原を研究対象にするということになっています。

今年度三回目の文化財講座ということで、前の二回の講座とはちょっと毛色を変え、タイトルは「最近の発掘調査の成果」となっておりますが、最近だけじゃなくて、ちょっと古いものを一緒に考えてみたいと思います。

八尾・柏原の二つの地域には奈良時代、天皇がお泊まりになつた行宮というのがあつたんです。

## 柏原市域発掘調査の成果

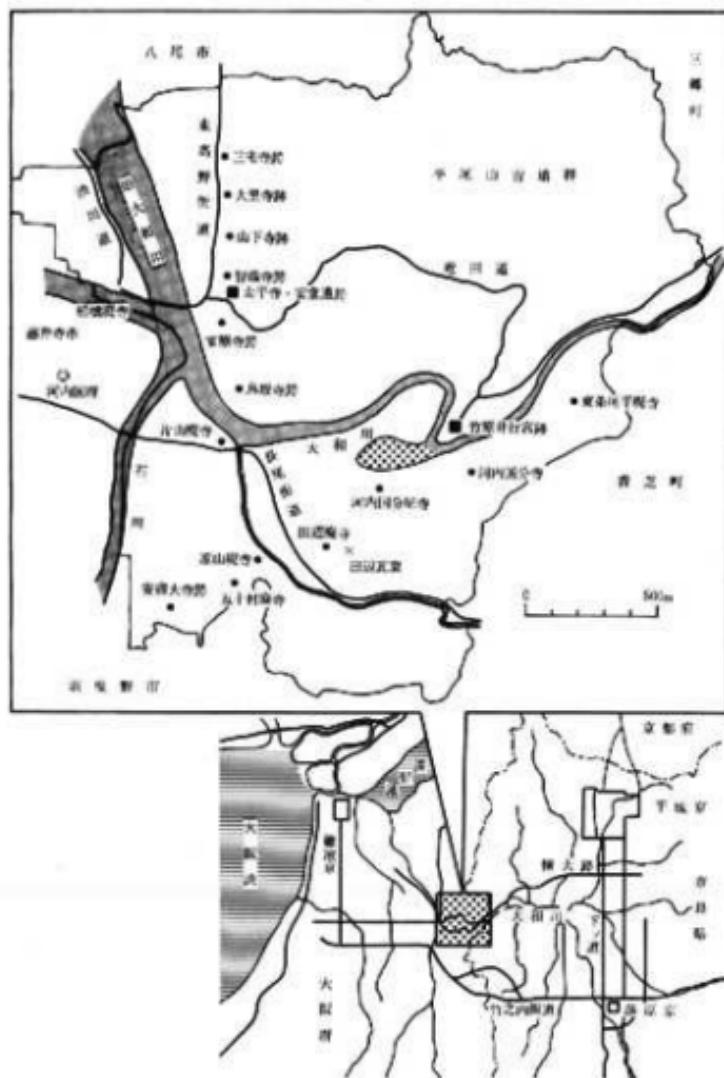


図22 柏原市内古代寺院址の分布

まず、図22を見て下さい。上の図は、柏原市だけを拡大したものです。まず、下の図で平城京と難波宮と二つあげています。地図では、ちょうど真中に柏原市があるわけです。だいたい平城京と難波宮との間が、四〇キロメートルございます。中間に柏原市が位置しますんで、約二〇キロメートル進んだら柏原市になるんだと考へて下さい。そこで、始めにお断りしておきますが、天皇が移動される時の行程が、だいたい一日二〇キロメートルです。私達が歩く速さが時速四キロメートル、昔から一時間に一里と申します。そうすると二〇キロメートルということは、五時間かかります。これは一人で歩いての話として、例えば学校なんかで生徒を連れて歩きますと、非常に時間がかかるわけです。そこで、平城から難波まで天皇が移動する時に、どれ位の人数が一緒に動いたかを考へていただきませんと、柏原で泊まつたということにならないんですね。それで、人數の記述がある資料として、資料①の最後がそうですね。「諸国駕ニ從エル騎兵六百六十人、天皇のかごに従つていた兵隊だけで六百六十人いるのです。兵隊だけでこの数ですから、その他いろんな役人を伴いますから七百人はくだらんでしょう。それだけの人がいわゆる隊伍をとつて動いたら、二〇キロメートル移動するのに一日行程になるじゃありませんか。そうすると、難波と平城京との間に宿泊施設がいるようになります。それが必要だからというので、いわゆる宿泊施設としての行宮を造れというふうな命令がでるわけです。それが資料②の『河内・攝津・紀伊等ノ國ニ行宮ヲ造営セシム』という部分です。宿泊所を造りなさいよという命令が七〇一年に出

されているわけです。そこで他に河内の国にどんな行宮があつたかというのが資料の③④⑤⑥⑧に出てくるわけです。その資料③では竹原井頓宮というのが出てきます。そして資料⑥になりますと智識寺南行宮と書いてます。資料⑥には弓束女之宅行宮と一行目に出でています。この三つの行宮について、天皇のお泊まりになる場所について、いろいろ本が出されています。一つは中河内郡誌、柏原町史それから柏原市史、そういう書物の中でこれら仮宮の位置問題が出てくるわけです。竹原井頓宮・弓束女之宅・智識寺南行宮はどこにあったのかという問題がありまして、全部ひつくるめて柏原市の高井田にあつたというのが昔からよく言われていた話なんです。ところが、なぜ高井田かというと、竹原井というのと高井田が似ているからという話です。これでは理由にならんということで、智識寺南行宮と言うから、智識寺の南にあつただろうと、それを高井田にしてはおかしいと柏原市史では書いてます。けれどもやっぱり、高井田説に引きづられて高井田にあつたとしていたんです。ところが例えば高井田にあつたという説として「竜田越」という本があります。これは故山本博先生の著で『続日本紀』の河内仮宮の記述について非常に細かく検討されている本です。そして、これらの宮だけではなく、その続きを出でます弓削宮につきましても、場所も一応ここだと確定するところまで書かれています。この本の中でも山本博先生は高井田説をとつておられます。ところが塙口義信先生今日もお見えですが、その先生が「古代史の研究」という関西大学から出た本の中で、この二つは名前が違うんだからやっぱり違う

だというお考えを展開されました。そして、智識寺南行宮については、智識寺の側にあり、竹原井については現在の高井田かもしれないが、ひょっとしたらここは狭いから、もう少し広いところを考えたらどうかというので、柏原市の青谷の辺から高井田にかけてという仮説をたてられたのです。文献史学の方から文章を細かく検討して、智識寺南行宮は智識寺に近接する地にあったのではないか、そして竹原井と高井田は違う、違うとしたら、高井田から青谷のあたりにあってしかるべきだという説をこの本の中で述べておられるのです。私は掘り屋ですから、掘つてそれ見合うものが出でてくれば、万歳です。そして、発掘調査の結果、確かにこれに間違いないといふことにたどりついています。青谷で遺構としては行宮に見合う建物跡が出てます。

さて、私が最初に申しました弓東女之宅行宮をえて出しますのは、一つ何かお話を出来ないかと思って出してみたんです。竹原井行宮というのが最初資料に出てくるのは七一七年、そして一番最後が七七年です。ですから少なくとも七一七年から七七年まではあったということです。弓東女之宅というのが出てくるのが七四九年、これだけです。これ一回だけです。そして智識寺南行宮というのは七五六六年に出来ます。これは、この年だけかという問題が出てくるわけですね。そこで竹原井行宮がこの期間存在するのに、弓東女之宅を行宮としているし、智識寺南行宮もあるのはおかしいと思っているわけです。それで資料⑪では「河内の離宮に行幸」と書いています。太上天皇と太后、この太上天皇というのは聖武天皇です。太后というのは光明皇后で

す。このお二人が河内の離宮においでになつてゐる。資料⑧では同じ二月二十四日に「河内國ニ至リ智識寺南行宮ニ御ス」この時智識寺南行宮においてになつてゐるのは孝謙天皇です。そうすると、この弓束女之宅行宮と智識寺南行宮に来られてゐるのは、両方共が孝謙天皇なんです。竹原井頓宮には聖武天皇が行幸されている。そうすると、ある考え方として、聖武上皇と孝謙天皇は同じ所に宿泊されず、それぞれ別の仮宮に泊まられるものと解釈することができます。竹原井行宮があるのになぜ、弓束女之宅行宮を造つたのかという理由が求められると思います。ということは、弓束女之宅行宮は孝謙天皇がお泊まりになるために造つたのですね。対して、竹原井行宮といふのは、聖武上皇がお泊まりになつてゐるのです。この続日本紀という本にはあんまり上皇の動きについては書いてくれません。天皇の動きが主体です。ですから例えば七五六年に聖武上皇が竹原井行宮へ泊まつているといふのは、資料としては万葉集に書いてある。天皇と上皇が同じ所へ来てもお泊まりになる所は別で、その為に宿舎も別に設けられてるんだということです。ここで、逆になぜ、新しく行宮を造つてまで米られたのかと申しますと、孝謙天皇が七四九年に河内國の智識寺にお参りになつています。何の為に智識寺においてになつたのか。それは資料⑦の三行目ですね。「去辰年河内國大懸ノ郡智識寺ニ坐ス虛舍那佛ヲ礼奉リテ則チ朕モ造リ奉ラント思エドモ」柏原市にこの当時あつた智識寺、ここに虚舍那佛という大仏さんがありました。それを「去辰年」というのは天平十年（七四〇年）です。智識寺に聖武天皇がおいでになつて、虚

舍那佛を私も造つてみようと思われて、それで造られたのが奈良の大仏です。そうすると、奈良の大仏を造る動機になつた、元になつた智識寺の大仏へお祈りに来られる必要性があつたのです。何をお祈りになつたかという事について、これは塚口氏の説をそのままおかりしますけども、まちがいないと私は思います。というのは資料⑥ですが、河内國においてになつたのは十月九日です。

「冬十月庚午、河内ノ國智識寺ニ行幸ス。外從五位下茨田ノ宿祢弓東女之宅ヲ以テ行宮ト為ス」とあります。塚口先生は、智識寺に天皇がお参りになつたのは何のためかとおっしゃつてます。この疑問を解く鍵が、東大寺大仏配です。この中に「勝宝元年歲次己丑、十月二十四日銅奉ルコト己ニオワル」とあり、大仏さんに銅を流し込んでいるんです。二十四日に銅を流し込んで完成したんです。その東大寺大仏記というこの資料で天皇が智識寺においてになつた理由がおのずとわかるわけです。自分が造る奈良の大仏に銅を流し込む前に、手本にした盧舍那佛にお祈りにおいてになつて当然でしょう。

次に問題は、「弓東女之宅がどこのことですか」ということです。この「弓東女之宅為行宮」というこの一行が続日本紀の中で特異な例であるということです。さつきから引用しています「竪田越」のなかでは続日本紀を非常に細かく分析しておられます。山本先生が、これは非常に特異な例だと言つております。資料⑫はこの本の一部分です。この中で「弓東女之宅為行宮」というこの一行の説明がさつぱりうまくいかないと書いておられます。私はこのとおりいつたらいいという解釈で

す。余分な事になりますが、仮宮というのは、天皇がお泊まりになる所をいいます。もちろん仮の宮です。それに対し字をあてると、何がでてくるかというと、まず「行宮」というのが出でます。そして「頤宮」というのが出でます。最後に「離宮」、これは全部天皇がお泊まりになるように造った建物をさすんです。そこで、この文字の使いわけについて、山本博先生はどうにもならんということを書いておられるんです。竹原井について考えてみると、文献によりますと、まず頤宮という形で出てきます。その次が離宮になつていて、最後には行宮と書いています。そうすると、お手元の資料⑫の五行目、「ところがたまたま竹原井の場合は、年を追つて頤宮から離宮、離宮から行宮と用語を変更したかのように見えるので、これは五十余年の間に歴代天皇が休養・宿泊され、その都度修造・設備の充実をはかつた結果、最後に行宮とよべるようになつたと考えるむきがあるかもしれない。もしそうなら行宮は「かりみや」の最上位といふことになるが」確かに竹原井については文献ではこう書いているんですね。そして、「頤宮・離宮・行宮の用語には、厳密な区別がなく、すべて「かりみや」であつて、そのとき思いついた用語で記録したのだろう。」というふうにおっしゃつてます。区別はないんだとおっしゃつてます。私は逆に正確に区別していると考えます。と言いますのは、青谷遺跡の発掘調査の結果、見事に建物が変化していくのです。私は頤宮→離宮→行宮と書きましたね。竹原井についてはこうです。しかし、建物の規模からいきましたら、次の順番になります。いわゆる仮の宮として手軽に造つ

た建物は行宮です。もう少しきちつと、回りの堀でも土堀にしたりすると頓宮になります。私の解釈では、礎石建物で瓦を葺いた施設を造つたら離宮と呼ばれるものと考えられます。ひよつとしたら段階として、瓦葺建物をもつて頓宮としているのかもわからないんですけども、まず掘立柱で簡単に造つた建物、これが行宮です。一応そういうふうな考え方だという事を、ここではおさえておいて下さい。時間があれば後ほど話をしてみたいと思います。そこでさつき申上げました、「弓東女之宅為行宮」という記述がちょっとおかしいんだというのも、そのまま今の資料<sup>15</sup>に書いてあります。「続紀には、右の他に頓宿というのがある。これは多くの場合、個人の私宅とか寺院を「かりみや」に充てたのである。」かりみやにはもうひとつ頓宿というのがある。これは多くの場合、個人の私宅とか寺院というもので、これをたまたま天皇の宿舎に使つた場合、それを頓宮というが、それでも尚、間違っているのがあるというのが、「天平勝宝元年十月九日」に「外從五位下、茨田宿彌弓東女の宅を以て行宮となす」とあるのがそれである。しかも、頓宮・行宮・離宮は国費で造るものである。だから、山本博先生は弓東女之宅為行宮という解釈について、個人の宅であるから頓宮でないといけないのに行宮と書いてある。それから個人名を使つているのもおかしいというふうに書かれています。山本博先生は「弓東女之宅為行宮」というこの一行はおかしな書き方をしていると書いてありますが、ところがこれを調べてみたら、これでいいんです。これは文字どおり弓東女之宅為行宮としたんですね。まずひと

つは、個人宅は領宿と書くのに、そう書いていないから統日本紀は間違っているというのではなく、私は統日本紀の記述は正しいと解釈します。もし、建ててある家をそのまま使って仮宮にしたならば、それは領宿でしょう。しかし、ここで言っている弓東女之宅為行宮、わざわざこれは「行宮トナス」と表現しているのです。どういうことかということは、よそにあった弓東女之宅を智識寺の南にもつてくる。解体して持ってきて、行宮として造営した。個人の家をそのまま使うのです。行宮とか頤宮とか離宮とか、もつとうと平城京でもそうです。そういうふうな天皇が泊まつたりする場所というのは、何か条件があるんじゃないかなと思いつた。一生懸命資料を搜していました。そうすると資料⑨・⑩をごらんください。今でもいっしょですね。建物を建てる時に中の建物を建てて回りを囲うのです。回りを囲ってから家を建てたらいけないとよく言いますが、この二つの資料は統日本紀から抜取ったんですが、両方とも垣根、いわゆる柵がちゃんとできていない。これは防御のために非常に重要なことなんですね。そうすると、その柵が充分できていないから、資料⑨の一行目の真中「今宮ノ垣未ダ成ラズ。」防守備ラズ。兵隊を立てて守らせた。資料⑩では「帷帳ヲ以テス」垣根ができるないから、柵ができるないからとばかりを立てた。回りにめぐらせた。こういうことをしているのです。というのは天皇がお泊まりになる所の防衛線の一番基本になるのは柵だという解釈をしてもいいと思います。京都の山崎という所がありますが、山崎にも行宮というのがあります。これは昔は伝送機関として駅というのがあり、そこへ

馬を置く、中繼地みたいなものがあつたわけです。山城の資料館においてになる高橋美久一さん  
が駅舎の建物の復元図を作られたんですけど、これでもやつぱり回りにきつちりした柵ができる  
います。そういうものから考えて、行宮というのは建物はさることながら、もう一つ大切なのは、  
回りの防衛柵であると思うのです。柵というものをひとつ的基本にすると『弓束女之宅為行宮』  
というのは、弓束女の家が智識寺の南に建っていたのではなく、天皇がお泊まりになるのに便利  
な場所、智識寺へお参りになるのに一番いい場所へ持つてきて建てたのです。当時は建物を動か  
すというのはよくあることですね。例えば藤原京から平城京へ都が移りました。それにともなつ  
てお寺も全部建て替えて移動しました。当然、個人の家も移動したようです。初瀬川から佐保川  
をつたつて、移動させたというふうな事は、万葉集の中に書いてあります。初瀬川から佐保川を  
つたつていかだに組んで物を流したようです。そうすると、弓束女の家もここへ持つてきて建替  
えたんじやないかと解釈したら、山本博先生がおっしゃってる不自然さはないわけです。そうす  
るともうひとつ、山本博先生が個人の名前を使っているのはおかしいとおっしゃりますが、こ  
れは他に書きようがないんですね。智識寺へお参りになつた。お泊まりになつた場所は弓束女の  
家を持ってきて行宮として造つたんだ。これ以上言い方がないんですね。ただ、七五六年に  
と智識寺南行宮と位置を明確に示してあるんですね。私は『弓束女之宅為行宮』の行宮と智識寺南  
行宮とは一緒であると解釈していいんじゃないかと思います。次に、山本博説の行宮を造るのは

国費であるという事になつてくると、国費で造つたという証拠を搜し出せばいいわけです。その辺を調査成果ということでスライドを見てもらう予定をしています。それからもう一つ、お手元の資料⑧の二行目、「天皇智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂等ノ六寺ニ幸シ礼佛ス。」これが河内六寺もしくは六大寺と言われるものです。これだけのお寺に孝謙天皇がお参りになつてゐるわけですね。問題はこの六つのお寺がどこにあるかということです。これがはつきりしなかつたら、智識寺南行宮の位置が決まりません。そこで、図22を見てください。東高野街道沿に順番に書いています。智識寺の南側に太平寺・安堂遺跡と書いてますね。今は安堂遺跡になつています。文献でいけば、ここに智識寺南行宮がなかつたらうそなんですね。天皇がここへお泊まりになつてゐるんです。そうするとその記録でいきますと、南の行宮から出発なさつて一番最初に智識寺へ参拝されるのですから、必ず北を向いて進まれたわけです。智識寺の位置を確定させたら、行宮の場所がだいたい予想できます。それができたら、予想位置を掘れば行宮跡が出てこないといけないわけです。この辺の経過についてスライドを見ていただくわけですが、統日本紀の記述にある孝謙天皇の六寺巡拝について述べられたのが「柏原市史」です。ひとつひとつのお寺について柏原市史は、どちらへんにあたるということまで指定されます。鳥坂寺が高井田、家原寺が安堂、智識寺が太平寺、山下寺・大里寺が大県、三宅寺が平野という村、昔の村名と解釈して下さい。こういうところになるんです。例えば大里寺を「だいりじ」と読めば、小字で残つてゐる「大龍

寺」にあたるのです。そこを掘ればちょうどこの時期の白鳳から奈良時代にかけての瓦が出てきます。端から端まで歩いても三キロメートルもない範囲の中にこの六つの寺が存在しているのです。鳥坂寺の場合も小字に「戸坂」というのがあります。智識寺の所には今も般若寺というお寺があるんですけども、その縁起の中に智識寺というのが出てくるんです。觀音寺というお寺は智識寺の法灯を伝えられてるんだという記録が出てきます。家原寺については発掘調査の結果、寺の近接地に設置した池のまわりに礎石をもつてて、護岸として使っているので、その近辺にあるということはわかるんですけども、調査では確実にこれが寺だというのは出てきません。村の中で話を聞きますと、ある家の床下に礎石があつて、それを今もそのまま、建物を上に建てて使ってることで、そのお家が建替えて、上を撤去してもらつたら、すぐ調査できますから、まあ何十年もたつてての家ですから、先が近いだろうと楽しみにしてるんです。智識寺に関しては、小字「寺庭」から塔跡の一帯やきれいな溝・瓦などがいっぱい出てきましたから、間違いないでしょ。山下寺は、瓦が出てきたんですが、正確な遺構は今のところ何ともいえません。山の斜面を階段状にきつてまして、上の畠から下へ落としたようで、瓦がコンテナに何百箱か出ましたが、建物の明確な跡は出ていません。大里寺については礎石が出てますが、話を聞いてみると、どうやら元の場所から動かされてるようです。ちょうど百メートル程離れた所に平らな所があるんですが、その家の石畠に礎石の作り出しのあるようなのが入つてたりしますんで、

## 柏原市域発掘調査の成果



写真55

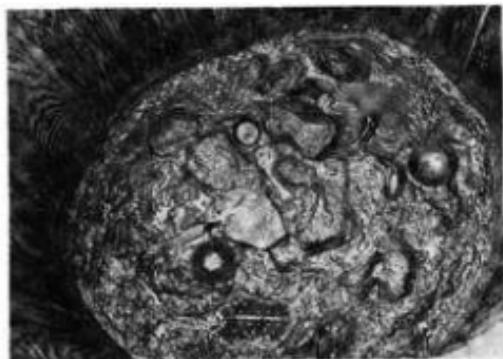


写真56

どうやらその辺だと思われます。同じ様に三宅寺についても、平野の所でやっぱり礎石が石垣に入つてますから、この辺だろうといふことがいえます。しかし、明確な事は言えないんです。おもしろいのは掘つてみないとわからないということで、いい資料が出でますので、スライドを見てください。

写真55 これは井戸です。

鳥坂寺跡と考へている所の、塔・本堂・講堂といふのは一つの尾根の上に建つてゐるのですが、小さな谷一つをへてまして、一段下がつた所におそらく僧房跡と思われる跡が出てきなんです。その側を掘つたら井戸が出てきました。

写真56 その井戸は回りに板をずっと並べていて、内

部から瓦や土器がいつ  
ばい出てきました。



写真57

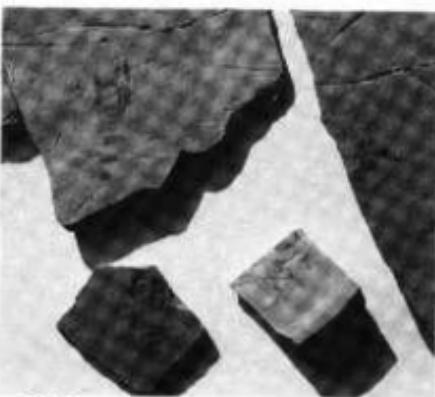


写真58

写真57 出てきた土器  
の中にちゃんと書いて  
くれていたんです。  
「鳥坂寺」ときつちり  
書いてくれているので、  
ここが鳥坂寺で間違い  
ないです。

写真58 この土器には「三昧」と書いてます。お寺の坊さんが、三昧経を唱える時に使うような  
お皿に「三昧」と記したのかもしれません。このように土器に墨で字を書いているものを墨書き土  
器と言います。

写真59 これは先程お話ししました、観音寺で今も使われている経机です。何のへんてつもない  
経机ですけども、裏に智識寺のものだと書いているのです。ただ、この文字が書かれたのが、奈  
良時代だと断定できるかどうかは疑問ですが、観音寺自身が智識寺の法燈を伝えるものだと言っ  
ている以上、そんなに離れた場所ではないと思います。

## 柏原市域発掘調査の成果

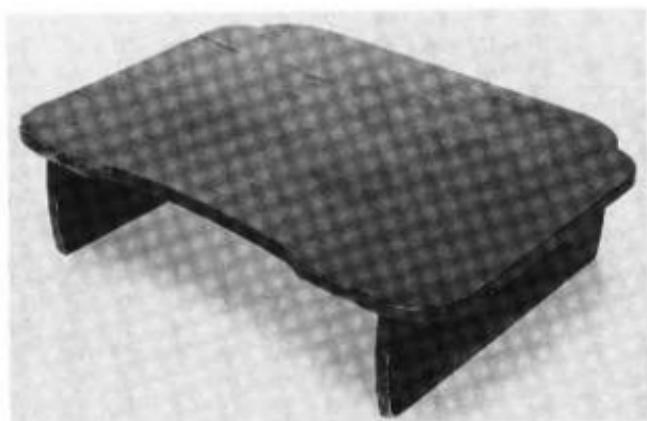


写真59



写真60



写真59裏面

写真60 深さ一・五メートル程の穴に、これだけ木屑が入っていたんです。大体コンテナで三〇箱程の木屑が出てきました。このことから、さつき申上げました『弓東女之宅為行宮』というのが改築したのだということになるわけです。

皆様方のお手元の図23を御覧下さい。その中の5ですね。これは木筒といわれる種類のものです。「若狭ノ国遠敷郡」「野里相臣山守調塩三斗」と書いてあります。これは先程の写真60の穴から出てきたのです。こんなのが柏原みたいな所から出てきたら不思議なんです。塩は基本的には平城京へ納められるのですね。ところが智識寺の南へ弓東女之宅を運んできて行宮に造りかえた為に、大工さんに米と塩を手当として出す必要性があるわけです。そしたら木筒が出てきても不思議ではないんです。というのは、本来、木筒は、平城京へ着いた時点で魔棄されてもいいんです。誰が納めたのかわかれればそれでいいんで、後は平城京で塩三斗がこの袋に入ってるんだと確認したら、それをどこへ運ぼうと勝手んですけど、こういう荷札がついたままのものが柏原へ運ばれてるんです。同じ大きさのもので、同じ人が書いたものが平城京からも出土しています。それから近江国からは何を運んでいるかというと、図23の2・3・4ですね。「近江ノ国ノ浅井郡田根郷」それから「近江ノ国ノ益田」の方です。何を運んだかというと、こちら辺は江州米です。近江の国からは米が運ばれます。そういう所から塩と米が、平城京へ納められたものが柏原へ流れ込んできている。これは先程の、行宮を造るのは國費でないといかんという山本説の証明になります。又、今の穴から出てきた木くずの中に、柱を削ったものが出でくるんですね。例えはほぞ穴があつても、それをひと皮めくつてしまふんです。穴を開けてきれいに作ったやつをなぜもうひと皮削ってるのか。これは建替えでしかないんですね。しかも、ちょうど削つたく

柏原市域発掘調査の成果

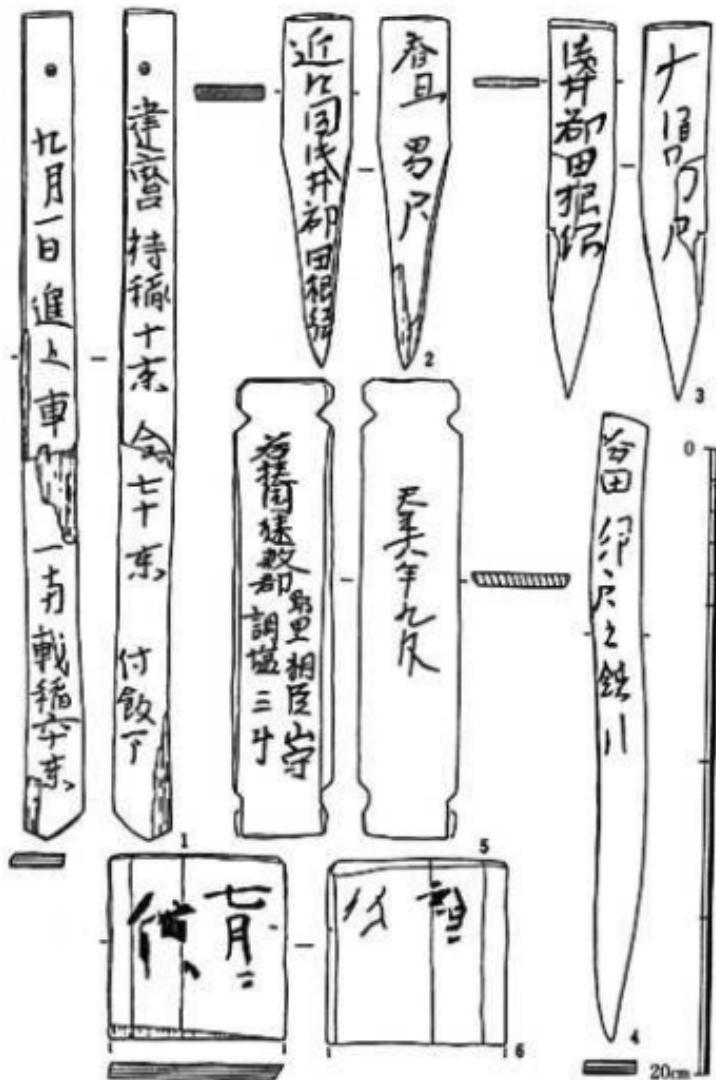


図23

す、のこぎりで建築材の端を切落としたものや、やりがんなで削った削りかすというようなものが、今の穴にいっぱいいつまっていたわけです。その中に先程のような木簡も出てきたわけです。そうすると、どこかで建てていた建物を智識寺の南へ運んできて、そこで行宮として造り替えた。そして、出来上がったものが智識寺南行宮と称されるようになったと考えられます。ただし、調査した場所はあまり広い所ではないんで、行宮として建てられた建物の全容はわかりません。だいたい、建物を建てた側に穴みみたいなものを掘りませんので、もう少し離れた所だと思います。

写真61 これが先程、図23で取上げた木簡です。天平十八年とちゃんと年号が書いてあるのです。

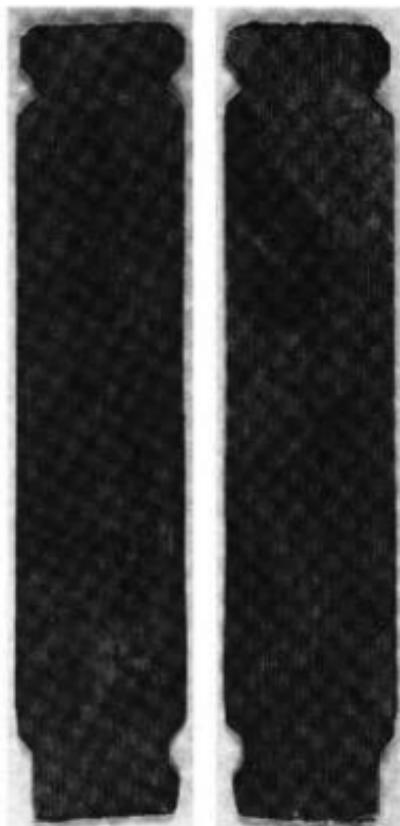


写真61

## 柏原市域発掘調査の成果

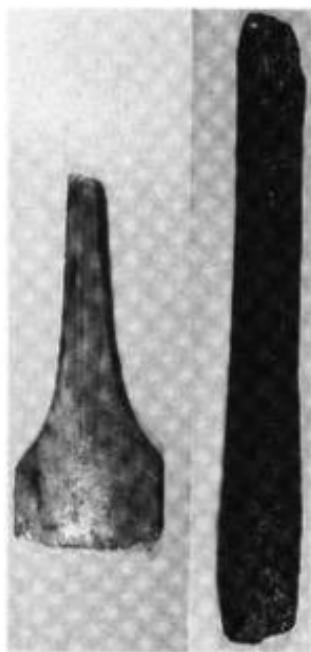


写真63

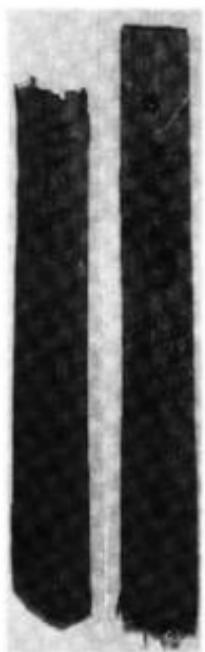


写真62

天平十八年九月に塙を平城京へ運んだんですね。少なくともそこから何年か後に柏原へ来るんですから、天平十八年（七四六年）以前の工事ではないはずです。これに近い年に工事があるとしたら、七四九年の『茨田宿弓束女之宅為行宮』というこれしかないです。年号の上からも、この考え方方が裏付けられると思います。

写真62 これは長いもので、送付状です。「建磨呂ノ持稻十束合ワセテ七十束 飯万呂ヲ付ケル」車一台に七十束乗せて運びますとう送付状なんです。

写真63 これはしやもじです。こういうしやもじがいっぱい出てきます。右側のものは、ひょっとしたら金づちか何かの柄かもしません。折れたんでしよう。

写真64 これはおはしです。今の割箸とたいして変わりません。そこらへんにある木を適当に削つて食べたら捨てたみたいです。

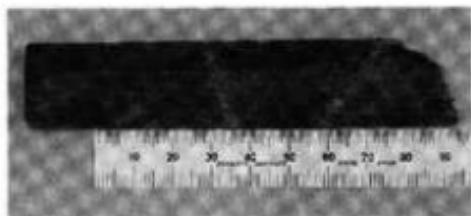


写真65

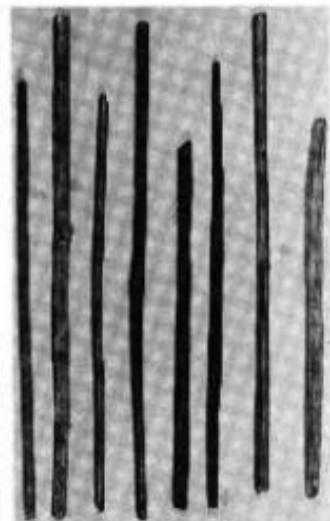


写真64

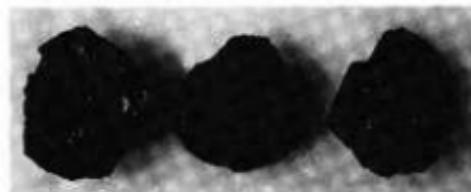


写真66

写真65 これはさしなんです。見えにくいで  
が、目盛りがついてるんです。大工さんが仕事  
をしていて、折れたから捨てたんでしょう。

写真66 栗の皮です。他に桃・梅・ひょうたん  
の種も出てきました。栗などよく食べています。  
これらはゴミですから、いつしょに捨ててある  
んです。御飯は残りませんが、茶碗としての土  
器も出てきましたから、御飯も食べていてある  
しょ。いろんなものを食べてますね。

というような事で、初めて見ていただきまし  
た穴の中からは、国費で造ったことを証明する  
木筒が出てきてるし、建替えたということを証  
明する木ぎればっかり出てきてる。木ぎれの  
中には朱を塗ったものもあります。朱がついて  
いるような切れ端が出てくるということは、建  
替えでしかない。そうすると弓東女之宅為行宮

## 柏原市域発掘調査の成果

という一文は、文字どおり受取れば間違いない。又、天皇がお参りになった河内六寺の位置についても、続日本紀の記述どおりの順に並ぶと考えても間違いないと思います。そうすると南の行宮の位置も自動的に決まってしまいます。調査結果からも智識寺跡の南側、智識寺側の方は小字を中門といい、中門から道一本隔てて南側を掘つたら、さつきのゴミ溜に当たりました。そうすると、この位置も間違いないだろうと思ひます。

竹原井行宮については、今日は残念ながらお話をできませんでした。これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

△資  
料▽

① 19は吉川弘文館『新編歴史大系』より抜粋

於山本勞働会館

續日本紀卷二 文武天皇(應永二年二月一八日)

而後大變，有萬物莫能知者。○身外無物，則無所有。○身外無所有，則無所有。○身外無所有，則無所有。

資料④

○三月奉行各處設點。中臣○成貢、東夷使、日韓使、南洋使、有東方使、西蕃使。○唐使、宋使、高麗使。○成貢奉天授皇帝。○百濟使、新羅使、大韓使。三國奉天授皇帝。○唐使、宋使、高麗使。○成貢奉天授皇帝。○百濟使、新羅使。

資料⑤

○壬午（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑥

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑦

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑧

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑨

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑩

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑪

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑫

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑬

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑭

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑮

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑯

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑰

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑱

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑲

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料⑳

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料㉑

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

資料㉒

○庚子（中和）○正月。太上天皇御行幸，至御所御殿。

續日本紀卷一 建武天皇（太平和寶元年八月—十一月）

續日本紀卷二

豐受天皇（天平勝寶元年二月—五月）

續

日本紀卷三

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

天平勝宝八歳丙申の二月の朔乙酉して二十四日戊申の日、太上天皇、太后、河内の離宮に幸行して、信を終子を以ちて難波の宮に傳奉し給ひき。下略。

(前略) 緒紀の離宮は、他の「かりみや」と大差のない建物である。しいて共通するものをとりあげるなら、玉津畠に造られた離宮の旧址は、和歌山市南方、御羅山にあって、和歌浦を一望にわざめる絶景の勝地という点である。といつてもそれは背景であって、修学院などのように離宮それ自体の中に広大・絶景の境域をもつたとは違うのである。離宮も含めて「かりみや」のすべては、通常に費した日数から推せば規模・設備に著しい差異があったとは思えず、格式にも差をつけたとは考えられない。ところがたまたま竹原井の場合には、年を追って離宮から離宮、離宮から行宮と用語を変更したかのように見えるので、これは、五十余年のあいだに歷代天皇が休養・宿泊され、その都度修造・設備の充実をはかった結果、最後に行宮とよべるようになったと考えるむきがあるかもしない。もし、そうなら行宮は「かりみや」の最上位ということになるが、短日月に造ったのも行宮であるから、そうともいえない。思うに、離宮・難宮・行宮の用語には、厳密な区別がなく、すべて「かりみや」であって、そのとき思いついた用語で記録したのだろう。

緒紀には、右のほかに領宿というのがある。「これは、多くの場合個人の私宅とか寺院を「かりみや」に充てたのであるが、中には行宮と混同した例もある。天平勝宝元年十一月九日に「外從五位下、茨田也<sup>アシタカ</sup>、東女の宅を以つて行宮となす」とあるのがそれである。この行宮は、前記の行宮と同じでない。離宮・難宮・行宮はすべて国費による造営である。弓束女宅は個人の邸宅だから止くては領宿である。また、領宿の場合は、すべて地名を冠して呼ぶべきなのに、これは個人名を冠しているのも異例である。

聖武天皇・大平十二年十一月二十九日、「是の日、山辺郡竹翁村堀越領宿にいたる」をはじめとして、十一月に石占領宿・十一月に横川領宿・大上領宿・野洲領宿・禾津領宿・正井領宿があり、これらに混じって安保領宿・河口領宿・赤坂領宿・不破領宿が見えてくる。前述のように個人宅が領宿・道當司の造ったのが領宿だから、ここはこの区別によって書きわけたと思えるが、「弓束女宅のような例もあるから断言できない。」(巣山越) (山本博著)

あとがき

昭和六二年に第一集を刊行してから、早くも二年が過ぎてしましましたが、多数のご声援とご協力を賜わり、ようやく第二集を発行することができました。

今回は六一・六二年度にご講演いただいた内容を掲載しました。埋蔵文化財に関する内容ばかりになりましたが、古代の八尾に想いをはせていただければ幸いです。第一集同様、話し言葉でまとめていたため、読みづらい点もあるかと思いますが、講座の熱氣が伝わればと思います。

本書の作成にあたり、ご講演いただいた先生方には資料の提供等、多大なご援助を賜わりました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

平成元年三月

八尾市文化財調査研究会報告21

八尾あれこれ  
**文化財講座記録集2**

発行 平成元年3月

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号  
☎0729-94-4700

印刷 近畿印刷センター

